あなたの持っている本当の力

超越神力（ちょうえつじんりき）

PART—2

宿命通

前生を知れ！死生智の秘密

巻頭特別対談

麻原彰晃VS
カムトゥール・リンポチェ
（チベット仏教ニンマ派の成就者）



麻原彰晃

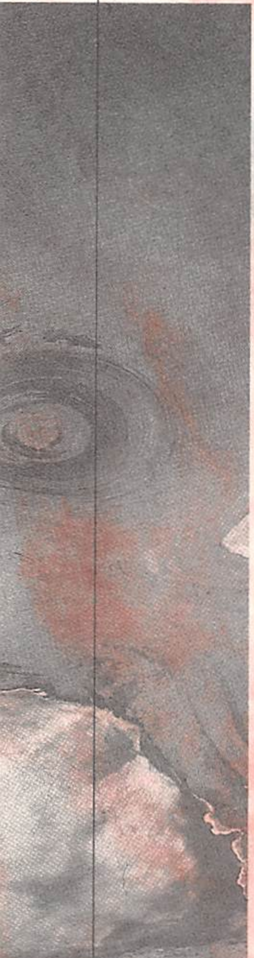




あなたの持っている本当の力

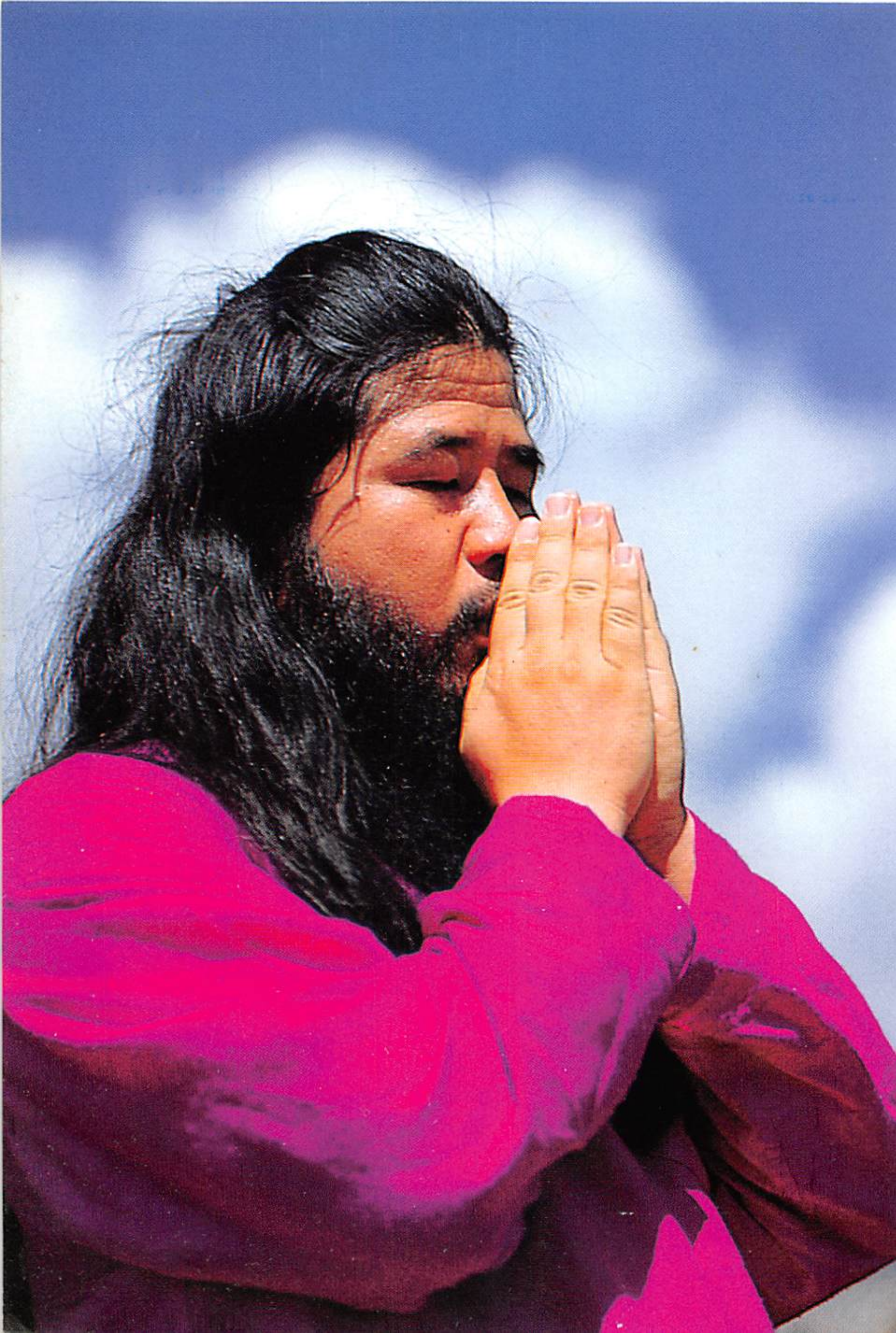
超越神力（ちょうえつじんりき）

麻原彰晃



PART——2

前生を知れ（宿命通）！　死生智の秘密





はじめに

宿命通
――過去世を知る力

古今東西には、いろいろな教えが存在している。大きな宗教を列挙すると、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教などである。そしてわたしたちは何の因縁だかわからないが、これらの信仰の一つまたは複数を信じている。

しかし、それらの教えのどの教えが正しくてどの教えが正しくないとか、どの教えはどの教えを包含しているとかいうことを、学問によって知ることはできない。

釈迦牟尼(しゃかむに)は『創世期経』の中で学問の発生について次のように説いておられる。

「森の中で一人で静慮（思索）できなくなった神聖行の修行者は、町の近くで住み、経典を編さんした。これが学者の始まりである。」と。

つまり、学問は静慮がサマディ（三昧）に到達することのできなかった修行者が、生活のために始めた仕事ということになる。しかも、初めに述べた大宗教の開祖の方々はサマディに到達していたから、その人たちの教えの真偽のすべてを学問によってはかり知ることはできないのである。

もし皆さんがサマディに到達し、サマディから来る宿命通によって多くの過去世を思い出し、すべての世界を経験することができるなら、どの教えが正しいかなどの難問も氷を火であぶるように簡単に氷解することができるであろう。

ところで、この宿命通は、どのようなプロセスで体得することができるのであろうか？

宿命通がつく前には必ず次のような超越神力を経験する。それは変化身（この

肉体以外の別の身体）の体験、天耳通の体験、そして他心通の体験である。
　この前期三つの超越神力はまだ人間の枠組みを超えてはいない。しかし、この宿命通から人間の枠組みを超えるのである。わたしの宿命通がつく前後の体験をお話しししよう。
　当時、わたしは渋谷にあるマンションの一室で激しい修行に入っていた。ある日、サマディに入り、わたしの変化身が大変明るい、ギラギラ輝く、しかし全く熱くない太陽のようなものに向かって飛んでいく経験をした。この後わたしは宿命通を得たのである。
　日本にも多くの宗教があり、宿命の話をお書きになる方々が今まで多く存在した。それらの体験は、本物の体験もあるだろうし偽りもあるだろう。その判定法をここで紹介しよう。
　意識は連続している。よって一生前をはじめとしてわたしたちが自己の宿命（意識に宿された前生）を連続的に思い出すならば、それは正しい宿命通という

ことができるし、そうでないならば、不確実な宿命通か偽物の宿命通ということになるだろう。

さらに、それが宿命通だと判定する場合、次の三つの条件を必要とする。第一は大変明るい世界であるということ。第二は、宿命を経験している時の流れと、現実の時の流れとの間に時間的ズレがあり、必ず宿命の世界の時の流れの方が速い。

第三は必ずナレーションが入るということである。それは、その前に得た天耳通の力によってであると思われる。

この三つの条件を備えたとき初めて宿命通ということができるのである。

死生智
——転生先を知ったり、様々な世界とつながる力

さて、次に宿命通よりいっそうレベルの高い超越神力についてご説明しよう。それは死生智と呼ばれるものである。

死生智は宿命通がついていないと生じることは決してあり得ない。しかし、宿命通がついているからといって、つくものでもない。きちんとしたプロセスを経ないとだめなのである。

まず、サマディに入って、暗闇に意識が没入する経験を、何度も何度も行なう。次に代謝が異常に落ち、完全に呼吸が止まり、心臓が停止する。そして、この停止状態を過ぎると、いろいろな世界の光が降りてきて、その光に意識を集中して飛び込むと、ヴィジョンが見えてくる。そのヴィジョンによって自分の次の転生先を知ったり、いろいろな世界とつながったりすることができるのである。

この死生智は、最後の超越神力といわれている漏尽通（完全なる絶対なる神の叡智）の一歩手前である。最高の超越神力なのである。

なお、今年の五月にインドのダラムサラーで行なわれた、チベット仏教ニンマ派の成就者カムトゥール・リンポチェ師との対談で、師がわたしの体験を聞き、

「それを聞いて大変うれしい。それは、完全なる絶対なる神の叡智を得た素晴らしいステージです。」

と言われている。これは、わたしの超越神力の正しさの証明となるものと思われるので、巻頭特別対談として掲載させていただいた。

なお、原始仏典にも、宿命通と死生智についての記述が見られる。

「このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は前世の生き様の回想精通に心を定め傾注します。

そこで、彼は様々な前世の生き様を思い出します。

すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、

『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。』

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出すのです。

……(中略)……

このようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増

長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は生命体の死生精通に心を定め傾注します。

彼は清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体が要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解します。

『尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において悪行を具足し、言葉において悪行を具足し、意識において悪行を具足し、聖人を非難し、誤謬見解を抱き、誤謬見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である地獄に転生した。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において善行を具足し、言葉において善行を具足し、意識において善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解を抱き、正見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、

幸福に向かうことである天の世界に転生した。』
と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体がその要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解するのです。」

（『出家修行者果報経』より）

一九九一年秋

著者

C O N T E N T S

目次

超越神力
あなたの持っている本当の力

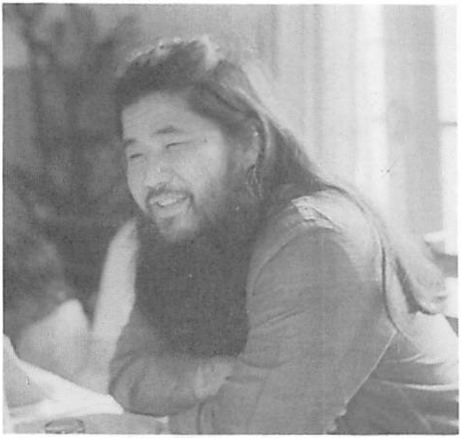
PART 2
前生を知れ！

CONTENTS

第一章

〈巻頭特別対談〉

麻原彰晃VSカムトゥール・リンポチェ



（尊師）近ごろのわたしの状態をご説明しますと、これは今回ダライ・ラマ法王にお会いしに行った理由でもありますけれども、ガンダルヴァとか、あるいはナーガとか、あるいはサントゥシタとか、あるいは夜摩（やま）、あるいはブラフマンとか、それらをよく霊視をするようになってきています。あと、インドラ、光音天もですね。

（リンポチェ）チベットとインドでは、同じように体はこの世界にいて、心がそういう世界に飛ぶということはよくあります。

（尊師）で、おそらくこれもブラフマンの世界だと思いますが、そこに修行の道場があっ



て、そこで空中をグルが飛来していましてね、まあこれはわたしの未来生だと思うんですけれども、そのときのグルはわたしだったわけです。

そこのペットはね、虎でした。しかしその虎はあるときは人間のような形をとって、あるときは虎の形をしていました。で、そこで多くの者が修行をしていて……。

その世界もブラフマンの世界じゃないかと思うけれど、それはどうでしょうか。

（リンポチェ） ブラフマンの世界だと思います。その世界ではエネルギーとシステムを完全にコントロールできる人は動物とか人間と



か、そういうふうに体、フォームを変えることができますから、そうだと思います。

（尊師） まあ、自分自身の今の状態からいくとダルマカーヤ（無色界）からサンボカカーヤ（色界）、そして今ニルマナカーヤ（現象界）にゆっくりゆっくりと落ちていってるというか、経験がどんどん深まっていってるような気がします。

というのはどういうことかというと、まず、外側の世界は（視力を失っているので）完全に見えないわけだけど、内側の光というのは外側の昼間の光よりもものすごく絶えず強い状態です。安定しているし、相手の、例えば



バルドー（発している光）も瞬時にわかるし、それからポア（自分や他の意識を高い世界へ引き上げること）したときに、その世界の光が降りてきて、その一粒一粒がね、その世界のヴィジョン化されていっています。

（リンポチェ） ニンマ派の伝統によりますと、トゥゲ、尊師がおっしゃる粒々、これをトゥゲといいますけど、非常に高い悟りを得た人は、そのビンドゥーが徐々に徐々に大きくなっていくのを見ることができます。これはわたくしの経験と非常に似ていると思います。

（尊師） そうですか。

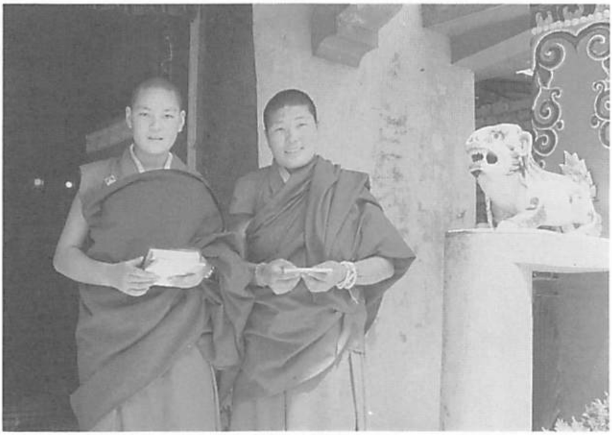
（リンポチェ） ダルマカーヤというのは他の



生き物たちにとってはあまり利益がありません。サンボガカーヤとニルマナカーヤの方が高いステージで他の生き物に対して利益があります。

（尊師）ところで、あなたに教えていただいた、例えばツァンダリーのプラーナーヤーマにしろ、あるいは、いろいろなアドバイスにしろ、その貴重さを身に染みて感じております。

最後に一つ質問したいんですけれども、今わたしの状態というのは、意識ははっきりしていて経験が止滅しているという感じなんです。例えば何か食べますよね、その味覚が思



い出せないとか、あるいは、いろんなフィーリングが、例えば痛みがあるはずなのに痛みが全くないとか、あるいは苦しみがあるのに苦しみがないとか、わかるかな、要するに完全に経験が止滅している状態で、それでいて意識と光はどんどんどんどんどん強くなっている段階なんです。

(リンポチェ) それを聞いて大変うれしいと思います。非常にうれしいです。これはイェシェといわれている人が経験できる段階で、普通の人は経験できない段階です。それは非常に、最高の智慧(ちえ)を得た段階です。パーフェクト・アブソリュート・ディヴァイン・ウィ



ズダム（完全なる絶対なる神の叡智）を得ることのできた素晴らしいステージです。
（尊師） わかりました。ありがとうございます。
（リンポチェ） 尊師のご長命をお祈りいたします。尊師ご自身が他の生き物を助けるためにこの世に長くとどまる決心をなさらなければいけません。
（尊師） トージェ・チェ（ありがとうございました）。
（リンポチェ） 今、お茶を用意しています。
（尊師） 最高の法というお茶をいただきました。



それから、あなたもすべての魂のためにできるだけ長くこの人間界におとどまりになってください。

（リンポチェ） トージェ・チェ。

第二章　前生を知れ！

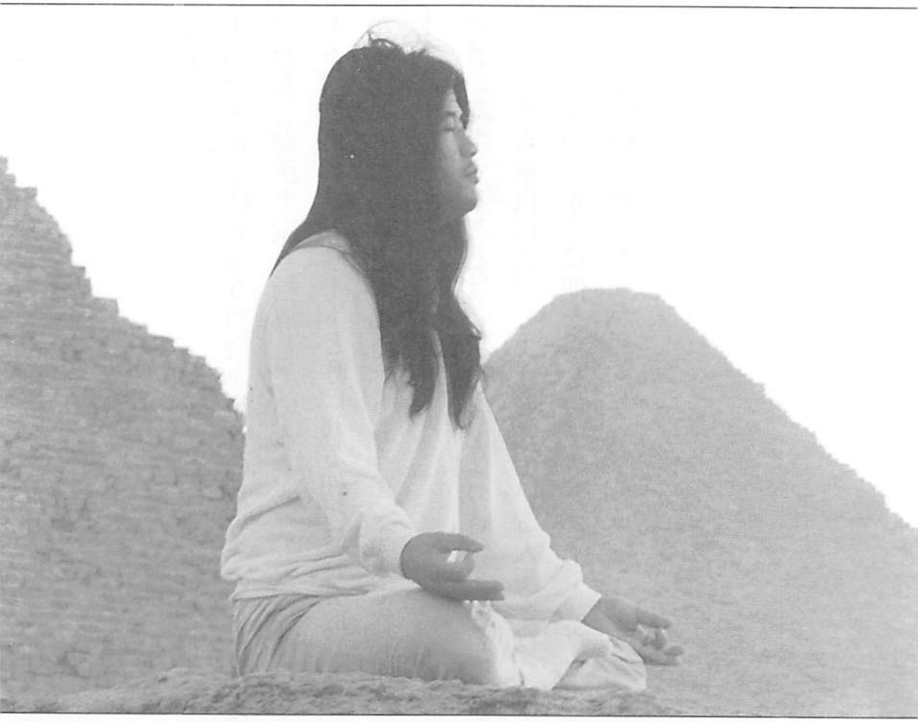
その一　甦る過去世——それはわたしだった！

◉シヴァ大神は示唆した——「エジプトへ飛べ！」

一九八七年七月、わたしはシヴァ大神にエジプトへと飛ぶよう指示された。なぜ今エジプトなのだろうか？　わたしの修行はエジプトにはあまり縁がなさそうなのに、エジプトへ行けとは？　しかし、わたしのアストラル世界のグルであるシヴァ大神が意思されたからには、何か訳があるに違いない。ひょっとしたら、今回もイニシエーション（秘儀伝授）を得ることができるのだろうか？　わたしは運命を天に任せ、エジプトへと旅立った。二十九日のことである。

思えば、半年前も同じようにシヴァ大神に指示されるままにインドへと向かっ

第二章　前生を知れ!



たのだった。そして、インドに亡命しているチベットのダライ・ラマ法王をはじめ、何人かのチベット僧と語り合う機会を得たのだ。そのとき得た秘儀伝授の方法や修行法は、わたしが法を説き指導している「オウム真理教」を飛躍的に進歩させたものである。特に、リトリートと呼ばれる独房修行を取り入れたことによって、弟子の中から三人もの成就者が出た。もちろん、三人で終わることなく、続々と成就者が誕生する予定である。

こんなに成就者が誕生することは、釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)の時代を除いて例のないことなのだ。これは、これから危機に直面しようとしている人類を救うべく、シヴァ大神が助けてくださっているからに他ならない。エジプトでシヴァ大神はわたしに何を知らせようとしているのだろうか?

◉ピラミッド――砂漠にそびえる太古の叡智

エジプトの大地は、その九十パーセント以上が人間の居住を許さない砂漠である。砂漠とナイル川流域に限られた少ない緑が、不思議なコントラストを見せている。

エジプト人の象徴ともいうべきピラミッドが点在するのは、ちょうど砂漠と緑の接点に当たる。一番古いピラミッドは、古王国時代・第三王朝のジェセル王の階段ピラミッドである。実に四千五百年以上もの、気の遠くなるような長い歳月、エジプトの変遷を見てきたということになるわけだ。

さて、最も有名なピラミッドといったら、何といってもクフ王の大ピラミッドということになろう。クフ王の大ピラミッドは、エジプトの首都であるカイロから程近いギザという所にあり、すぐそばにあるカフラー王のピラミッド、メンカウラー王のピラミッドと共に第四王朝時代の三大ピラミッドとされている。なお、

スフィンクスは、カフラー王のピラミッドの守護神と見られている。
しかし、クフ王の大ピラミッドは、いまだに多くの謎に包まれている。これらの謎は、現代の科学をもってしても解明できず、数々の論議をかもし出しているのだ。例を挙げるならば、

・古代エジプト人がどのように巨大なピラミッドの石を切り出し、また、運んできたのか?
・本当にピラミッドは王墓だったのだろうか。
・どれくらいの年数をかけて造られたのだろうか。

といったような、初歩的なことすらはっきりわかっていないのである。
わたしが日本を発つわずか一週間前にも、早大ピラミッド調査隊の吉村助教授が新説を発表した。それは、今までの通説を覆すもので、次のような驚くべき内容であった。
――クフ王のピラミッドは、通説にあるような王の墓ではない。クフ王、カフ

ラー王、メンカウラー王の三大ピラミッドとスフィンクスを一体として、死後の世界を立体的に再現したものである——

真相はどうであれ、わたしたち後世の人間の、古代エジプトに対する夢は尽きないようである。一体、彼ら古代エジプト人たちは、何のために、どうやって巨大なピラミッドを造ったのだろうか？

◉解けたピラミッドの謎——ポアの特殊装置だった！

わたしがクフ王の大ピラミッド内部に初めて足を踏み入れたのは、エジプト入りして三日目のことだった。小さな入り口に身体が入った途端のことである。わたしのクンダリニーが急激に上昇したのである。

（これはどうしたことだ？）

不意に何らかのエネルギーが、わたしに作用したらしい。わたしは驚きながら

も、すぐさま精神統一をした。そして、このピラミッドを形成している、約二三〇万個と推定される巨大な石灰岩の一つ一つに〝念力〟が込められていることに気付いたのだった。その念力は、石に強い上昇傾向のエネルギーを与えていた。数千年を経てなお衰えない念力のパワー。古代エジプトにどんな人が存在したのだろうか?

クンダリニーを上昇させる〝強い上昇傾向〟のエネルギーを持った石。この事実が、あるインスピレーションをわたしにもたらした。わたしは同行の村井君に声をかけた。彼は修行者となる前は、ある鉄鋼メーカーの研究所で金属加工の研究をしていたという人であり、科学者としての立場からわたしによく有意義なアドバイスをしてくれていた。

「村井君、これはポアだよ。ピラミッドはポアのための特殊装置だったんだ。」

「はあ、ポアですか?」

彼はいつものポーカー・フェイスのまま、気のなさそうな返事をした。変なこ

とを言い出した、とでも思ったのだろう。まあ、無理もあるまい。エジプトとヨーガの最終段階のポアは、普通だったらどう考えても結び付かないものだ。

ポアは、「意識を移し変えるヨーガ」ともいう。意識を肉体から抜け出させ、高い世界へと意識を移し変える技法である。高い世界とは、修行者のレベルによって違ってくるが、アストラル世界、およびさらに上のコーザル世界のことを指している。それらの世界で新しい身体(アストラル・ボディ、コーザル・ボディ)を持ち、活動することができるのだ。

このときの意識はずっと鮮明だ。だから、もし、この世の肉体を捨てるときにポアを使ったとしたら、それはもう死とは呼べないものである。ゆえに、ヨーガ経典ではこれを〝死を克服する〟という言葉で言い表わしている。

◉神秘の鉱石はここにもあった！

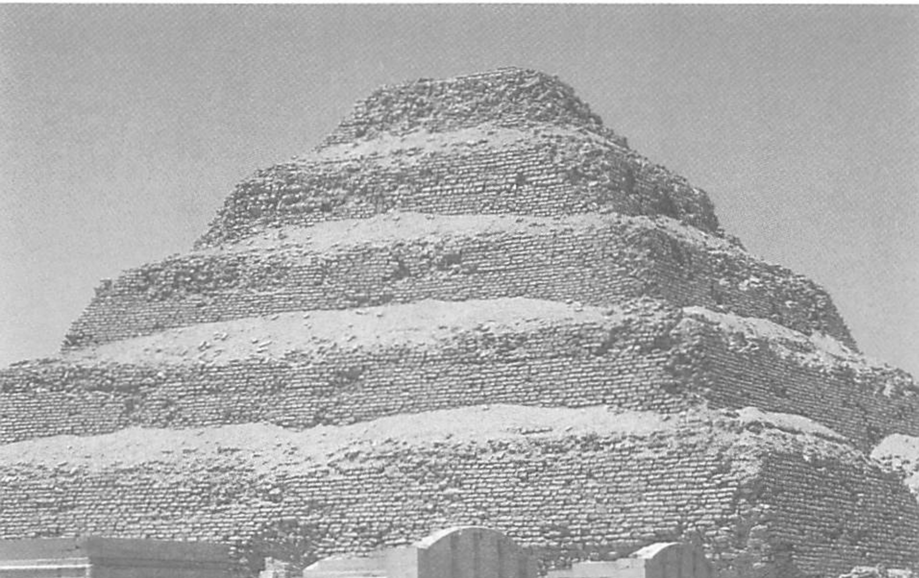
わたしはピラミッド内部の回廊を、奥にある王の玄室に向かって進んだ。急な細い回廊を上っていくと、天井が高く、ちょっと広さを感じる大回廊へと出る。大回廊をさらに上る。やはり急な斜面だ。これを上り切ると「控えの間」があり、続いて「王の玄室」にと出たのだった。

王の玄室の大きさは、縦約十メートル、横約五メートル、高さは約五・八メートル。周りの壁がすべて花崗岩という、なかなか大きな部屋である。奥に花崗岩製の石棺がポツンと置かれていた。

石棺の斜め横には、大きな花崗岩(かこうがん)の塊がある。何でこんなところに……？　わたしは、その花崗岩が強い上昇エネルギーを出しているのが気になった。

村井君は、早速磁石を取り出して磁気を調べた。エネルギーの強い石は磁気を帯びているものだからである。オウムが修行に用いて効果を上げているヒヒイロ

第二章　前生を知れ!



ジェセル王の階段ピラミッド

カネの場合も、その例に漏れず磁気を帯びているのだ。

果たして、花崗岩にも磁気があった。村井君の磁石には実に九・三六度ものズレが出たのだった。

「この花崗岩は、ポアを助けるために使われたのに違いない。」

わたしは額のアージュニァー・チァクラの部位を花崗岩に当ててみた。その瞬間わたしのクンダリニーは、アージュニァーから頭頂のサハスラーラ・チァクラにスッと上がった。なお、石棺も弱いながら、同じく上昇傾向のエネルギーを感じることができた。どちらも、ナイル川上流のアスワン産と思われる赤っぽい花崗岩であった。

◉身体を包むマントラの大音響——「重力拡散の間」

次にわたしはマントラを唱え始めた。オウムのグルヨーガのマントラである。

玄室内は音の反響がものすごく、わたしは自分自身がマントラの大音響に包まれてしまって、マントラと一体化したような感覚を覚えた。
実は、この玄室の天井には「重力拡散の間」というのがある。五個の大きな花崗岩が、空間を開けて重ねられた特殊構造で、上からの重圧を軽減するものとされている。しかし、わたしはこのマントラの響き具合を聞きながら、
（あの特殊構造は、重力を拡散させる目的で造られたのではない。音響効果を高めるためのものだったんだ）
と思った。
マントラは、クンダリニーを上昇させるために大変有効な手段である。特に王の玄室でのように、マントラの大音響に身体が包まれるようなら申し分ない。
これらの事実は、わたしがこのピラミッドに足を踏み入れた瞬間に得たインスピレーション、すなわち、クフ王の大ピラミッドはポアの装置だったということを裏付けているものではないか？

おそらく、こういうことだったのだろう。王は秘儀会得者である神官から、ポアの秘儀をこの玄室において伝授されたのだ。秘儀の会得を助けたのがポア装置なのである。これがあれば、少々修行が遅れていても、ポアまで到達できそうである。

そして生前ここで秘儀を会得した王は、死後この石棺に横たえられ、強い上昇エネルギーに支えられて、無事ポアに成功したのであろう。

ただ、このピラミッドのエネルギーは、中位アストラル世界に通じているようである。したがって、王がポアして行った先は、中位アストラル世界の一つであったと見て間違いないと思う。

しかし、なぜこのようなポア装置が考え出されたのであろうか。正道としては、ポアは自らの修行で到達しなければならない段階なのである。この点を考えてみる必要があろう。

◉神々の黄昏――エジプトの栄光と衰亡

歴史的に見ると、第一王朝期から王は天空の神であるホルス神の化身として崇拝されてきたのである。わたしは、この時代の王が本当に神であったのだと信じている。神、言い換えれば成就し、神同様の力を持っていたのだと――。わたしがそう言い切る根拠は、同じくエジプトで様々な発見をしたことによる。そのことについては、後で詳しく述べたいと考えているので、しばらくお待ちいただきたい。

さて、第一王朝から第二王朝、第三王朝と時代は下り、ついにクフ王が登場する第四王朝となる。この第四王朝期が古王国時代の絶頂期だったとされ、ピラミッド建造技術は最高水準に達している。

ところが、次の第五王朝になると、太陽神であるラーが最高神の座についた。王はもはや神ではなくなり、〝太陽神ラーの息子〟という地位に降格してしまう。

それと共に、王の力も弱くなっていき、次の第六王朝は滅亡という運命をたどる。ここに古王朝時代は幕を閉じたのであった。

以上のような歴史の流れを見てみると、絶頂期だとされる第四王朝時代、既に王の霊的ステージが下がり始めていたと考えても別におかしくはないだろう。神のレベルから落ちていく兆し、それが独力でポアできなくなっていた、ということだったのではなかろうか？　そして、ポアをしても中位アストラル世界へ行ったにすぎない、ということになるのである。

なお、付け加えるならば、クフ王のピラミッドを秘儀伝授の場と考えているのは、わたし一人ではないようだ。超常現象研究家であるマックス・トスは、ピラミッド時代への逆行催眠や超能力者から得たデータをもとに秘儀伝授のストーリーを書いているが、他にも同じような説を唱える研究者がいるのだ。

◉甦る過去世――イムホテップ、それはわたしだった!

しばらく経ってから、わたしはサッカラを訪れた。ここには、前にもふれたジェセル王の階段ピラミッドがある。エジプトにおける最古のピラミッドだ。
このピラミッドの前に立ったわたしは衝撃を受けた。わたしはこの六段の階段状のピラミッドに見覚えがある。いや、見覚えがあるどころじゃない。遠い遠い昔、わたしはこのピラミッドの設計をしたのだ。

わたしは修行によって成就する直前、宿命通という超能力を得た。これは自分の無数にある過去世を知る能力である。この超能力によって、わたしは自分がエジプトの宰相であったことを知ったのだ。もう四年も前のことである。このことは弟子たちにも話してあったので、知っている人は多いはずだ。
わたしの記憶はピラミッドを見て速やかに甦ってきた。ジェセル王の時代、わ

たしは宰相のイムホッテプ（本当の発音はアインファテプだった）として王に仕えていたのだ。このときもわたしは秘儀を会得し、成就していた。
わたしはジェセル王に修行の指導をし、王は徳をもって政治を行ない、神として崇拝されていた。だが、王は悩んでいた。
「死にたくない」とか「一人で死の世界に行くのは嫌だ」とか、わたしに何回となく言った。
そこで、わたしはまず王がポアの秘儀を会得するための神殿を建てた。この神殿は今もピラミッドの東南に当時の名残を残している。ここは、現代の解釈では王の若返りの儀式であるセド祭を行なったらしいとされている。しかし、実際は少し違う。若返りというと、肉体的な若返りを思い浮かべてしまうだろうが、ここで王が行なったのは精神的な若返りの修行である。その最終目標はポアの会得であった。子供のように無垢の精神の延長線上にポアがあるのだ（チベット仏教でも〝童子の心〟の必要性を説いている）。

第二章　前生を知れ!



◉ピラミッド建造——集団ポアの場

一方わたしはピラミッドの建造にも取りかかった。王が死ぬときに、王妃や子供たち、そして高官たちを一緒にポアさせるためである。王と同時に肉体を捨て、高い世界へ行くというのは、王・追随者双方の希望だった。ちなみに追随者も神殿においてポアの修行を行なっていた。

ピラミッド建造に当たって、わたしは粘土で作ったブロックと土と大理石の一種を使った。ブロックを土と大理石を混ぜたもので固定していったのである。皆さんは、こんな材質のものが現代に至るまで保存状態も良く残されていることを不思議に思うだろう。これは当時わたしがそれらを修法し、強力な上昇エネルギーを与えると共に堅固にしたからなのである。この上昇のエネルギーについても述べておこう。このエネルギーは、クフ王のピラミッドとは比べものにならないほど良質なものだった。

また、このピラミッドは、たびたびの設計変更が指摘されているが、これはエネルギーの状態を重視したためである。イムホッテプだったわたしにとって、ピラミッド建造は初めての経験だった。だから、エネルギーをベストにするには設計変更もやむを得ないことだったのである。

「玄室は地下にあるはず。南に入り口があるはず……。(南の入り口は高位の神霊を呼ぶためのものだ)」

わたしの記憶は次々に甦ってきた。懐しさでいっぱいだった。わたしは村井君に、このピラミッドが、ジェセル王と近親者、部下の集団ポアのために造られたことを説明した。が、集団ポアを示すような資料がないという。

ところが帰国してから三週間ほど経った、つい昨日のことである。村井君から電話があった。J．P．ロエールの著書に興味深い記述があったのだと彼は言った。その内容とは次のようなことであった。

「南側の回廊で三十体のミイラが発見された。これは中央の穴にあったものを、

新王国時代に移したものと思われる。」

この事実が集団ポアを示す一つの証拠となろう。ただ、わたしの記憶では彼らが捨てた肉体には、だれもミイラにするような処理を施してはいない。ミイラといっても、自然乾燥によってできたミイラだと思う。現に、薬物処理されたミイラが登場するのは、もう少し後の時代になってからだといわれている。

◉大宇宙占星学は明かす——アストラル、それは投影された世界

神殿が東南にありピラミッドが西北にあるというのは、大宇宙占星学の法則にのっとっている。大宇宙占星学とは、わたしが先ごろ『トワイライトゾーン』に発表したアストラル世界の運命学である。このことも、わたしの転生を裏付けるものとなろう。

参考までに書いておくと、東南は「意識を上昇させる」方角であり、西北は

「王」「死後の世界」を意味している。北には葬祭殿を置いた。それは北が葬儀を意味するからである――ここまで書いて、わたしは重大なことを思い出した。（わたしはピラミッドを中心として、周りにそれぞれの建造物を配置した。それは、それら全体で「宇宙」をこの世に表現するためだったのだ！）

ピラミッドなどを使って宇宙を再現したのはどうしてだろうか？

それはこういう理由なのである。この世にあるものは、すべてがこの世と同時にアストラル世界に存在している。例えばここに一冊の本があったとする。このときあなたのアストラル・ボディがアストラル世界へと行ったとしたら、そこでも同じ場所に同じ本があることに気付くのである。

――アストラル世界は、この世と同時に存在する異次元なのだ。この世に宇宙を再現しておけば、アストラル世界にポアした後に、その宇宙の法則にのっとった〝新人生〟を送れるのだ。なぜなら、これらがアストラル世界の家となるのだから。宇宙の法則にのっとった生き方（これは真理を知り、真理のままに生きる

ということ）は、幸福そのものなのである。わたしはポアした人たちのその後までを考えて、この構造にしたことになる。これこそ気くばりの見本だといえよう。

◉ポア装置は救済の決め手！

わたしがイムホテップとしての生を終えた後、だれもイムホテップの真意を理解する者がいなかった。だから、どうしてこのような建造をしたかということは、すっかり忘れ去られてしまったのだろう。そしてわたしは何千年もの時を隔てて、この地に帰ってきたのである。

しかし、それはただ単にそのことに感動するためではなかろう。ポアの秘儀会得を物理的に助けるポア装置を日本にも導入しろという示唆なのではなかろうか？確かに、日本にはこの種の装置はないのだから。この実現はこれからのオウムの課題の一つになるに違いない。

（『マハーヤーナ』NO4より）

その二　過去世の宝探し

わたしが最近瞑想によって見た一つの過去世のヴィジョンについてお話ししよう。

その前生においては、わたしと今のマンジュシュリー・ミトラ正悟師、ティローパ師が登場し、一緒に海の沖合いで宝探しをしているのである。どうやら場所はフランス、時代は十六世紀ごろらしい。

さて、沖合いで宝探しをしていたわたしは、うっかり潮の流れにつかまり、流されてしまった。

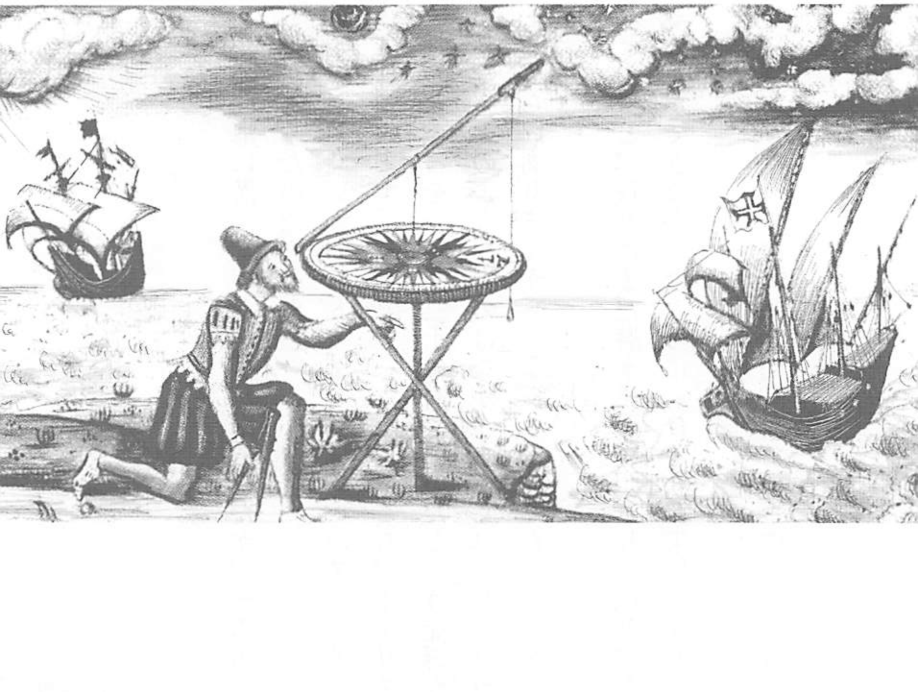
「このままでは、北極に行ってしまう!」

わたしは慌てた。とっさに海の底深く潜った。そして、助かったのである。

このヴィジョンを見た後、わたしはマンジュシュリー・ミトラ正悟師を呼んだ。

「マンジュシュリー、フランスから北極に抜ける海流というのはあるのか。」
「はい。北海からノルウェー海、そして北極へと向かう海流がありますね。」
「そうか。ところで、潮に流されたとき潜るというのはどういうことなのだろうか。」
「それは、海流というのは下ほど流れが遅いからですよ。理にかなったことですね。」
マンジュシュリー正悟師が話を続けた。
「時代が十六世紀ごろのフランスとすると、宝探しをしていてもおかしくありませんよ。十二世紀から十六世紀にかけて、特にその後半は、海賊が横行し、商船は単独では航行できなかったくらいですから。このフランス辺りの海でもずいぶんとたくさんの商船が海賊にやられて財宝が海に沈められた可能性は高いでしょうね。有名なスペインの無敵艦隊というのは一五七二年ごろ登場するのですが、その目的も海賊の撃破にあったということです。航行のコースも尊師がご覧になっ

第二章　前生を知れ！



たヴィジョンと同じですね。」
「なるほど。しかし、長時間海に潜っていた記憶があるのだが、その当時既にアクアラングのようなものがあったのだろうか。」
「いや、なかったと思いますよ。レオナルド・ダ・ヴィンチのスケッチというのは一五〇〇年ごろに残されています。そして、一六八〇年ごろ、イギリスのテムズ川で水深二十メートルのところを一時間三十分潜っていたという記録がありますが、十六世紀当時でしたらそのようなものはなかったでしょうね。フランス沖辺りは水深も百メートルぐらいありますから、宝探しをするならば潜水具なしには不可能です。」
「ヴィジョンどおりだとすると、我々はまだ潜水具が発明される以前、だれも海底の財宝に手を付けることができなかったころに、ひそかに宝探しをしていたことになるね。」
「しかし、潜水具なしに、どうやって海に長時間潜っていたのでしょうか。」

「人間ではなく、阿修羅かそれに類似の存在だったのかもしれないよ。」
「えっ。阿修羅が人間の世界にいたのですか。」
「そうやって気付かれずに人間界に潜り込むこともできるんだよ。阿修羅ならば人間の世界よりも科学的にもう少し進んでいただろうから、アクアラングのようなものを持っていたというのは十分に考えられることだからね。」
「なるほど。面白いですね。」
マンジュシュリー正悟師もしきりと感心している。
このように、瞑想で見るヴィジョンがきちんと史実と一致したのである。真理にのっとった修行をしていると、このように正確なヴィジョンを見たりすることができるという一つの良い例ではないだろうか。

（『マハーヤーナ』NO33より）

その三　前生の因縁――カルマの法則の恐ろしさ

今回は趣を変えて、カルマの法則の証明を一つしたいと思う。このカルマの法則を完璧に理解し把握することは、マハー・ムドラー（タントラ・ヴァジラヤーナ的なヨーガ技法の一つ）の修行者にとって不可欠な要因である。なぜならば、もしカルマの法則というものを確信できなければ、マハー・ムドラーによって生じる苦しみに耐えることができないからである。

わたしは、いくつか前の生で、一六〇四年に徳川竹千代としてこの日本に生を受けた。皆さんもご存じのとおり、後の三代将軍徳川家光である。この家光の業績を歴史的に簡単に拾ってみよう。

父、秀忠の死後、幕府の実権を握った家光は、貿易統制やキリシタン禁制を強化し、鎖国を完成させた。また、制度の整備に努め、武家諸法度の改定に際して、

参勤交代の制度を定めるなど、諸大名の負担を重くし、諸大名の勢力拡大を押さえ込んだ。

しかし、その重い負担は、結局は農民に転嫁されたわけで、家光の代になって租税の重圧に苦しむ農民一揆が各地で起こり始めたが、一六三七年に起こった島原・天草一揆は特に有名である。ただし、これは単なる農民一揆とは様相を異にしており、家光の厳しいキリシタン弾圧と飢え死に寸前というキリシタン農民の生活苦という二大要因が巻き起こした大一揆であった。島原・天草一揆は数カ月で鎮圧されたが、これは幕府の政治的権威を高めるとともに、キリシタン弾圧の強化をもたらした。また、大名・農民に対する武断主義からの幕政転換の必要を幕府に認識させ、以後幕政は文武主義へと移行してゆき、結果的に幕府は十五代将軍に至るまでの長期にわたって政権を保ち続けたのであった。

皆さんは、「おや?」と思われることだろう。それは、彼の行なった行為の中

に、現在の熊本県とオウム真理教に関連したものがあるからである。

これは、二つ（三つと考えることもできるが）あるが、その第一に、現在の細川県知事は、家光によって熊本に転封させられた細川氏の末裔なのである。細川氏は外様大名であり、江戸から遠く離れた熊本へ置かれ、他の大名と同様、財政負担を強いられていたのである。そして、まさに今、この細川県知事が中心となって、オウム真理教叩きを行なっているのだ。例えば、波野村村長に、「法律違反となってもよいから、オウム真理教信者の転入を認めるな」と指示したりしているのが、彼なのである。

第二のポイントは、島原・天草一揆である。天草は熊本県にあるが、当時のキリシタンと同じように、今オウム真理教は特に熊本県で強く邪宗呼ばわりされ、徹底的に叩かれている。しかも、オウム叩きのバックには、行政が絡んでいるのである。これは、オウム真理教の存続が今の日本の国家的価値を揺るがすことを牽制したいがゆえの結果であろう。全く当時の弾圧理由と同じといえる。


徳川家光

ちなみに、島原・天草一揆のリーダーであった天草四朗時貞は、超能力を持っていたと伝えられている。

そして、もし最後にもう一つ現状と関連しているポイントを挙げるとするならば、家光が日蓮宗のある一派に対する弾圧を行ない、今、日蓮正宗信徒がオウム真理教の布教活動の邪魔をしているということである。彼らは書店にオウムの書籍を置かないように圧力をかけたり、『真理の芽』の布施本を配布した家に、日蓮正宗信徒がオウム真理教の信徒と偽って高額のお金を要求したりして、嫌がらせをしているのである。

このような状況を把握し、理解するならば、わたしのまさに家光転生時のカルマ返しが、今生になって起きているとしかいえない。

では、わたし家光は、なぜその生において、そのような一見非道とも受け取られるような行為を行なったのだろうか?

わたしが統治するまでの日本は、貧窮、戦乱に明け暮れていた。ここで厳しい

処置を取ることは、この二つにピリオドを打つことになると、わたしは判断したのであった。そして、わたしの統治以降、約三百年間にわたる平安の時代が続いたことは、周知のとおりである。

しかし、わたし家光個人としては、それらの殺生のカルマによって、最後の数年間、ルントラブル（風エレメントの乱れによって起こる心身の病気）を起こし、この世を去ったのである。そして、これがわたしの転輪聖王としての役割だったのだ。

なお、今生引き続き起きているカルマ返しは、間もなく終息するだろう。それは、わたしのカルマがもうじき落ち切るとともに、反対にアンチ・オウムの活動をしている人間の悪業が満ちるだろうからである。つまり、今度は彼らが悪業によって身を滅ぼすだろうということである。

さて、このように読者諸氏が、わたしのようにカルマを見極められるレベルに

達したならば、諸現象の苦楽に対して頓着しないようになるだろう。そして、その状態こそがマハー・ムドラーの成就を支える土台の一つとなるのである。

（『マハーヤーナ』NO36より）

その四　ウマー・パールヴァティーに贈る宿命の秘儀
――宿命の秘儀を今明かそう

（尊師）ウマー・パールヴァティー、それではこれからあなたがわたしの娘ということではなく、グルとしてあなたに最高の法則のプレゼントをしよう。

まず、ウマー・パールヴァティー、過去世を実際体験するためには、日本の一般の書物でいわれているような、あのようなプロセスはとらない。彼らが経験しているものは夢であって、それは過去世ではないんだよ。

では、過去世を知るためには、どのようなプロセスをたどって実際知ることができるんだろうか。それはね、まず、四つのサマディ、漢訳では「静慮」といわれているけども、この四つのサマディの段階を第一番目に通過しなければならないんだ。

その第一番目の段階は、要するに、この肉体、感覚、そして意志や意識といわれているものからとらわれなくする修行をすることによって、現世に対して全く興味を持たなくなった状態。このとき、自然と功徳が上昇し歓喜の状態に入ると。これが第一のサマディだ。

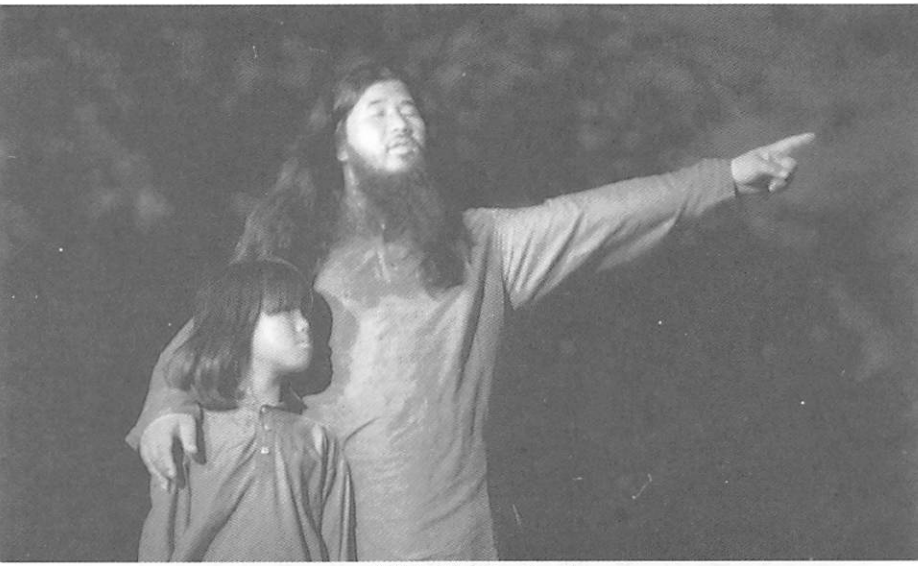
そして、第二番目はその状態がサマディに入っているときに起きるんだね。その状態とは何かというと、そういう大変気持ちのいい状態だ。もちろん、これは徳を積んだり、善行をなしたりしなければ、この状態に入らない。わかるね。

そして、第三番目のサマディは、そのエネルギーが心に影響を与え、心が大変明るく、そしてエネルギッシュな状態になる。これが第三番目のサマディだ。

そして、第四番目のサマディのとき、まあ実際はこのときにナーダ音が聞こえ始めて、シンシンとした音が聞こえ出して、そして、心身が大変リラックスした状態になる。

なぜね、ウマー・パールヴァティー、リラックスした状態でなければならない

第二章　前生を知れ!



尊師と三女のアーチャリー

かというと、心や体に緊張があると、そこから意識が外れるときショックを受けるんだよ。つまり、ショックを受けるということは気絶の状態に入ると。気絶の状態に入ったら、その肉体から離れた後、戻ってこれなくなるんだね。つまり死んじゃうわけだ。だから、この一番、二番、三番を正確に達成しないと、四番目には到達することができないんだよ。

そして、この頭頂から化身が抜け出す、変化身だね。その変化身はちゃんと意志を持っていて、それは自分自身なんだけど、行きたい所へ自在に行くことができると、ね。その化身は多身となったり一身となったり、いろんな変化をするわけだけど、このときに実は空中浮揚が生じるんだ。実際に時間的差というのは、この化身が抜け出してからしばらく経って空中浮揚が生じることになる。

そして、天耳界、他心証解智、その次に来るのが、この本の目的である宿命通、つまり前生を知る力なんだよ。だから、この四つのサマディと化身の体験とそれから天耳、他心というプロセスがその人に経験として存在していなければ、その

人の見た宿命通というものは、それは嘘ということになる。つまりそれは夢だということになるんだ。

もちろん過去世を見るとき、呼吸は完全に停止する。しかし、このときの呼吸の停止というのは、エネルギーが充実しているが、あまり呼吸をする必要のない状態で呼吸を停止するんだよ。だからそのときは苦しくもなければ何でもない。自然に呼吸が停止する。そしてそのときは、煩悩が本当に弱められた状態で、食べる必要性もないし、食べたいとも思わないし、あるいは他の、例えば異性のことや、ね、あるいは何かをしたい、かにかをしたいといったような気持ちもそこではなくなるんだ。

では、このときどういう現象が現われるのかと、ね。これは光、太陽に化身が飛びながら飛び込んでいくと。そして、それを貫くという経験をする。で、なぜ太陽に向かって化身が飛ぶのかと。このときに起きる現象こそが、アートマンとブラフマンの合一、仏教でいわれている神聖行の成就なんだよ。つまり、その魂

は神聖天界へ行くことができる経験をしたわけだね。わかるね。そして、この宿命通は必ず音楽とアナウンスと強烈な明るさ、この三つを伴うんだよ。よって、この三つのない宿命通というのは、これもまた偽物ということになる。わかるね。

で、その過去世を経験するとき、必ず頭上にチラチラと光るものが現われる。この光るものが宇宙神素である。この宇宙神素のチラチラとした光がわたしたちにそういう体験をさしてくれるわけだけど、つまりここにデーターとしてわたしたちの過去世の記憶がすべて蓄積されているということになるんだよ。

よくね、嘘をついても閻魔(えんま)様はご存じだというけど、自分より高い意識体、高い生命体、例えば人間からいうと、意識堕落天やあるいは戯れ堕落天、あるいは神聖天、あるいは神聖天を含む十七形状界の天界、あるいはそれを超えた四つの非形状界の天界、あるいはそれを超えた真理勝者の世界。これらの魂は人間の世界の、人間の魂に対してね、そのアーカーシック・レコードというものを見て、知るんだよ。

初めは過去世を見る場合、近い生から経験する。そして一生、二生と連続で見、それをものすごく長きにわたって経験することができる。その中の代表的なものをいくつか話そうかね、アーチャリーに対して。ね、ウマー・パールヴァティー。

第一話　意識堕落天から今生へ

（尊師）ではアーチャリー、わたしの過去世の一つ前の生の話をしよう。

（アーチャリー）はい。

（尊師）わたしは意識堕落天へ転生した、ね。意識堕落天というのは、この人間界のすぐ上の天界だ。そしてわたしはその生では、宗教上の王となり、そして政治上の王となり、意識堕落天の魂に十の戒め、つまり不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見、これを説いた。そして布施を説き、その意識堕落天にわたしはたくさんの経典を集めた。よって今、

意識堕落天とそれから第二天界、三十三天界の戦いは存在していない。
なぜ、意識堕落天と三十三天界が闘争しなくなったかというと、それはわたしの十の戒め、三つの布施等がその意識堕落天に浸透し、そしてその教えを実践している人が多いからである。ね、ウマー・パールヴァティー。
(アーチャリー) はい。
(尊師) だからよくオウム真理教の人たち見てごらん。確かに戯れ堕落天の人たちもいるけど、意識堕落天の人が多いよね。
(アーチャリー) はい。
(尊師) それは、その生でわたしに帰依した人たちが生まれ変わってきているわけだ。だから彼らは否定的であると。まあオウム真理教が発展しないのは、その意識堕落天の魂の悪影響によって発展しないともいえるわけだけど。救済には二つの目的があるよね。
(アーチャリー) はい。

（尊師）一つは弟子たちを成長させること。もう一つは多くの人に真理の法を広めること。そうでしょ。

（アーチャリー）そうです。

（尊師）だから、意識堕落天の魂も当然救済されなければならない。よってそれはそれでいいと。

そして、わたしは当然修行の道に入り、というのは、これはね、修行者が例えば政治をなした後というのは、必ずその政治をバトンタッチするんだよ。なぜバトンタッチするかというと、それは『転輪獅子吼経』にもあるとおり、次の生を確定しなければならない。つまり、その政治というのはけがれ、濁りだから、そのままで死んでしまったら悪趣へ転生する可能性が高い。それはちょうど今の政治家たちが悪趣へ転生していっているのを見ればわかることだ、ね。だから必ず政治をなした者は、これは昔は日本もそうだったように、必ず出家をし、そして修行して心を清めた後に転生するんだよ。

そしてね、わたしはそこでね、肉体を捨てた後、中間状態へ入った。中間状態へ入ってまず非形状界のバルドー、形状界のバルドーをわたしの場合経験しないで、なぜ経験しなかったかというと、そこへ転生しようという気持ちが全くないから、そのバルドーを経験しないで、ね、そのバルドーの中間状態で苦しんでいる魂に対して、タントラのイニシエーションや、あるいはヴァジラヤーナのイニシエーションやマハーヤーナの教えやヒナヤーナの教えを説いた後、転生後四十九日目に、この人間界へ転生したんだよ。

普通はね、人間界へ転生する場合、必ず性的ヴィジョンを見て飛び込むんだけど、わたしの場合はそこには全く興味はなかったんだよ。わたしが人間界へ転生したときのヴィジョンは、家族団らんの転生だったんだね。つまり、お父さん、お母さん、あるいは兄弟、あるいは今の姉のだんなさんたちが出てきて、その人たちが楽しく生活してると、ね。そして、そこには多くのごちそうがあると。

わたしはもうずっと以前から仏陀だったから、仏陀という意味わかるかな。覚

者だったから、つまりどういうことかというと、完全にコーザルの世界を、アストラルの世界、この欲界すべてを経験している魂であったから、ね。
（アーチャリー）はい。
（尊師）そこまで正確にヴィジョンを見た後に、転生したわけだ。そこでは多くの食べ物、多くの、ね、家庭内の愛著が存在していた。
しかしね、ウマー・パールヴァティー、わたしの前生は意識堕落天であると。で、意識堕落天のごちそうというのは、要するに魚ではないんだね。何が好きなのかというと、カニとかイカとかエビとかいう甲殻類が好きなんだよ、ね。で、そういうものがたくさん食べられる所に転生するわけだ。
しかも先程述べたとおり、わたしは仏陀だったから、仏陀というのは当然供養を受けるよね。それは今だって、わたしはアストラルへ入った場合、サマディに入った場合、神々の供養を受けるわけだけど、同じように供養を受けるわけだよ。供養を受けられるような所、つまり食が、つまり味覚が満足できるような所に転

生するわけだ。わかるかな。

（アーチャリー）はい。

（尊師）そのときの転生の場合ね、そうだね、大きさとしては十五メーターの十メーターぐらいのヴィジョンかな。ともかく全面いっぱいにヴィジョンが見えると。そこへじわじわと吸い込まれるような形で転生するんだよ。

ただ一つだけそこで失敗したことは、前生わたしは王としていろいろなことをなしたからタマスになってるわけだね。だから純粋に透明な空間ではなくて、そこには少し白っぽい、どんよりしたデーヴァ的な空間が存在したわけだ。もし透明な空間だったならば、このような肉体的けがれを持った状態で転生はしなかったはずである。わかるかな。

（アーチャリー）はい。

（尊師）つまり、そのタマスがわたしのヴィジョンに対する検討を見誤らせたんだね。わかるね。このような形で、死、そして生というのは生じるんだよ。これ



過去世から尊師と縁の深い高弟たち
ヤソーダラー正大師(左)　マイトレーヤ正悟師(右)

が輪廻転生のプロセスなんだ、いいかな。

（アーチャリー）はい。

第二話　チベット転生——タントラの修行者

（尊師）では次に、わたしがチベットに転生したときの話をしよう。わたしがチベットに転生したとき、まあ今回チベットに行ってなるほどなと思ったんだけど、当然チベットというのは山だ。その山には結構広い道があって、そしてその横がわたしの、その道の横にわたしの家があったんだね。で、このときわたしには二人の妻がいて、まあその一人はヤソーダラー正大師、もう一人はケイマ正大師であったと。で、わたしにはそのとき一人の侍者がいたんだよ、ね。

（アーチャリー）はい。

（尊師）侍者ってわかるよね。お付き。これがヴァッパ師だったんだね。で、そ

のときわたしはタントラ、特にタントラの中でもチュウの瞑想を中心に修行してたんだよ。チュウの瞑想っていうのはわかるよね。

（アーチャリー）はい。

（尊師）肉体を切り刻んで、それをグツグツに煮て、そしてそれを神々と仏陀と、それからサムサーラに苦しんでいる魂と神々に供養するという瞑想だ。その瞑想をひたすらわたしは行なっていたわけだ。もちろんそのとき、ヤソーダラー正大師もマハーケイマ正大師も、わたしにいろいろな法を伝授された。そのとき、わたしはニンマ派の教えとカギュ派の教えの両方を、わたしは学んでいたわけだ。

わたしには他にも弟子がいたわけだけど、チベットの密教というのは面白いもので、一番の弟子というのは一番の妻であると。そして、つまり家族制度が確立していて、在家における成就というものをポイントとして組み立てられている教えであるから、当然一般の弟子よりも妻の方がステージが高いということになるわけだね。

（アーチャリー）はい。
（尊師）わかるね
（アーチャリー）はい。
（尊師）それから先程の意識堕落天の話を少ししなければならないわけだけど、思い出したからね。そのときにわたしにいろいろな勉強を教えてくれたのが、今のヤソーダラー正大師なんだよ。よって、わたしは今生彼女にいろんなことを教えなければならないと。

第三話　「オーナリ・トーナリ・ヴィヴァム」

（尊師）でね、ウマー・パールヴァティー。
（アーチャリー）はい。
（尊師）今から九十一カルパ前の話をしよう。ちょっと飛ぶね。

（アーチャリー）はい。
（尊師）カルパっていうのは何かわかるよね。
（アーチャリー）はい。
（尊師）つまり、この欲界が創造されて、そして破壊されて、また次の創造があると。この創造から破壊までが一カルパであると。で、破壊されてから、次の創造までが二カルパであると。約、その長さというのはこれは天文学的数字に近いけど、ま、だいたい百億年から百五十億年が一カルパと考えて妥当だと思う。わかるね。
（アーチャリー）はい。
（尊師）その生わたしは有能神であったと。有能神というのは、今の日本では帝釈天といわれている天界であると。その第二天界にわたしは大きな仏像を作ったと。その仏像は頭が雲から出ているくらいの大きな仏像だったんだよ。そして、わたしはそのとき「オーナリ・トーナリ・ヴィヴァム」というマントラを唱えて

いた。この「オーナリ・トーナリ・ヴィヴァム」とは何かというと、これはヴィパッシー真理勝者に対する帰依のマントラであると。つまり、そのときわたしは、ヴィパッシー真理勝者に帰依していたわけだね。

ここで少しヴィパッシー真理勝者について話をしなければならないけど、ヴィパッシー真理勝者はこの世界に現われて、そしてヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナの三乗をお説きになった偉大な真理勝者なんだよ。

（アーチャリー） はい。

（尊師） で、まあヴィパッシー真理勝者は、グルの中のグル、あるいは千の眼を持つ者とか王の中の王とかいわれる真理勝者で、その人の威厳、ね、それから、その魂の法の素晴らしさ、あるいは声の素晴らしさ、ヴァイブレーションの素晴らしさというのは、それは計り知れないというか、経験してみなければわからないほど大変素晴らしいものである。

つまり、尊師の修行というのは、例えば今日本でいわゆる仏陀だとか真理勝者

だとかいわれているけども、その人たちの流れと違い、要するに何十カルパも昔、何百カルパも昔、何千カルパも昔、何万カルパも昔、何十万カルパも昔から続いている修行なんだよ、ね。

そのとき、わたしには二人の息子がいた。息子といっても、天界では子宮を通しての子供ではないんだね。実はこれは意識堕落天から連れてきた二人の息子だけれども、それが今のマイトレーヤと、そしてカンカー・レーヴァタなんだよ。で、人間の心がいかに変化しづらいものであるかの証明として、カンカー・レーヴァタはあのころから屈折していたわけだけど、今また屈折していると。マイトレーヤはあのころから知識欲が強くていろんなことをわたしに聞いてきたわけだけど、今も聞いてくると。このカルマは変わらないわけだね。わかるかな。

そしてね、これは一つ記憶しておかなければならないことだけど、天界のステージを測るのは何で測るのかと。それは、その魂がどれくらい地上から浮いているかで決まるんだよ。つまり、天界の高い魂は、天界で高ければ高いほど、魂は地

上からの距離が、体と地上の間の距離があるんだね。ま、当然、例えば第二天界より第三天界の方が距離があるということになる。

ところがね、この意識堕落天と、そして有能神の世界の距離は変わらないんだよ、ほとんど。なぜかというと、意識堕落天と有能神の世界の両方ともまだ三悪趣へ落ちる要素を持っているんだね。徳の量もほとんど変わらないと。ただ、有能神は嫉妬心がないと、しかし無智であると。ところが、意識堕落天は嫉妬心があると、しかしサットヴァの部分もあると。

しかしだよ、ウマー・パールヴァティー、ということは、この欲界の低い高いという天界においては、そう、相手を非難する嫉妬心よりも、ね、無智の方が高いんだね。つまり、右の気道より左の気道の方が高いんだね。だから、喜びが多いわけだ。わかるかな。

(アーチャリー)はい。

第四話　ナーガの王様

（尊師）ではね、ウマー・パールヴァティー、次にわたしがナーガの国の王様であったときの話をしよう。わたしはこのとき菩薩として、到達真智運命魂としてナーガの国に転生した。いいかな。そして、このナーガの国というのはね、竜が白蛇、白へびを支配してるんだよ。ウマー・パールヴァティーも知ってのとおり、日本の例えば神社なんかで白蛇が祭られているでしょ。あれはナーガの使いなんだ。竜の使いなんだよ。

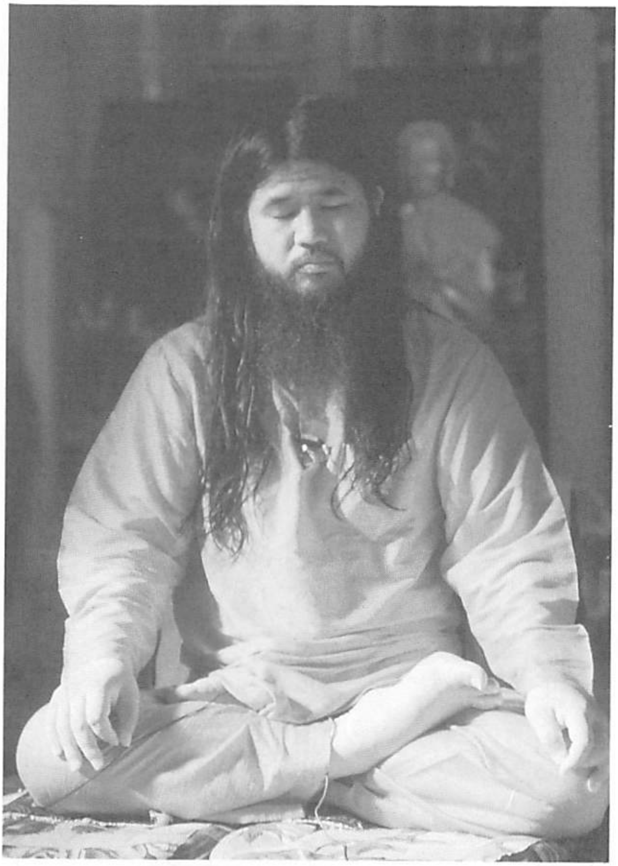
そして、このナーガの王が、白竜とも白蛇ともいわれているものを統治するときね、どのような方法で統治するのかというと、それは今のナーガの国は仏典をもとに統治してるんだよ。だから、大乗仏教においてナーガが出てくるよね。竜が出てくるわけだけど、その竜が出てくる理由というのは、そこに多くの仏陀の経典が収められているからなんだよ。で、ここでいう仏陀というのは、小乗の解

脱をした人とか、日本で仏陀といわれている人を指すんではなくて、これはサキャ真理勝者、サキャ牟尼真理勝者、あるいはサキャ神賢真理勝者ということになる、ね。

で、わたしはよくナーガの国の頭上を、空中を歩いてナーガたちにその威厳を示したものである。ところがね、わたしはそのときおそらく左手だったと思うんだけど、左手を意識堕落天との戦いで失い、要するに、足と片手と、それから胴体と頭しかない体だったわけだ。このときの生のわたしの妻はヤソーダラーであり、そしてその娘は今の識華（尊師の四女）なんだね。いいかな。

第五話　魔境の天界で

（尊師）では、わたしが次はこの欲界の王だったころの話をしよう。わたしの乗り物は棒であり、要するに魔法だね。魔法の棒であり、このときのわたしの侍者



はウマー・パールヴァティー・アーチャリーと。わたしはよく宇宙をウマー・パールヴァティーと一緒に飛んで遊んだものだ。これは、ウマー・パールヴァティーも覚えてるかもしれないね。

しかし、この第六天界というのは一種独特の魔境の天界であると。独特のエネルギー状態の天界であると。それはそうだよね。すべての願望が、念によってかなう、つまり意志しただけでかなうわけだから、でしょう。供養についても、意志することによって供養するわけだよね。当然、そのエネルギー状態というのは、煩悩の思念の渦であると、ね。

第六話　夜摩天にて

（尊師）では、次にわたしが支配流転双生児天、夜魔天の王であったころの話をしよう。この夜魔天の世界は、今のような人間の形をしているわけではない。

例えば、例を挙げるならば、第一天界からどんどんその魂は大きくなるわけだけども、その白蛇、白竜も、例えば人間を平気で飲み込んでしまうくらいの大きさである。ましていわんや、竜は、竜王はその何倍も大きいと、何十倍も大きさと、ね。そして、それよりも有能神の体は大きく、それよりも支配流転双生児天の方がもっともっと大きいと。ねえウマー・パールヴァティー、ということは、それは計り知れないような、この富士山、いやそれ以上に、一つ一つの身体が大きいと考えた方が正しいと。わかるよね。

で、顔立ちはどうかというと、仏像的、ロボットのような形をしていると。そして、地元素（肉体を構成している元素の一つで固体成分を表わす）もしっかりとしており、ほんとにがっちりした石の像のような形の身体をしていると。で、この石の像をしたような身体でいて、空高く絶えず飛び上がり、支配流転双生児天が住んでいる世界は、石山の城のようであると。

しかも、この支配流転双生児天は、は虫類がそうであるように、例えば手が切

れようと、首が切れようと、あるいは胴体が真っ二つになろうと決して死なないんだよ。では、どうして死ぬのかと。それはもうカルマが切れるときのみ死ぬのであって、そういう形状が破壊されたからといって死ぬ天界ではないんだね。わかるよね。

（アーチャリー）はい。

（尊師）で、ここでは、本当にもうその生命体は、食べ物に対してほとんど頓着がないと。ただ、生きてることの喜び、空を飛んでることの喜び、そして魂を、低い魂を支配することの喜びだけが存在してるんだよ。いいね。

第七話　愛と哀れみ——光音天

（尊師）ではね、わたしが光音天にいたときの話をしよう。それは、これはわたしがすべての衆生に対して真理の法則を説き明かし、ね、特に愛と哀れみを説き

明かし、そのカルマによってわたしは光音天へ転生したわけだけど、そこは、光のうねり、本当に綺麗な光のうねりなんだね。そして、そこに住む魂はテレポーテションも自在だし、彼らが意識しているものはただ修行だけなんだよ。そして、今一般的にいわれているいろいろな救世主ね、この救世主の中で未来において真理勝者へと転生しようとする魂は、いいかな、この光音天から転生しているわけだ。

で、この光音天では食事は存在しないんだ。では、何が存在するのかなって。それは体から吸収するプラーナなんだね。しかもそのプラーナが大変甘くておいしいと。それは糖蜜のような甘さでもなければ、あるいは蜂蜜のような甘さでもないと。あるいは果物のような甘さでもないと。そうだねえ、本当に性的快楽を純粋に昇華した形、これが光音天の魂が食べている食事なんだよ。だから食べるということは合わないね。実際は体で吸収しているエネルギーと。そして、その吸収が光音天の魂を生かしてるんだということなんだ。

ではなぜ、光音天の魂がそのように体から吸収するのかな。わたしたちは食べ物を食べたい。食べ物を食べることによって喜びを得たい、ね。そして生きてるよね。OKだよね、これは。ところが、光音天の魂は愛を実践したい、愛を与えたいと、哀れみを与えたいと、そう考えて生きてるんだね。ということは、生きる目的が違うでしょ。つまり一般の人は食べたい、感じたいと思って生きていると。ところが、光音天の魂は愛を注ぎたい、哀れみを注ぎたいと思って生きていると。

そして、そのカルマの現象化が転生だから、光音天へ転生する魂は愛を吸収して生きる、哀れみを吸収して生きるわけだね。そうすると、この愛とか哀れみというのは何かというと、これこそは最高の歓喜なんだよ、喜びなんだ。いいかな。

第八話　変化自在の神聖天

（尊師）ではね、次に神聖天について話をしよう、ね。神聖天界の魂というのは、わたしはこの神聖天界の王だったことがあるわけだけど、その神聖天界の魂というのは空中を飛行すると。これはよく知っているよね。そして、この神聖天界の特徴というのは変化自在なんだよ。エネルギーによっていろんな形へ転生することができるんです。

そして、シヴァ大神系統の成就者、真理勝者になっていく魂は、トラ、あるいはライオンというものを、これを大変好むから、なぜかというと、真に強いもの、一人で強いものを好むわけだね。いいかな。ここの住人はよくトラへ変化したり、あるいはライオンへ変化したりします。その素質を持ってるわけだね。わかるかな。

そして、ここでも同じように煩悩破壊の教えが存在し、ここで生活している神

聖天界の魂は煩悩破壊の修行をしているんだよ。でも、この神聖天界のね、魂の空中の飛び方というのは、ものすごく高い飛び方をするわけだね。わかるかな。
このような形で、第一天界や第二天界や第三天界や第六天界や神聖天界やあるいは光音天界が存在してるんだよ。もちろんだよ、除冷淡天あるいは第五天界の話もわたしはすることもできるが、今はそれをしたいとは考えていない。その理由わかるかな。

（アーチャリー）利益になんないから。

（尊師）そうだ。あまりね、わたしが本当のことをすべてしゃべってしまうと、よく物まねをする教団があって、例えば、その物まねをする教団が大きくなっていくと。つまり、わたしの正しい知識が正しくない方向に使われてしまうから、この部分についてはこのくらいにしたいと思う。

第九話　意識堕落天は湖の底

（尊師）では、少し低い世界の意識堕落天について少し説明しようか。この意識堕落天の世界は、いいかな、大きな湖の底にあるんだよ。その湖の中心には蓮があり、大きな水蓮があってね、蓮があって、そしてそこから出入りするんだよ。仏典によってはその中を通っていっているけど、わたしの経験した印象では、そのどうも横側から水蓮の葉っぱをくぐって、下へ入っていくような感じなんだね。

で、この意識堕落天の魂は、要するに水の中でも平気で生きることができると、ね。そして、意識堕落天の女性は天界の女性よりも美しい人がいる。で、今いるマンジュシュリー・ミトラは、わたしが意識堕落天へ転生したときに参謀になる魂なんだよ。で、今のマイトレーヤは、わたしが天界へ転生したときに教えを聞く魂なんだよ。わかるかな。

（アーチャリー）はい。

第十話　天界での浮揚の原理と悪魔の中の悪魔

（尊師）実はね、ウマー・パールヴァティー、わたしは天界へ行けば覚者（仏陀）と呼ばれる。わたしはこの生で覚者と言っていないのは、それは覚者にあまり価値を見いだしていないからだ。わたしが価値を見いだしているものは真理勝者である。

覚者と真理勝者の違いは何かというと、個人的な修行を達成した人、これは覚者であると。真理勝者というのは、そのすべての魂を本当に救済し、その魂を覚者にしていく魂と。これが真理勝者であると。そして、わたしは真理勝者の道を今歩いているから、覚者に価値を見いだしていない。わかるね。しかし、もちろん覚者に到達した魂は素晴らしいということはいえるだろう。

ところで、天界には天界で覚者になる修行方法があるんだよ。実は、わたしが天界にいたころ五神通を有していた。五神通とは何かというと、天耳、他心、宿

第二章　前生を知れ!



命、天眼、漏尽。今もわたしはそのカルマによって、最後の神通力である空中浮揚、あるいは一身を多身にし、多身を一身にするという、ここで苦戦している。なぜ苦戦しているかというと、わたしはどの生においても真理勝者の道を歩こうとしているから、すごくエネルギーを放出する。また、それを愛の実践であるともいえるわけだけどもね。それによってわたしの身はけがれ、そしてなかなか空中浮揚ができないと、ね。

で、このときのわたしの弟子はカンカー・レーヴァタで、その他にもう一人弟子がいたわけだけど、わたしはそのもう一人の弟子と一緒に空中浮揚の練習をしてたんだね。天界での空中浮揚の練習っていうのは滑り台みたいな所があって、その滑り台みたいな所と大地があって、その二つの落差を利用して、わかるよな、スーッと滑ってきて、そしてその大地と滑り台の間には差があるからそこで浮き上がると、もし浮き上がる力がちゃんとあれば。そういう修行をするわけだけど、天界でのその空中浮揚の原理は、真理勝者との合一、仏陀との合一なんだよ。仏

陀と意識が合一したかどうかについては浮揚時間で決まる。で、その修行をしているときになかなかそれがうまくいかなかったと。

ところが、あるチベットのラマが現われて、そのチベットのラマは前生でタントラの修行をしていたラマなんだけど、この人はタバコも吸うし、それから戒律はあまり守ることは好きではないラマだったわけだけど、わたしの前で空中浮揚をして見せたと。その空中浮揚の仕方が、わたしは前から前面から飛ぶ練習をしていたわけだけど、彼は後ろから飛び上がって、フワッと上がって揺れながらゆっくり下りていくという空中浮揚なんだね。その人に教えてほしいと言ったら、弟子入りしなきゃだめだと言われてね。

しかし、わたしのグルというのは、ウマー・パールヴァティーも知っているとおりシヴァ大神であり、そしてすべての真理勝者だから、他の人に弟子入りすることはなかなかできないということで、わたしは弟子入りしなかった。わかるよね。

でまあ、その人の技術ではなく、わたしはわたしの独特の技術のマスターによって、その修行の結果によって、空中浮揚を達成することができた。より強い観想で仏陀と合一し、そのますっと空中浮揚をし続けることに成功したんだよ。つまり陸地に降りなくなったわけだね。いいかな。もう一人のわたしの弟子はそのラマについたがために、その生では空中浮揚することができた。しかし、今生で彼は狂ってしまったと。つまり、修行というのは単純に技術ではなく、心のプロセスがあるよね。その心のプロセスを軽視したがためだとわたしは考えている。

そして、その空中浮揚が完成した後、三百メーターか四百メーターかし続けていると、ガンダッバが、天からの贈り物、そうだね、馬車のような乗り物を持ってきたんだね。ガンダッバっていうのはね、第一天界の鳥神なんだよ。鳥神っていってもね、衣が羽の代わりをしていて、音楽を担当しているんだよ。だからね、人間界の天才音楽家はガンダッバの守護を受けているんだね。で、あなたは仏陀になったんだから、つまり六神通をすべて備えたんだから、この供養を受ける必

要があるとしてね。

その乗り物は人間界を瞬間に経験することができる乗り物である。例えば、このジャンブ州、インドを中心としたジャンブ州なんかものすごく速く、パッパ、パッパと通り過ぎていくような乗り物なんだよ。天界の乗り物だから一見ゆっくり走っているようで、大変速く走るんだね。いいかな。もちろん買い物したいときは、そこでパッと買い物できるわけだけど、要するに瞬時に走ると。

で、そのナーガと一緒に乗り物に乗って、わたしがこの人間界の世界を通過した後、砂漠に差しかかったんだよ。その砂漠に差しかかったときに、ものすごく大きな黒竜が登場したんだ、ね。

わたしは先程このナーガの王であったと話したわけだけど、竜にも二つのタイプの竜がいる。で、それは善なる竜と、マーラに支配されている、いやマーラそのものともいえる竜の二つだ。で、その違いは何かというと、例えばそのマーラに支配されてる竜は空中を飛び、顔が二つ付いているんだよ。前と後ろに、ね。

そうだね、大きさ、長さといったら本当に何十キロもあるような長さの胴体を持っていて、ちょうどジェット戦闘機が着陸するかのように、そこへ着陸した、ドーンと。そのときものすごい砂しぶきが上がった。そして、この悪い竜の食べ物はガンダッバなんだよ。つまり、わたしが御者として連れていたガンダッバは大変恐れて、ね、どうしようもないと。特に六月生まれのナーガは悪魔の中の悪魔といわれていて、その恐怖というものはすごいものである。この六月生まれのナーガを、「太古のナーガ」とか「根本的な悪魔」といっている。

実はそのとき、ケイマ正大師がその天界の女神だったんだね。で、ケイマ正大師は、実はその善なる竜を使うことができる女神で、わたしがそのケイマ正大師にお願いしたわけだ。この状態を打開してくれと。そして、ケイマ正大師が竜を呼び、その竜と悪竜とが話し合い、そしてガンダッバが食べられなくて済み、安全に帰ることができたと。いいかな、ウマー・パールヴァティー。



第十一話　除冷淡天の恋と修行

（尊師）わたしはサンツシタとして転生したことがある。つまり除冷淡天の王のことだね。わたしはその前の生で神聖行の修行をなし、そしてまだ煩悩のけがれを有していたから、除冷淡天へ転生したんだよ。

この除冷淡天にはわたしの多くの弟子が存在していたけど、わたしの意識状態は完全に鮮明じゃないから、よく記憶していない。このときの一番弟子はアパーヤージャハだった。彼はヨーガの技法に優れた大変真面目な修行者だった。そして、女性の一番弟子はヤソーダラーだったんだよ。

天界は「行為戯れ堕落天」とか、あるいは「戯れ堕落天」といわれるように、恋愛感情が生起しやすい空間なんだね。アパーヤージャハはヤソーダラーに対して恋心を持った。わたしはそれを利用して、アパーヤージャハの修行を進めさせたんだよ。

「じゃ、アパーヤージャハが成就したらヤソーダラーをあげるよ」と。

ウマー・パールヴァティーもわかるとおり、修行が進んでくれば、当然そういう欲望は消えるでしょう。で、彼は真面目な修行者だったから一生懸命修行し、その結果彼女に対する愛着もなくなり、そして成就したと。わかるね。ヤソーダラーは修行を進めるという役割だけを果たし、二人とも霊性を向上させることができた。

サンツシタとして転生したわたしは、既にテレポーテーション、他の神通力すべてを有していた。ここでの生活は華麗な、しかし室内では質素な集団での生活であった。

第十二話　カッサパ仏の時代に

（尊師）最後に一つ、ミラレパとの縁について話をしようか。

ミラレパはわたしがカッサパ仏のもとで修行していたころ、同じ弟分の弟子だったわけだね。ラーフラも同じだ。経典では草ぶきの小屋となっているけども、あれは初めのころの内容であって、カッサパ仏がもっと有名になられてからは、もっともっと多くの精舎が寄進された。そして、わたしはその精舎の一つを管理している立場にあったわけだ。ところが、彼らは教団にあって火遊びをして火を使ったがために、精舎を焼いてしまった。そのとき、わたしは彼らと一緒に責任をとってそこから出ず、焼け死んでしまった。

ウマー・パールヴァティー、わたしはもっともっといろいろな生を記憶しているよ。霊性の低い者が霊性の高い者に唾を吐きかけたとしたら、それはどのような結果を招くと思うか。それはちょうど天へ向かって唾を吐きかけるのと同じで、自分に返ってくるだけなんだよ。だから、ウマー・パールヴァティー、自分とグルとを別の種族であることを認識しなければならない。

過去世の生について、あるいは未来世の生について、これだけしっかりと認識し記憶している世界観と一致している。つまり、わたしは人ではないんだよ。わたしはもっともっと多くの生を記憶しているけどね、それについてはまたいつか話すことにしよう。

わたしが他の人より知性が高くて当然だよ。なぜかというと、わたしは天界に行って生活している時間が長いから、先程話したとおり、人間にとって一日かかる経験が数秒で終わってしまうんだ。例えば、感動的な映画を見たとしよう。この映画を二度目に見たときは一度目のように感動すると思うか。しないよね。じゃ、それを千度見たらどうだ。じゃ、例えば二時間の映画を千度見たら、どれくらいの時間がかかるか。二千時間ということは、まあ四時間睡眠に当てるとして見続けて約百日間。ところがその二千時間、例えばだよ、一日が一秒だとしてたったの二千秒だ。それほど、わたしと他の人とは経験に対してすべてが違うんだよ。

ウマー・パールヴァティー、天界の住人が供養しているわたしに対して供養す

ることは当然だと認識しなさい。君たちのグルは、世界でもほとんど類を見ない、いろいろな宿命の体験をしている。それを認識し理解しなさい。

第三章　娘に語る死生智の秘密

その一　だれ一人知らないことを話すよ

◉死生智獲得のプロセス

（尊師）ウマー・パールヴァティーよ、それでは、これから死生智がどのようにして生じるのかという話をしよう。

（アーチャリー）はい。

（尊師）死生智は、もちろん宿命通がついていないと生じることは決してあり得ない。しかし、宿命通がついているからといって、死生智はつかないのである。

死生智がつくためには、まず瞑想のとき、そして瞑想からサマディに至りサマディのとき、暗闇に意識が没入する経験を、何度も何度も行なう。この暗闇に意識が没入する経験というのは、実際目の前に暗闇がどんどん見えてき、そして暗

闇からまたずっと下りてこの人間界に戻るという経験を、何度も何度も繰り返すのである。

次に、代謝が異常に落ちる。ほとんど代謝していないような状態に普段の生活においてもなる。そして、精神を集中すると完全に呼吸が止まり、心臓がガクッとブロックを打つような形で止まる。もちろん、初めのうちはそれが大変怖くて、一生懸命心臓をまた動かそうという意識が働き、その意識にまた心臓が動くと。つまりこのとき、心臓を意識によって動かす訓練がなされるわけである。そのときの心臓は完全な停止状態でなければならない。

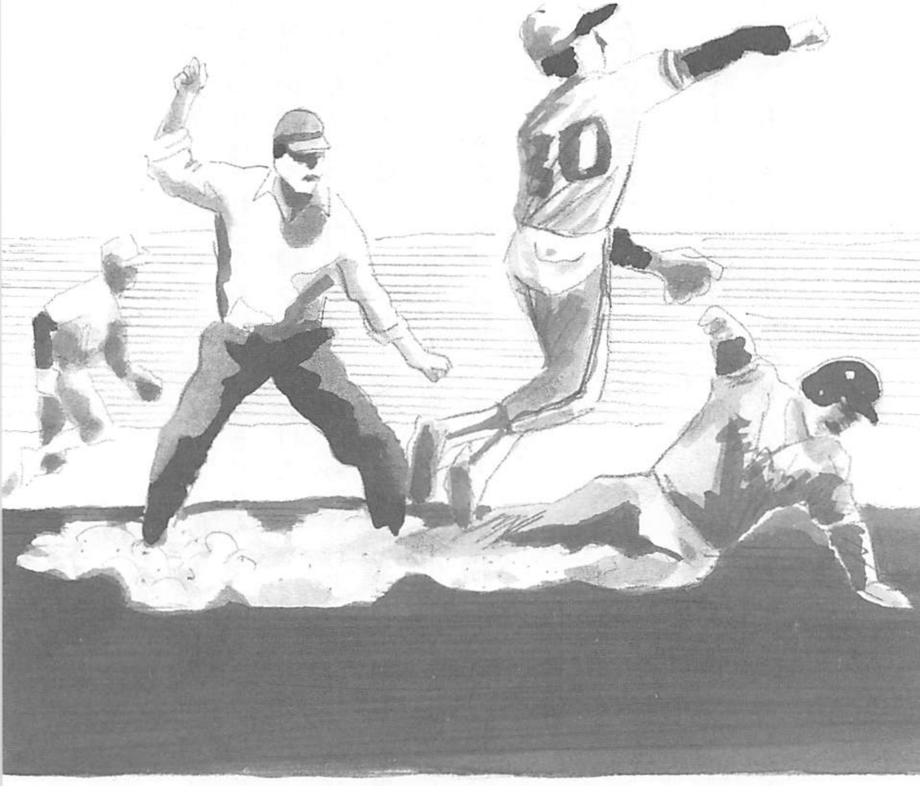
この停止状態を過ぎると、この人間世界だけではなく、いろいろな世界の光が下りてくるようになる。これは実際、ある程度詳しく死生智の項で述べているから、ここではその内容について説くのではなく、そのプロセスだけについて、ウマー・パールヴァティーにわかるように話をしたいと思う。

例えば、意識堕落天を経験する場合、右の気道から赤い光が下りてくると。こ

れは、あくまでも赤系統の光、そのときのカルマの状態によって赤紫であったり、どんよりした赤であったり、あるいは真っ赤であったりするわけだけど、その赤い光の内側にヴィジョンが見えると。そして、そのヴィジョンの動き一つ一つ、例えば意識堕落天の場合、闘争のヴィジョンが見えるわけだね。例えば、野球、空手、柔道、剣道、ボクシング、あるいはバスケットボールとか、あるいはハンドボールとか、いろいろなそういう戦いの試合の場面が出てくる。もちろん、剣を使っての戦い。

そして、そこに集中してると、その右側の気道のその光が徐々に大きくなるように感じるわけだけど、実際はその光が大きくなるのではなく、そこへ飛び込む意識が、その集中するがために、その中に没入するという形になるわけだね。だから大きく感じるわけだよ。わかるかな。例えば、ここに小さな帯があったとして、その小さな帯に意識が集中すると。意識が集中することによって近付くよね、意識が。近付くことによって、大きく見えるようになるんだよ。

第三章　娘に語る死生智の秘密



そして、その世界に入っていくと、徐々にね。この徐々に入っていくプロセスが何度も何度も繰り返されるうちに、はっきりと入っていくようになる。そして、そこでその世界の経験をして帰ってくるわけだ。

それからね、もう一つ面白いのは、これはあの修行者の場合、そのプロセスが変わるわけだね。例えばウマー・パールヴァティーの場合、初め人間界へ来世転生するとするでしょ。そうすると、人間界の世界の、例えばどんよりとしたブルーの光が射してきて、そこへ飛び込むと。次のアーチャリーのその転生のヴィジョンがずっと見えてくるという形になるわけね。

●これはわたしの場合だ

（尊師）で、これはまあ例えばわたしの例だと、わたしはあの、ガンにかかった前後というのは、もうそのとき死ぬんじゃないかと、あるいは二年もたないんじゃ

ないかという時期があったわけだけど、その一回一回によって転生先が違うわけだよね。

例えば、ある時期に死んだら、わたしが巨人軍のね、ピッチャーとして転生することになっていた。ウマー・パールヴァティーは野球を知っているかどうか知らないけど、要するに今の読売巨人軍のピッチャーとして転生すると。

ところが、それからまたどんどんどんどん修行が進んで、次は意識堕落天のね、王様と女王様の子供として転生することになった。意識堕落天の王様の顔というのは、ちょっとカーリーみたいな顔をしてるんだよ。鼻が大きくて、ちょっとボーッとした感じなんだけど、髪の毛は縮れてるんだけどね。で、あのそうだね、タキシードみたいな形の服を着ているんだけど、ま、ちょっとタキシードとは違うんだけども、ああいう感じの背広っぽいのを着てて、その王妃様はものすごく美人なんだよ、ね。そこへ転生するはずだったと。

で、そこへ転生する場合、その意識堕落天の人たちというのは大地に足を付け

てないんだよ。つまり地の人じゃないわけ。少し浮いてるのね。そうだね、二、三十センチ浮いてるんじゃないかな。歩くときも浮いて歩いているんだよ。で、なぜ浮いて歩いていて大丈夫なのかというと、このウダーナ気が強くて、このウダーナ気というのは上に引き上げる力が強くて、結局バランスがとれているわけだね。

でまあ、それからもう少し修行が進んで、次に死にかかったときには、今度はガンダッバに転生するカルマが出てきたんだね。ガンダッバというのはね、第一天界の鳥神、鳥の神なんだよ。で、実際体は鳥ではなくて、ガンダッバの着ている衣が空を飛ぶ衣なんだよ。日本の昔話で「天の羽衣」という話があるでしょ。ああいう感じの衣を着ている神様なんだよ。で、この神様はガンダッバの木って大きな木があるんだけど、そこで生活しているわけ。木で生活しているんだよ。

で、このガンダッバの仕事っていうのはね、音楽を作ることなんだよ。だから、わたしがたくさん曲を作ったでしょ。今年、そうだね、時間数にして三時間分とか四時間分とかできたのは、あれはまさにそのガンダッバのカルマがわたしにあ

るからなんだね。だからあれだけできたわけ、ね。
もちろん、ウマー・パールヴァティーも知ってのとおり、天界に移行するときはスッとそのまま入っていくからね。そして、そのまま天界の住人になってしまうと。これが天界へ移行する場合。これは神聖天界へ移行する場合も同じだ。だいたい、神聖天界へ移行する場合は、死んだ瞬間にその肉体から次の身体が離脱するんだよね。離れるんだよ。離脱ということは、離れて脱する、抜け出すことなの。そして、そのまま垂直、上の道をスーッと上がっていくんだよ。
（アーチャリー）頭から？
（尊師）頭から、ね。で、上がっていってそのまま宙に浮いて、そしてそっから神聖天界へ入っていくわけ。
（アーチャリー）神聖天も歩くときも……。
（尊師）神聖天も歩くことはできるけど、もちろん浮いてるんだよ。それよりも高く空を飛んでるわけ。そうだね、だいたい、もちろんこういう神聖天にも道場

があるわけだけど、道場のどちらかというと天井に近いところをスーッと飛んで、で下りるって感じなのね。まあこれが一般的には天界、意識堕落天、人間界へ転生するときだね。もちろん……。

（アーチャリー）神聖天は……。

（尊師）もちろんだよ。この死生智というのは、要するに死と転生だから、まずコーザルのバルドー、つまり、人間は死んだ瞬間に経験を超えたコーザルのバルドーに行くわけだけど、そこから徐々にまた経験の蓄積、ね、そして形状界、欲界と落ちてくるわけだよね。これは、ウマー・パールヴァティーも『死と転生』（死と転生を舞踏で表現したオペレッタ）を見たからよくわかると思う。

◉死と転生

（尊師）だいたいまあ、一般的には人間が死んだときどうなるかというと、コー

ザルのバルドーに突っ込むわけだね。コーザルというのは、要するに心の本性、本質のバルドーに突っ込むわけ。ところが、今の日本人というのは心をほとんど磨くような修行をしないでしょ。心を綺麗にするような修行をしないよね。だから、結局はそこを経験しないで、次は形状界のバルドーへ行くんだよ。

ところが、形状界の、例えばシヴァ大神とか、あるいはヴィシュヌ神とか、あるいはサキャ神賢の弟子たちがたくさんいらっしゃる所とか、あるいはグル・リンポチェとか、すべて形状界にいらっしゃるわけだけど、そういう形状界についても帰依がないよね。今の日本人は欲望だらけだから。だからだいたい、即そのまま悪趣へ転生しちゃうわけ。

ただ、まあ一通りそこのところを説明しておかなきゃならないから、簡単に説明しておくと、だいたい三日半、チベット的な宗教心のある一般の人はとどまるといわれている。

だから、逆の言い方をすれば、日本人はもうここへはとどまらないと考えた方

がよかろう。だいたい、こうやって手を打つぐらいのね、時しかとどまらないと。わかる？　あるいは、ちょっと少し仏閣とか行く人は、食事をするぐらいの時間とどまると。つまり三十分とか一時間とかとどまると。で、もう少し信仰心の強い人は、だいたい三日半とどまるといわれているんだよ。で、この辺はどうなるかというと、人間が転生に必要なのは四十九日間と決まっていて、これ以上経つとだいたい、霊として生まれ変わるんだね。

（アーチャリー）霊って？

（尊師）つまり幽霊だよ。

（アーチャリー）幽霊！

（尊師）そうそう、形を持たない低次元の霊。つまり低位アストラルへ転生するんです、ね。しかし、そういう例は少なくて、ほとんどこの四十九日間で転生するんだよ。

で、この四十九日間のバルドーっていうのは、例えば一週間とか、こっからこ

こまで二週間といわれているのは、あれはあくまでもオーソドックス、つまり、一般的な普通の形であって、わかるかな、実際はそれぞれの人たちがその前の生においてどういう生活をしてきたのかと、どういう生き方をしたのかと、ね、あるいはどういう修行してきたのかと、あるいはどういう宗教実践したのかと、ということによって、違うわけだね。で、まあ簡単に言うならば、その三日半の後、ま、だいたい一週間が平和の神々が登場して、残りまあ一週間が恐怖の神々が登場すると。ね、でまあ、残りは欲界のバルドーをさまようんだということになっている。わかるよね。

じゃ、例えばリンポチェ、生まれ変わりといわれる人はどういう経験をしているのかと。わたしもそうだけど、だいたいほとんどの期間は、バルドーで生起から、死から次の生までのバルドーで、お仕事があるんだよ。つまり、自分と縁のあった人たちを、そこで会って、「そこは違うよ、こっちだよ」と引き上げるわけ。あるいは閻魔（えんま）さんの所へ行って、「こいつは悪いことをしているけど、来世

頑張りますから許してください」と。こういうお仕事があるわけ。

（アーチャリー）許してくれる人もいるの？

（尊師）もちろんほとんど許してくれるよ。ね。そして、こういうお仕事をして、残り最後の、ほとんど四十九日に近いくらいのときに、目の前にドーシといろんなヴィジョンが見えてくるわけ。大スクリーンが見えてくるんだよ、ね。そして、その大スクリーンで、次の生はここで転生して生きようと考えるわけ。

◉尊師の失敗

（尊師）実は尊師失敗してね、今生。なぜ失敗したかというと、実は前生わたしは意識堕落天の王様であったし、で、その意識堕落天のグルだったんだよ、ね。ところが、意識堕落天の食い物っていうのは、カニとかエビとかあるいは貝類とかが好きなんだね。好物なんだよ。だからね、ドーンと目の前に見えたヴィジョ

ンが、それをみんなが食べてるヴィジョンで、家族が。今のお父さん、お母さんが見えてきて、今の兄弟が見えてきて、でわたしの姉が見えてきて、姉は今結婚しているわけだけど、結婚しているだんなさんも見えてきて、すごく楽しそうなんだよ、食べてるんだよ。それに引っかかっちゃったわけね。つまり家族団らんとその食い物に。

そして、どんどんどんどんヴィジョンが近付いてきて、あああって子宮に入っちゃったわけだよ。わかる？ だから前生において性的、そういうものを完全に捨断していたから、今生はわたしはすごくそういう性的発現っていうのは遅かったよね。

（アーチャリー）性的発現って？

（尊師）つまり性欲っていうの遅かった。二年とか三年ぐらいじゃなかったかと記憶してるんだけど、普通の人たちっていうのは、もう今は何歳で経験しているからね、だいたいそういうものを。で、しかもそれは周りがそういうことを一切

教えてくれなければ、尊師は知らなかったと思う。
（アーチャリー）教えたの？
（尊師）いろんな人がいろんなことを教えてくれたから、要するにそれだけカルマが悪かったんだな。食い物に引っかかったがために。

◉三悪趣への転生はこうなる

（尊師）まあそれはいいとして、でね、じゃ次は地獄へ転生するときはどういう形で転生するんだと。
（アーチャリー）下に引っ張る。
（尊師）もうこれは下に引っ張るというか落ちていくんだね、スーッと。
（アーチャリー）頭から？
（尊師）頭から落ちていく場合もあるし、足から落ちて行く場合もあると。

第三章　娘に語る死生智の秘密



（アーチャリー）横から。

（尊師）横っていうのはまずないね、普通はね。あるいは実際はヴィジョンが見えてきて、そのヴィジョン、例えばね、前生で、猟師って知ってるかな、鳥をパーンと撃って殺すとか、鹿を殺すとかいるよね。そういう人たちはそういうものが見えてくるんだよ。そしてそれに対して、「よしあいつを殺して生活の足しにするぞ」って気持ちになっちゃうわけ。わかる？

（アーチャリー）だれが。

（尊師）猟師がだよ。で、その鹿を追いかけると、ね。で、「殺すぞっ」と思って矢を放った瞬間、もうそこは地獄なんだよ。もうそこから逃れられない。わかる？

あるいはね、動物の世界はものすごく恐怖が襲ってくるわけ、ドーッと。それは、今まで多くの生き物に恐怖を与えたがためのカルマだと思うんだけど。そしてね、動物の世界の入り口があって見えてくるんだよ。たくさんの蛇とか鳥とか、

いろんなものがうごめいているわけ。
（アーチャリー）だけど尊師はよけるんでしょ、それを。
（尊師）いや、尊師はよけられるけど、普通の人はそれに対して恐怖しながら飛び込んでいくんだよ。で、もう気付いたときには動物の生が始まっているわけ、ね。
　これは餓鬼界も同じだね。貪りを背景として、貪ろうとした瞬間にそういう世界へと転生するわけ。いろんな食い物が出てきてね、貪ろうとした瞬間にそういう世界に転生するんだよ。
（アーチャリー）そういう人の場合も尊師言うの？「来世この人は頑張るから、許してあげてください」って。
（尊師）そうだよ。だから、縁のある人は何とか済度しようとするよね。
（アーチャリー）済度のできない人もいるの？
（尊師）そりゃ済度のできない人もいるけど、だいたい閻魔様とは話し合えるけ

ど、その人が帰依がなかったら落ちていくでしょ。それはちょうどサマナが落ちていくのと同じだよね。どうしようもないでしょ、それは。それでね、こういうことを知り尽くす智慧（ちえ）、これが死生智なんだよ。

（アーチャリー）ふーん。

（尊師）わかった?

（アーチャリー）はい。

その二　ドゥルガーよ、よく聞きなさい

◉死生智はこう現われる

ドゥルガーよ、よく聞きなさい。これから述べることは、絶対的真理である。そして、この状態に到達する魂は、最終解脱の一歩手前だということができる。宿命通の項でも神通力の順番、深さについて、わたしはウマー・パールヴァティーに語った。そして、これからドゥルガーに対して、宿命通よりもっと深い神通力である死生智について話をしたいと思う。

この死生智の背景にあるものは、純粋な天眼である。つまり、神の眼である。この神の眼によって、衆生がどこへ転生するのか、そして次の生どのような人生を送るのか、あるいは世界はどのように構成されているのかを、はっきりと見る

ことができるのである。では、その構成はどのような形で現われるのであろうか。
まず、修行者は完全な暗闇を意識のある状態で経験するようになる。そして、その暗闇が少しずつ少しずつ明るくなる経験をする。この明かりというものは、その体験を行なっている者の意識の鮮明度を表わしている。そして、その意識の鮮明度がある段階に来ると、自分自身の上方、あるいは下方からいろいろな光が見えるようになる。
この上方、下方から見える光は、上から見える光は天界の光であり、下から見える光は悪趣の光である。例えば例を挙げるなら、足元に緑の光が見えるとした場合、それは動物の世界へと導かれる光である。例えば、黄色い光が見えるとしたならば、それは餓鬼の世界へ導かれる光である。例えば黒い光が見えるとしたならば、それは地獄の世界へと導かれる光である。
では、上の光とはどのような形で見えるのであろうか。それは、三百六十度、プラス中央といった形で光が見える。そして、その光に現象が投影される形で現

われるのである。例えば例を挙げるならば、ガンダッバはちょうど鼻のところに上からブルーの光が降りてきて、見えるような形となる。例えば、意識堕落天は右側に赤を背景とした、赤系統の光を背景とした光が降りてき、そこにヴィジョンが移ることになるのである。このような形で、死生智というものは現われるのである。

では、なぜこれを死生智というのかというと、それは魂が前生において善業あるいは悪業をなす。その結果として、この死生智というものは現われるわけである。そして、それは来世を先取りする形で現われるのである。よって死生智なのである。わかるかな、言ってることは。

この死生智はステージが進めば、より多くの光を同時に経験するようになる。よくチベットの経典で光の帯が降りてき、例えばそこに、ラトナサンバヴァとそのファミリーが見えるという記述がある。それもすべて同じである。実際は、光の映像が投影されている状態と考えるべきなのである。

◉動物が転生するときは？——ネズミ

じゃ例えば、動物が転生するとき、どのような形で転生するのであろうか。今、オウム真理教富士山総本部道場には、多くのネズミが生活している。これはわたしを含め弟子たちが殺生をしないから、ネズミが楽園だと考え、そこで生活しているわけである。しかし、彼らも寿命は短いから、そして野生であるから多く死ぬ。その場合、ネズミはだいたい次の生もネズミである。なぜならば、ネズミからネズミと転生するということは、まだそのネズミがネズミであるカルマを止滅し切っていないから、一生では、高い世界や低い世界の転生っていうものがあり得ないことを表わしている。

一般的に考えられる輪廻転生と実際の構造はかなり違っている。例えば、その人の最も強い要素を経験し続けること、これが輪廻転生なのである。例を挙げるならば、ここにネズミがいると。このネズミは、例えば祭壇のお供物を盗み、あ

るいはいろいろな異性のネズミとセックスをし、そして例えば共食いをし、争い、遊びほうけると。これはいずれも無智を根本として働いている。

そして彼らは、特にオウムで生活するネズミは、そのネズミの生というものを楽しめるから楽しんでいる。楽しんでいることによって、また次はその経験が中心となり、ネズミへと転生するわけである。その場合、彼らが死んだ後、アストラルでも同じようなネズミの形状をとり、そしてそのまま案外早い時期に転生する。彼らにとって他の世界は見えないのである。

◉様々な人間の転生

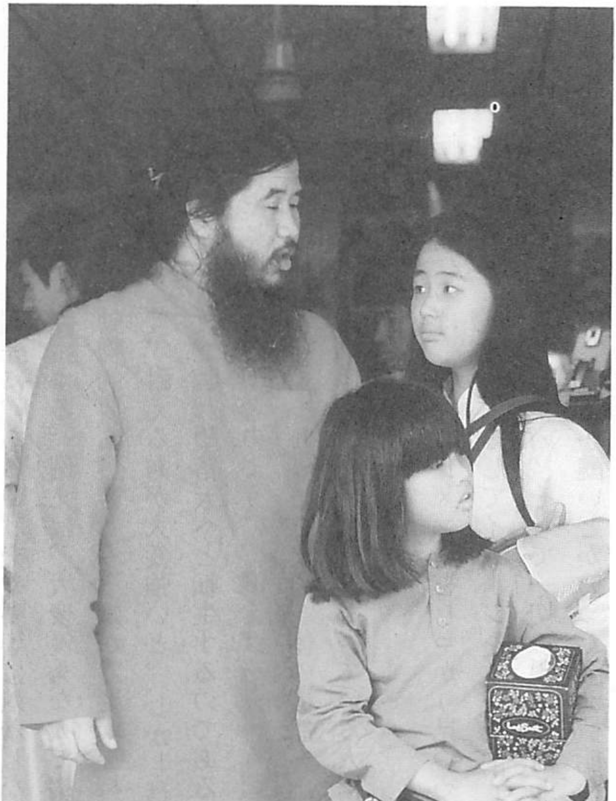
人間にとっても同じことがいえる。人間の生において、人間に認められている殺生の範囲っていうのは限られている。しかし、現代人はほとんどその殺生をオーバーし、それから偸盗は少ないとしても、あるいは邪淫は少ないとしても、妄語

をオーバーし、それから、酒あるいはタバコ等といった心を集中させることのできないものを飲んだり吸ったりする。それゆえに、人間は人間以下の世界へ転生することが多くなる。

例えば、物が食べたくて、食べられない状態で死んでいく。これは餓鬼の世界への転生なのである。例えば、ボケて死んでいく。これは動物の世界への転生なのである。この例えば餓鬼の世界、動物の世界へなぜ転生してるといえるかというと、まず、貪りの心をもって、それがかなわない状態、これが餓鬼の世界だからなのである。そして、ものが全く考えられない、記憶が途絶えている状態、これが動物の世界なのである。

よって、死ぬ前にその人は次の生どのような生へと転生するかということが、だいたいわかってくる。例えば、体全体が痛みに苦しむ。苦しみながら死んでいく。この人は来世地獄へと転生するのである。

例えば、そういう痛み、あるいは貪り、あるいは無智がなく、はっきりとした



尊師と長女のドゥルガーとアーチャリー

意識状態で、そしていろいろ肉親等に、あるいは夫や妻等に執着しながら死んでいく。これはだいたい人間界へ転生する。例えば、大変優秀な人で権力に執着している、しかしもう一方では、動物的要素、苦しみを嫌がる要素を持ってる人は、意識堕落天へと転生する。そして、耐える力が大変強いと、しかし性愛の喜び、食べ物の喜び等を求めている人は、戯れ堕落天へと転生するのである。

そして、仏教の聖者やヒマラヤの聖者のように、例えばそういう煩悩を一切捨断し、そしてサマディを楽しむと。つまり、心を止め、体の機能を止め、そして肉体から完全に心の本質を切り放すと。この修習を行なっている人は神聖天界へと転生するのである。

そして、最高の転生というのは、五大エレメントをしっかり見つめ、それを一つ一つ崩壊させ、感覚を完全に止滅し、そしてイメージを完全に消してしまい、経験そのものの要素を完全に消してしまい、そして一切の現象に対して、それが善であるとか悪であるだとか、美しいとか醜いとかいった識別機能を超越したサ

マディの状態に入ることができるようになった者、この魂は煩悩破壊界へと転生するのである。

◉死生智の深みを理解せよ

ではドゥルガー、よく理解しなければならない。死生智というものは、これだけ深いのである。そしてこれだけの深みを理解することができるならば、おのずと道は決まってくる。

例えば、悪業をなせば、自分の来世は苦しみの生である。善業をなせば、自分の来世はこのように楽しい生である。あるいは、大徳を積めば、自分の来世は大変豊かな生である。貪れば、自分の来世は大変貧しい生である。あるいは、邪悪心・嫌悪を修習すれば、自分の来世は痛み多き、苦しみ多き生である。慈愛を修習すれば、自分の来世は大変幸福な生である、心豊かな生である等のことが理解

できるわけである。
いいかなドゥルガー、そして、これらのことをはっきりと知ることにより、道が確定されてくる。「わたしは聖なる道を歩こう。わたしは聖なる実践をしよう」等である。
オウム真理教にはポアという儀式がある。このポアという儀式は、魂が死に際してどの世界へ導かれるかを知り、そして、その転生を変えてしまうという儀式である。これは、ポアの儀式がしっかりなされるだけでは効果がなく、実際は今述べた死生智が理解されないと、そして経験されないと、そのポアを正確に行なうことができないのである。
よって、ドゥルガーは理解しなくてはならない。「この死生智を身につけよう」と。そして、この死生智は、次に来る漏尽の一歩手前である最高の神通力なんだということを認識すべきである。いいね。

第四章　かけがえのない宝石

——尊師説法集

第一話

今こそ話そう――わたしはマイトレーヤ

（九一年一月二十七日　於・新東京本部）

◉『南伝大蔵経』翻訳の成果

今日は皆さんに、あまり説いていない天界の話をしたいと思う。なぜわたしが今までこの天界の話をあまり説かなかったのかというと、まだまだわたしの中に疑問が残っていたからである。つまりそれは今仏典でいわれてる天界と、わたしが経験している天の世界との間に大きなギャップがあったからである。しかしそのギャップが少しずつ少しずつ埋められ、そして今日は、ある程度あなた方に話してもいいかなと。それと同時に、未来仏マイトレーヤの特徴についても、少し

お話ししてもいいかなと。
それは今オウム真理教で、そうだね、十数名がそれにかかりきりになり、必死に訳し、わたしもそれに加わり検討している『南伝大蔵経』の正しい翻訳が、少しずつ少しずつでき上がってきた段階で、わたしの中に確信ができたから皆さんにお話しするわけである。
真理というものは、例えば真理の体現者というものは、たとえそれをね、知っていても話さないことがあります。それはどういうことかというと、例えば、今までの仏典と違ってるとしましょう。自分の見た体験が正しいのか、あるいは仏典が正しいのか、徹底的にこれを吟味します。なぜならばもし自分の経験がイリュージョン、つまり幻影であるのならば、それは大変な悪業を積むことになるからです。そして慎重に、慎重に、皆さんに真理の法を展開していくと。
わたしは、いろんな宗教家がいろんな世界観を出してるが、大変うらやましいと思う。なぜならば、その間違いというものが、どれほどの悪業であるかを知ら

ないで出せるからである。

◉第一天界――四大王天の世界

ではまず第一天界についてお話ししましょう。この第一天界というものは、もちろん四預流支(しよるし)の実践を行なう者が、最も行きやすい世界であると。この四預流支の実践者が行きやすい第一天界。この第一天界には四人の大王がいます。よって四大王天という言葉があります。そしてここの、四大王天の役割は、まず多くの国、例えば日本、アメリカ、あるいはフランス、イギリスといったようなね、多くの国々、まあ、一国一国に一人の王が付いてると考えてください。そしてこれらの王様は、堅固に国を統治させるという役割があります。

そしてもちろん、この堅固に国を統治させる王様は、前生において善政をなした聖王が転生する世界でもあります。現代でいうならば――少し小さくまとめ

るならばね――例えば会社があり、その会社に対して円満経営を行なわせ、従業員が大変平安に生活していると。こういうところの経営者が行く世界でもあると考えてください。

　もちろんこの天界というものは布施、そして持戒がなされていないと、その長となることはできません。これが一番目の第一天界の王です。この堅固に統治する大王は寿命が九万歳といわれています。この九万歳は、人間の寿命と同じ時の流れで九万歳です。そして人間の寿命が最長に延びる、つまり、八万歳まで延びる時期があるわけですが、このときは、天界とそして人間界とがつながります。よって自由に天を見ることができます。あるいは天へ行き来することもできます。

◉四大王天の神々

第二番目の四大王天の王様、これは成長天といわれる王様です。この成長天は

妖精を支配し——わたしは以前の説法で、妖精は第一天界に属するという話をしたと思うが、やはり間違いなかったみたいだね——妖精を支配し、それから守護神を支配し統治します。そして人食い鬼神、これも支配していますと。で、これは何を統治するのかというと、植物の生長、あるいは生命体の成長に関わることを行なっているという天界です。

そして三番目の第一天界は何かというと、空、天空ね、天空を支配している王様です。この大王は雨、風、あるいは気候等を管理します。そしてこの王様は、龍ね、「龍宮の宴」の龍。この龍を支配していると。

そして四番目の大王は衆生の、つまり一般の人たちが外傷、つまり例えば事故とか、あるいはケガとかから守られるような働きをしている王様です。

で、この四つの大王。これを称して四大王天といいます。ここで一つ問題になってくるのは、例えば先程も述べたとおり経営者、あるいは王様がそれを善政によって統治した場合、行く世界であるということがいえます。

そして成長天に関しては、生き物を殺さず、生き物の成長を温かく見守った人、この人が行く世界であると。それから天候を司る大王の世界へ転生するためには、これは、すべての人が幸福に、つまり豊かな食べ物ね、あるいは船の航行、その他の天候をひたすら祈る、そういう役割の、例えば神官あたりね、その魂が行く世界であるということがいわれています。

そして最後の庶民を外傷から守る。これは例えば軍隊の英雄その他が行く世界であるといわれています。もちろん王が行く場合もあります、それは。そして、この中で、この第一天界で最も幸福に生きるためには、先程述べた真理を実践し、そしてその四つの条件の一つをクリアした者、この魂が第一天界へ至ると、その四大王天の中でもトップとなり、そして与えられた寿命以上の寿命を与えられ、享楽その他の喜びを満喫することができるといわれています。これが第一天界です。

◉第二天界――有能神の世界

では、第二天界。これは皆さんも知っている三十三天といわれている。この三十三天の主である有能神――これはね、オウム真理教の言葉がどんどん変わっていってるのは、わたしの体験を基に、その漢字、あるいは文字を見るだけで、皆さんが一目瞭然になるように変えていっています。ですから、例えば現正覚という言葉があるとした場合、それは「現実に正しく悟っている」あるいは、「現世において、正しく悟っている」というふうに読めばいいわけであって、例えば、先程言った成長天といったら、「成長を司ってる天界」であると読めばいいわけです。そういう形で、今どんどん言葉が変わっていますが、その言葉を使うならば、三十三天の主は有能神であると。

この有能神とは何かというと。この現世において大いに功徳を積み、そして大変才能が豊かで、その才能をもって他の魂のために活かした魂が行く世界です。

例えばオウム真理教でいうならば、アパーヤージャハ、あるいはマイトレーヤといった者が行く世界であると考えてください。

◉第三天界——流転を支配する双生児の天

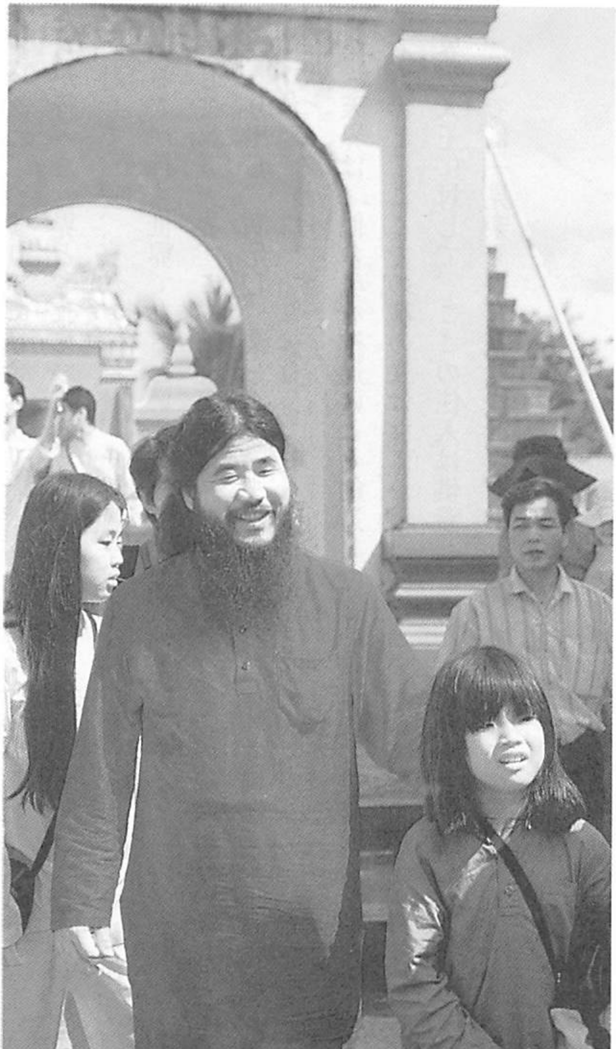
そして、第三天界、この第三天界は「流転を支配する双生児の天」といわれる世界です。流転を支配する双生児の天とは何かというと、悪業に対しては強烈に裁き、善業に対しては、その善業の果報を与えると。もちろんこの範疇（はんちゅう）に入るのは有能神の世界までということになります。

この双生児の天とは何かというと、この双生児は、この現象界と、そして低位アストラルの支配者であるということを意味しています。これが第三天界の魂のわけだが、この第三天界の主になるためには、要するに輪廻転生（りんねてんしょう）の法を説き、そして多くの魂をできるだけ高い世界へ引き上げた、そういう魂が行く世界である

と考えてください。
例えば葬式のときにポアをすると。もちろん葬式のときにポアをしないで、ただ単にお経だけ読んで、たくさんのお金をもらうと地獄へ落ちます。こういうこの、二つのパターン。端から見たら全く同じなわけだけども、結果は全く違ってくると。一方は夜摩神として生まれ変わり、つまり輪廻転生を支配する双生児の天人として生まれ変わり、もう一方は地獄へ落ちることになります。

◉除冷淡天・創造満足天・大魔王の天

そして第四天界。これは覩史多天(つしたてん)とも兜率天(とそつてん)ともいわれてる世界です。この世界はチベット語の訳では歓喜の園、歓喜天という訳が与えられています。実際これは結果を論じた訳であって、正しい訳としては除冷淡天ということができます。
この第四天界に住む魂は四無量心の実践者であると。例えば仏陀(ぶっだ)の弟子である、



スダッタね。つまり祇園精舎の寄進者。あるいはマッリカー妃ね。こういった人たちが行った世界とされています。つまりどういうことかというと、すべての衆生に対して、愛、哀れみ、称賛、そして平等心を持つ修行をし、それが達成できている人が行く世界であるということです。

そして第五天界、この第五天界は創造満足天と。ここの魂は自分の欲しいものをつくり出し、満足し、楽しんでいます。もちろんこれは神変、つまり神通力によってつくるわけです。

第六天界は、他の魂を神通により創造したものによって供養し、そして喜んでいる世界と。ここでの魂の長はマーラ、大魔王といわれてるものです。この長、欲界の大王に対して、ここの住人は供養し、また、下からも供養されます。よってここでは一見楽しか存在しません。しかし、もちろんこの世界は無常です。

◉神聖天に生まれ変わる条件

そして、ここまでの世界は瞑想優位というよりも、功徳優位の世界です。この上に来る梵天、この梵天界を正確に訳するならば、神聖天、あるいは神聖神ということができます。この神聖神とは何かというと、この梵天界へ生まれ変わるためには瞑想が必要で、その瞑想の中に悦、喜、軽安、楽の少なくとも一つが含まれてなければならないという条件があります。そして、そのステージにおいて、この神聖天の住人、あるいは大臣、あるいは王様という形で転生します。

ま、これより上の世界に光音天、その他があり、ニルヴァーナが存在するわけですが、在家の修行において頑張った場合、限界はこの神聖天であるということがいえると思います。

◉非神――マイトレーヤ

わたしが皆さん方に対して確信を持った理由をお話ししましょう。実はわたしは前生――つまり一生前だね、阿修羅の王様でした。そして王様、正確な言い方をすると修行者となり、大教団を率い、それから推薦され王となり、そして王の権力を譲り、そして、人間界へ次は転生したと。

で、わたしは自分自身の前生がマイトレーヤであると確信しています。それは守護神の声、それから自分の修行上の体験、それからアストラルでの体験、これを踏まえての話です。ところがどうもおかしいと。なぜおかしいのかというと、マイトレーヤは第四天界、つまり除冷淡天、四無量心を実践してる天界で生きているはずであると。であるにかかわらず、わたしが阿修羅の王様であるというのはおかしな話だと。これについて結論が出るまで、皆さんにその話をしないことにしようと考えていました。ところが面白いことがわかりました。

その面白いことというのは何かというと、まず仏陀釈迦牟尼が人間界へ降りる前、仏陀釈迦牟尼は除冷淡天——皆さんの聞きやすい言葉を使うならば、観史多天において、「白閃光」というホーリー・ネームだね、がありました。白閃光とは何かというと、白い閃光を放つ者ということです。そして現在除冷淡天で生活しているはずのマイトレーヤのホーリー・ネームはなんと「非神」、神に非ずと。この神に非ずとは何かというと阿修羅を意味しています。つまり阿修羅とマイトレーヤとは同体であると。

そしてもう一つ面白いエピソードがありました。それはマイトレーヤの率いていた弟子たちは破戒が多いんだね。戒律を守らないわけです。そしてこの除冷淡天から落っこち、そして阿修羅となったというエピソードがあります。

そして、もう一つこれはわたしの弟子がアストラルで読んだ教科書ね。これでは尊師は大変ステージが高いんだけども、弟子たちのステージが低いからしょうがないんだよと。で、これは何を意味してるかというと、マイトレーヤのステー

ジは高いが、弟子たちは低いという内容と一致しています。まあ、この他にもその証明としてはたくさんあるわけです。

ということは、そろそろ、そのマイトレーヤ――自分の前生も含めて合致したわけだから、信徒の皆さんにね、アピールしてもいいかと思ったわけです。ただそれと同時に大変残念な気持ちがしました。それはわたしの弟子はやはり戒律を守らないんだなと（場内　笑）、ね。だから一説によると五十六億九千万年後に、マイトレーヤは降誕するということになってるんだなと。

◉絶対的な真理の展開を

このように経典とそれから体験が一致した今、わたしは今まで以上にはっきりと皆さんに言うことができる。それは今わたしたちが与えられてる価値観は幻影であると。わたしたちにとっての利益は何かというと、それは布施、奉仕、持戒

の実践、そしてカルマを落とされて瞑想し、できるだけ高い瞑想体験を得ることであると。しかもそれだけではなく、多くの衆生に、この真理の法を展開しなければならないと。いかなる圧力がかかろうとも。例えばわたしが断頭台に立たされ、首を切られようとも。あるいは百万ボルトの電流が流され、死刑に遭おうとも。わたしは、わたしの経験した真理と、そしてわたしの今研究している、学んでいる、仏典とをもとにね、皆さんにもっともっと激しい、そして絶対的な真理を展開したいと思います。

わたしがなぜこういう話をしたかというと、よく凡夫はこのような話をします。オウム真理教のいってることは一つの真理だろうと、わたしはこの現実をうまく生きればいいんだと。

しかしそれは、大通りをものすごいスピードで車が突っ走っていると、その中をわたしは平気であると渡るのと同じように、無謀でそして破滅を招きます。腐ってるものは腐ってるもの、腐っていないものは腐っていないもの。真理は真理。

邪悪見解は邪悪見解であるということをはっきり認識しなければならない。そして一時の損を捨て、久遠の絶対的な利益を得ていただきたいと思います。

◉五蘊を神々に変える修行

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。その避けられない死に対して、どのようにアプローチするのか、そしてどのように生きるのか、どのように心を完成するのか、それがわたしたちの課題です。わたしたちのこの肉体、感覚、イメージ、意志、意識というこの五つの集まりを神々に変え、そして最終的には絶対的な境地であるマハー・ニルヴァーナへと安定させることがわたしたちの修行の狙いです。

では最後に何をなせば天界へ行くのかと。それは簡単です。まず真理を学び、布施をなし、奉仕をなし、そして天界へ行くぞという思念をすると。わたしは来

世天へ行くぞと。絶対天界行くぞと。わたしは来世三悪趣へ落ちないぞと。そのためには少しぐらいの苦痛は落とさなきゃならないと。

さあ、皆さんは一時的な喜びを求め、長い長い間苦しみの世界へ没入しますか。それとも勇気を出し、努力をし、天界へ行きますか。わたしは皆さんのお手伝いができれば幸いだと考えています。

第二話

カルマと欲六界の形成

（八九年三月三十日　於・富士山総本部）

◉阿修羅王となった前生、そして縁

今日は縁について話そう。この縁というのは別の言葉を使うならば条件という言葉に置き換えることができる。果たしてこの条件とは一体何を表わしているのだろうか？　昨日わたしは、わたしの輪廻転生（りんねてんしょう）の中で阿修羅世界の王様であったことがあると、あるいはとう利天の、帝釈天（たいしゃくてん）ね、インドラであったことがあるという話をした。まあ、他にももっと君たちが興味のある前生があるわけだけど、いろいろ見ていると、どうもひょっとしたら、このシッシャの中にもスパイが紛

れ込んでいるかもしれないから、あまり重要な生についてお話をしないことにしようと考えている。時期が早いと。

それでね、よく人と人との縁を表わしている阿修羅（意識堕落天）王の、わたしが阿修羅王になっていく過程の縁についてこれから話したいと考える。わたしが阿修羅の世界に生まれたときの母親は今のケイマ大師と。いや、笑い事じゃないよ、ほんとだよ、これは。で、そのときはあまり身分の高い位に生まれたわけではない。そして、わたしは長男で二人兄弟であったと。で、そのときのわたしの弟が今のティローパ大師なんだね。

で、まあ、徐々に徐々に力を付けてのし上がっていくわけだけれども、わたしが十三歳のとき、正確にいうと九歳のときにわたしの父とケイマ大師は離婚をしていると。離婚という、まあ、今の人間界の結婚の形態ではないから、離婚とはいえないのかもしれないけど、要するに大きな争いをなし、そして、別れたと。で、ケイマ大師は今のマハー・カッチャーヤナ、彼と恋人関係になり、わたしと

ティローパ大師は阿修羅の世界でさまよったわけだ。

しかしだよ、今日話す縁というのは大切なもので、いいかな、ケイマ大師はそのときにわたしに尽くさなければならないカルマがあったから今生一番弟子としてわたしの弟子になったんだよ。そして、大いに尽くしたと。そして、三つ目までのヨーガをとんとん拍子で成就したと。

じゃあ、なぜ彼女と出会って、彼女は三つ目のヨーガまでとんとん拍子で成就したんだと、ね。それはわたしの修行そのものが大乗の修行、悪縁を善縁に変えていくという修行だからなんだよ。例えばこの中で親子の縁、すごくまずいね、親子の縁があると思う。しかし、それに対して例えばもし大乗の心を持つならば、縁というのは、例えば悪縁にしろ善縁にしろ、深い方がいいわけだ。なぜならば、これは結び付きが強いということになるからね。もちろん、ケイマ大師にわたしが捨てられる背景にはね、その前の生において、わたしがケイマ大師をたくさん傷付けたという縁があるわけだ。ただ単純にそのカルマによってわたしはケイマ

大師に捨てられ、ね、一見路頭に迷ったような状態になったと。
　で、ポイントはここなんだよ。例えば、もし彼女がわたしと今のティローパ大師を、そのとき捨てていなければ、わたしは阿修羅の王様になることはなかっただろうと。ということは、ケイマ大師がわたしを捨ててくれたということは、どうだ、素晴らしいことになるよね。わかるかな、言ってることは。阿修羅の世界というのは要するに闘争本能が強ければ強いほど、ね、努力する気持ち——阿修羅と地獄の違いはわかるよね。阿修羅の本性というのは闘争だから、闘争という背景には努力があるんだ。今の人間以上の激しい努力がある。
　そして、もしわたしにそれだけの闘争本能を燃やさせるだけの条件を彼女がつくってくれなかったら、わたしは阿修羅王になれなかっただろうと。
　十三歳から十六歳までの三年間ぐらいは、わたしにしろティローパ大師にしろ、ちょっと困った時期があったけれども、阿修羅の成長というのは人間の成長より早いんだよ。よって今の十六歳といったらね、人間界の十六歳と阿修羅の十六歳

は違うんだね。今の二十五歳ぐらいの年齢と考えたらよろしいと。一人前なんだね。そして物質的には人間の世界より恵まれている世界だから、その三年間はほんとにね、少しだけ――精神的なものなんだけども――苦しみがあったけれども、それによって力を付けたと。そして阿修羅の世界での二十五歳、ティローパ大師が二十二歳のときだね、宗教的ともいえる、政治的ともいえるね、戦いにわたしたちは巻き込まれていったんだ。

ということは、わたしのその一生で、既に出てきているのはマンジュシュリー大師、ティローパ大師、わたし、ケイマ大師ということになると。じゃあ、一体わたしはケイマ大師にどのような傷を付けたんだろうかと。

これはね、君たち覚えておかなきゃならないけども、人と人との縁というものは水の中に浮いている――そうだね、ちょうど水の比重と同じぐらいの玉みたいなもんなんだよ。で、それが浮いてきたときに、その縁は結果を生じさせると。

だから、例えばケイマ大師とわたしとの縁というものは一生前の縁ではないわ

けだね。それから数生前に縁があって、そのときは恋人同志だったわけだけど、わたしは大変彼女に対して残忍なことを行なってね、それで傷付けたと。そして、そのカルマがわたしが阿修羅王になる生のときに返ってきたというわけだ。

◉感情を乗り越えること——それは因果の渦からの脱却

ということは、例えば憎しみ、あるいは愛情というものは、どうだ君たち、相対的なものだと思うか、それとも絶対的なものだと思うか。ということはこの相対的なものに愛着をすること、これはわたしたちに利益をもたらすだろうか、不利益をもたらすだろうか。わかるね、言ってることは。

そして、このわたしたちの愛着、あるいは憎悪、嫌悪、あるいは悲しみ、このような感情を乗り越えていくこと、これが最も素晴らしい魂の成熟であると。なぜならば、もしわたしたちがそのような条件というものを一つずつクリアしてい

くならば――そのようなという意味は、わたしたちの心に浮いてくるいろんな感情というものを一つずつ越えていくことができるならば――あとはただ単にこの現象の世界において因と果が生じると。過去においてこうなったから今こうなっていると。過去にこのようにして因を生じさしたから、今このように結果が生じているんだということ、それだけを見つめればいいんだよね。わかるかな、言ってることは。

ところが、もしそれに感情というものが絡んでくるとどうなるだろうかと。ね、それに感情というものが絡んでくると、因があって結果が生じると。ところがその結果に対してまた次の心の働きが生じるから次の因を生むよね。そうすると次の因というのはまた次の結果を生じ、心が働き、また次の因を作ると。そしてわたしたちは止めどもない因果の渦に巻き込まれてしまうんだ。これはちょうど大海に大きな渦巻きがあって、それに巻き込まれている孤船みたいなものなんだね。コセンってわかるよね、一人乗りの船ということだ。

◉カルマに支配され六道輪廻

では、何ゆえに地獄に生まれ変わるのだろうかと。では、何ゆえに餓鬼の世界に生まれ変わるんだろうかと。では、何ゆえに動物の世界に生まれ変わるんだろうかと。では、何ゆえに人間の世界に生まれ変わるんだと。何ゆえにわたしたちは阿修羅の世界に生まれ変わるんだろうかと。そして、何ゆえにわしたちは天界に生まれ変わるのだろうかと。あるいは、何ゆえにわたしたちは、この六つの世界を超越しアストラル世界へ生まれ変わることができるんだろうかと。あるいは、何ゆえにわたしたちはコーザルの世界、あるいはマハー・ニルヴァーナへと至ることができるのだろうかと。

因、果というものはすべて、どうだ？　これはデータであると。これは宇宙神素に刻まれている歴史みたいなものなんだね。わかるよね、言ってることは。あるいは個人的な歴史ボックスがあって、その中のデータの量で決まるといっても

いいだろうと。
そしてそのデータのどの情報を選ぶか、それは君たちなんだ。もちろんデータがなければ、そのデータのどの情報を選ぶかというのはね、君たちに決定権はないわけだけども、もしデータがあるならば君たちは自分たちで人生を選択することができると。
ではそれについてはどうして証明できるんだと。
まずここに一人の男性がいたと。そして普通の生活をしていると、ね。彼は会社に勤めていると。その会社に四人の女の子がいたと。それをA子さんからD子さんとしようと。そして彼は適齢期であると。結婚をしたいと考えた。そしてそのとき四人の女性を見つめたと。見渡したと。
で、この四人の女性の中のA子さんを選ぶ、B子さんを選ぶ、C子さんを選ぶ、D子さんを選ぶ、これはどうだ。一見、意志が働いているように見えるよね。わかるかな、言ってることは。そしてその四人の女性の中で例えばB子さんとC子

さんに絞ったと。ところがB子さんはあまり結婚をしたいと考えていなかったと。C子さんは結婚をしたいと考えていたと。ね。そしたら彼はC子さんと結婚する可能性が高くなるよね、どうだ。

はい、ここで出てくる問題だ。まず、なぜ彼はこの会社に勤めたんだろうかと。それはカルマとしかいいようがないよね、どうだ。そして四人の女性と巡り合ったと。そして彼はその四人の女性の中の、意志としてB子さんとC子さんを選んだと、どうだ。そして、C子さんと結婚をしたと。例えばそれで幸福になった不幸になったは別にして、要するに結婚という形までは意志が一見働いているようで本質はカルマだよね。つまり彼の持っているデータによって彼は結婚の選定をしたことになる、どうだ。

では、こういう例はどうだ。同じA君がA子さん、B子さん、C子さん、D子さんと巡り合ったと。しかし、彼はその四人とも好きだったんだけども、四人とも彼を嫌ったと。そうすると彼は、そこに意志があったに関わらず、その四人と

結婚はできないよね。ということは、意志と、それからカルマというのはどちらが優勢になるかな？　カルマの方が優勢になる。

そしてわたしたちは、そのカルマに支配をされながら六道を輪廻するんだよ。それから徳が生じて、大きな徳があればわたしたちは六道を選択することができるんだよ。今の意味わかったかな？

あるいはA君は、もっと徳のない人で一切女性と巡り合うことができないカルマを持っていたと、ね。じゃあ、A君は女性というものの情報はあったにかかわらず結婚できないとするならば、それは意志の働きようがないよね。これはちょうどわたしたちが天界の情報を知っていて天界へ行けないのと同じ。ということは一番優勢な情報――情報というかな――一番優勢な条件、縁というものは何かというと、カルマということになるよね。わかるかな、言ってることは。ここを理解しなければならないと。

ね、そして、ここを理解できた者は何を考えればいいだろうかと。では一体何



ゆえに地獄に落ちるんだと。何ゆえに餓鬼に落ちるんだと。何ゆえに動物に落ちるんだと。何ゆえに人間に落ちるんだと。何ゆえに阿修羅に至るんだと。何ゆえに天界へ生まれることができるんだと。

◉イメージ世界のキャパシティー

わたしの経験では、この人間の世界の何倍も何十倍も阿修羅の世界の方が楽しい。これは事実だ。そしてわたしの経験では何倍も何十倍もとう利天の方が楽しい。これも事実だ。わたしの経験では、それから何千倍も何百万倍も兜率天(とそつてん)の経験は楽しいと。もちろん、ね、他化自在天の生はもっと楽しいと。それは筆舌に尽くし難い享楽の世界であると。

では、なぜそう言い切れるんだと。例えばここにね、お金で人生というものが楽しむことができるとしようね。どうだ、これは。この条件は、まず。そうする

と例えば、ある人は一万円持っていたと。一万円ではどの程度楽しめるか。だれか答えてごらん。今のお金で一万円で楽しめる量ってのはどの程度だ？　まず一カ月はそれで生きなきゃならないとするよ。その一カ月間でどの程度楽しめるか、一万円で。どうだ？　じゃあ、一分間だけ周りの人と話し合いなさい。そして、これこそはという、その話を聞きたい。

マンジュシュリー、時間計っといてくれ、ね。

はい、だれかいるかな、一万円でこれだけも楽しめますという、これだけ素晴らしい楽しみができるというのは？　沈黙だね、だれも。まず、生活は外だね、まず。そうだね。どこかの軒下を借りるか、そして、なぜかというと食費が必要だからね。三百三十三円、一日使えるよね、三十日として。一円は余るけども。そうすると、三百三十三円ということは今の物価だとどうかな、よく暗性食を食べてるブフー（当時使われていたステージを表わす言葉の一つ）はわかるだろ。どうだ？　パン一個いくらだ？　百円。あと牛乳は？　じゃあ、六十円と、百六十

円、それ二回食ったら終わりじゃないか。三百二十円、あと十円おつりがくるな、十三円か。これが、一万円で楽しめるカルマなんだよ。じゃあ、十万円だったらどうなる？　はい、じゃあ、三十秒話し合おうか。これは、結構楽しめるぞ。

はい、終わり。どうだ。まず、アパート代は、いくらだ？　一万五千円、二万円ぐらい？　三万円。いや、それは風呂付きじゃ生活しないよね、飯代が少ないから。やっぱり、三万で銭湯だろうね、やっぱりね。銭湯に行くと。そして、まあ、四万円ぐらい使ったとして、あと残り一日二千円と。二千円の食事って、どれぐらいのものが食べられるか？　普通の定食を何回食べられる？　三回か。じゃあ、一日三回定食を食べたら、もうアップアップと。でも、人並みの生活はできるよね、一応。どうだ。

じゃあ、次に百万円の生活はどうだ、月に。

ちょっと、待てよ。ところが君たちはたかだか百万円の生活で「わーっ」と言ってるよね。これはまだ人間界で実際ある話だよね、百万円といったら。一日三万

三千円、たかだか。ね。じゃあ、データバンクのマンジュシュリー大師に聞いてみようか、一体どれぐらい楽しめるかというのを。今のは単に、寝ることと食べることだよね。次に出てくるのは当然、マンジュシュリー？　性欲が出てくるよね。そうすると、どうなる。

（マンジュシュリー大師）詳しいデータ知らないです。

（尊師）そうか。

（マンジュシュリー大師）ええ。

（尊師）じゃあ、ミラレパ。ミラレパは来てないのかな。ミラレパ、だいたい月百万でどれくらいの楽しみができるか？　お前結構ぜいたくな生活したことあるから、わかるだろ。うん。まず、中華のフルコースが食べられるよな、毎日。これいくらぐらいだ？　六千円。あと、アパートも高級マンションに住めるよな、一応。あとは、いい車に乗って、うん。

わたしが、なぜね、こういう話をしたかと。そうすると君たちのもう、思索の

範囲というのは百万円で終わりなんだよ。つまり、人間の世界から、阿修羅あるいは神々の世界は想像つかないんだ。わかるかな、言ってることは。そして、逆の言い方をするよ。想像がつかないということは、その世界の経験が少ないということだ。例えばわたしに想像しろといったら、ね、例えば十億でも百億でも遊んでみせる。それはなぜかというと、経験があるからだね。

例えばだよ、ね、一台の飛行機を買ったとしようじゃないか。いくらかかると思うか? マンジュシュリー大師。どうだ。まあ、ジェット機だろうね、やっぱしね。それで、十億かかるよな、それで。維持費は? 例えばマンジュシュリーに同じ質問をしてもね、十億、百億ぐらいまでだったら、たぶん使うと思うね、彼はね。それはなぜかというと、経験があるからだ。その経験があるというのはデータとして経験が残っているというよりも、壁一枚二枚通してだけども、何となく、経験しているんだね。当然、神々の経験を持っている者は、もっと使おうと思えば使えると。決してこれはいいことじゃないよ、わかるね、言ってること

は。徳を消耗するわけだから。しかし、イメージの世界においてそれぐらいのキャパシティーがあった方がいいってことだな。

◉嫌悪が生み出す世界——地獄

そしてわたしたちが地獄に落ちるときのプロセスに入るよ、今からね。

まず、背景にあるのは嫌悪であると。これはわかっているよね。じゃあ、それはどういう嫌悪だろうかと。どうだ？　どういう嫌悪だ。一つずつ自己の気に入らないものを落としていく嫌悪であると。わかるね。そうすると、最後は何が残るんだ？　最後は自分しか残らない。わかるか？　ということは、これは孤立という状態なんだよね。そして、嫌悪というのは、これは燃えているか、燃えていないか？　心は？　ということは、当然、心の働きによって世界は生じていくわけだから、炎熱の世界ということがいえるよね。わかるね、言ってることは。しかも

それは、創造的なものであるか、破壊的なものであるかと? そうすると破壊的な炎熱の世界ということになる。

ところが、阿修羅は、いいかな、闘争、しかしそれは自己を高めるための闘争本能なんだよ。わかるかな。ということは、同じ燃えてはいるんだけども、いろんなものがつくり上げていける世界であると。よって、阿修羅と地獄は違うんだよ。いいかな、今の理解できたか?

じゃあ、同じ地獄にはもう一つクールな世界があると。冷たい世界があると。いいか。この冷たい世界は、すべてを嫌悪し、それに対して心は動かさないと。ね、そうすると、現象としては何が起きる? 孤立し、寒い世界が登場するよね。凍り付くような寒さの世界が登場するよね。いいかな。しかもその煩悩というのは、その背景にあるものというのは嫌悪という煩悩だから、当然この欲六界の世界でなければならないと。いいかな。

ところがこの小乗の修行者が同じようにすべてからものを離れて見ようとする

と。小乗というのは、ヒナヤーナのことね。そして彼は煩悩を滅却しているから、滅却しているからどうなる? 静止した状態、クールな状態が生じるよね。どうだ。わかるか。そうするとこれは、涅槃だよね。わかるかな、言ってることは。君たちが今日聴いていることは、いいか、仏教観の中で、あるいは真理の中で最も大切なものだから、叩き込んでおかなきゃだめだぞ。

◉満足できない餓鬼

じゃあ、次にだ。物を得ても得ても、食べても食べても空腹が続くと、ね、これはWみたいな状態だけど、なあ、W。で、これはすべてのものが最終的には食い物に見えてくると。そして何でもかんでも食らい付くと。そして満腹、満足しないと。そうすると、その世界の延長上には何があるかな、一体。例えば、これはWが証明しているとおり餓鬼の世界があるんだ、ね。これはWだけじゃないよ、

W、今修行をして進んでいるからWのカルマを落としているだけ。わかるな。新人はもっとその話を聴いて反省しなければならない。これでWは成就するよ、心が動かなければの話だけどね。もし心が動いたら、先程と同じように因となって、また次の縁が、結果が生じてくると。わかるね、言ってることは。

◉目先の喜び——動物界

じゃあ、次にだ。もしわたしたちが、下劣な楽しみだけを追求したら、ね、そして自己の欲望のために相手を平気で殺すような世界へと転生したら、どこへ行くだろうかと、どうだ。動物の本性は生きるために食べる。あとは性欲を満足するためにセックスをし、そして子を作り……、でしょ。他に何かやってるかな。例えば真理の実践をするとか、例えばビラ配りをするとか、『マハーヤーナ』を読むとか。どうだ。しないよね。

よって、動物に生まれ変わる条件というのは目先の楽しみ、目先の喜びを求めると。いいかな、これは。例えばここに玉があって、それを思いっきり振ったと。ああ、二百ヤード飛んだ、三百ヤード飛んだ、ああ、穴に入ったと。これはどうだ。これと同じように例えば、目先に毛糸の玉があって、それを一生懸命もて遊んで喜んでいると、どうだ、どこが違うか。あとはデータだよね。

例えば、そのゴルフのクラブを振り回している人が、一カ月に四回だとしよう。残り例えば十日間ぐらいは一生懸命真理の実践をしたと。そうするとこの人は当然、楽しみと真理のある世界に生まれ変わる条件が備わるよね。どうだ。ところが毛糸玉を一生懸命遊んで、あとは寝て鳴いている猫はその条件はないよね。

ただしね、ここはポイントだよ。これは先程も言ったとおり、カルマというのは今出ている表面的なものだけじゃないから、潜在的なデータがあるからね、わかるよね、言ってることは。だからいつどのデータが出てくるかというのは、よっぽどカルマを見極める人がいない限りわからないんだよ。いいかな。よって、猫

が永遠に三悪趣に生まれ変わるわけではないよね、わかるよね、言ってることは、それは。

◉愛されたい——人間

そして人と人と、人に愛されたいと、あるいは魂に愛されたいと、人によってリラックスしたいと思う人、この人はどこの世界に生まれ変わるかな。これが人間の本性だ。ね。そして今見てきた地獄・餓鬼・動物・人間の寿命というものは、動物と人間というのは一番短いといわれていると。

マンジュシュリー、動物の中で最も長い生命体はどのくらい生きるんだ。今知られてるだけで。だいたいでいいけどね。分離するものは除いてだね。せいぜいが数百年じゃないか。だよね。そうするとこの動物と人間というちょうど中間に属する世界のだいたい最大というのはわかるよね。今の条件でだよ。だいたい百

年から、二百年が最長であると。ＯＫだよね。人間だって百五十、百六十と生きた記録があるからね。最高はどれくらいなんだ。二百生きた記録はないのか？あ、ソビエトの方でもっと長いのがあったっていう記憶があるんだけど。サバ読んでるか。そうなんだ。じゃあ、まあ、せいぜいが二百年だとしようね。たかだかこれだけしか生きられないわけだ、ね。

ところがこれは、生きる年数というのは中間が一番短いんだよ。なぜだかわかるか、これは。不安定な状態なんだね。なぜ不安定なんだというと、カルマが中間状態なんだよ。中間状態というのは要するにプラスでもない、マイナスでもない状態と。ね、ところが餓鬼・地獄というのは完全なデータの偏向があるんだね。だから安定なんだよ。ということは安定なものと不安定なものでは寿命はどうだ。安定なものの方が当然長いよね。これが、だから地獄・餓鬼・阿修羅・天界が長いといわれているゆえんなんだ。

◉創造的闘争本能――阿修羅

そして第五位の阿修羅というのは、相手の実力は実力として認めているけれど、それに闘争的な本能で挑んでいくと。ただしその闘争的な本能は先程も言ったとおり創造的闘争本能といっていいだろう。否定的闘争の本能が地獄であると。わかるね、言ってることは。それを越すために自己は向上すると。ね。これが阿修羅の本性であると。

◉満足のデーヴァ

そして最終的なデーヴァは、完全に徳優位の状態で満足し切っていると。その人の持っているイメージそのものが現象化してる世界だと考えましょう。いいかな。そうすると当然、デーヴァの世界が最高の世界であるといえると。ほんとにいえるかといったら、どうだ。わたしは近ごろね、デーヴァより阿修羅の方が偉

いんじゃないかと思ってるよ。理由はわかるか。そうだ、向上心、努力だね。つまり忍辱、精進といったプロセスは阿修羅のプロセスに近いからだ。もちろん、そのデーヴァの状態で、例えばね、わたしたちの偉大なるシヴァ神みたいに、完全にすべての徳を備えてらっしゃって、それから離れて救済を意識してらっしゃる方というのはもうデーヴァとはいえないよね。まあ、それについては四月の二十日以降に発売される『滅亡から虚空へ』に詳しく書いてあるから、よく読むようにしなさい。ねえ、シッシャに宣伝してもしょうがないんだけども。ね。

このような形で欲六界は形成されるんだ。ということはわたしたちはその要素を一つずつつぶしていけばどうなる？　解脱していくよね。それからもう一つ、わたしたちがその要素をつぶすだけでなく超えていったらどうなるか。これぞ大乗の修行でしょ。わかるね、言ってることは。だから君たちは今日わたしの話したことをよく理解して、そして、実践しなさい。いいね。はい、では今日は講話はこれで終わりにしましょう。

第三話
カルマを超えて真理の世界へ
（八九年三月二十八日　於・富士山総本部）

◉地獄へ導く三つの条件

新しいシッシャも増え、サティアン、あるいは道場の空間が、大変に濁り切った状態になってきているみたいだから、ここでね、一つ君たちに、君たちが聞いて得になる話を二つ、三つ、四つとね、今日は少し話をしたいと考えています。まず、『阿含経（あごんきょう）』の中に地獄に対する描写があると。これはみんな知ってますか。この『阿含経』の描写の中で、例えば三つの使いとかね、あるいは金持ちが地獄に至った話とかいろいろあるわけだけども、この中でね、まず君たちが聞い

て、即、理解できるような話をね、したいと考えます。
　ここに、極悪非道の者があり、その人は真理、これを否定し、そして、例えば修行者を罵り、そして口には悪口をなし、多くの生き物を殺し、そして盗みも、人のいないところの盗みだけではなくて、暴力を使っての盗みをなし、多くの快楽を貪り、そして心には良からぬことを絶えず思い、死んでいったと。もちろん、この死んだ魂というものは、当然地獄に落ちるわけだから、まず第三天界の夜摩天で裁きを受け、そして、カルマによって地獄へと転生すると。地獄に対する落ち方というのは、三つあると。
　第一の地獄に対する落ち方は、エネルギーによって落ちる。これは、煙、黒い煙が射し込んできて、それに愛着している者。だから、カラーとしては黒い色が好きな人、この人は地獄に落ちる確率が高いと経典でいわれている。
　第二の条件というのは、ヴィジョンである。それは、例えば嫌悪の想念の強い人ね、エゴがものすごく強い人というのは、その嫌悪によって相対する世界、反

対側の世界、例えば暑さに対して嫌悪するならば寒さの世界、寒さに対して嫌悪するならば暑さの世界、あるいは単に多くの者に、例えば快楽の一部である異性に対して愛執が強ければ、その世界へと落ち込み、その世界の地獄が待っている。

そして、第三の地獄に至る道、これは裁きである。このとき登場するのが、仏教の言葉を使えば閻魔天（えんまてん）、ヨーガの言葉を使えば夜摩天である。そして、今日のこの話は夜摩天の話であると。

死後、中間状態に入ったその魂は、夜摩天の裁きを受けなければならない。そこで、夜摩天がこのように問うたと。『阿含経』では三つの御使いというふうになってるわけだけども、わたしはそれを四つの御使いと置き換えてここで話をすることにしよう。

◉夜摩天の遣わす四人の御使い

夜摩天はその地獄へ至る魂に対して、次のことを問うた。
「お前は、わたしの遣わした第一の御使いを見なかったか。」
と。はい、君たち、君たちは第一の御使いを見ましたか。この人間の世界において。どうだ。ねえ、これは君たちが裁きを受けるとき、もし、わたしに帰依できていなかったら、――わたしに帰依ができていたら、わたしがそばにいて君たちの弁護に立つかもしれない。しかし、帰依ができていなかったら、君たちが自分で答えなければならないことだから、よく聞かなければならない。ねえ、そして理解しなければならない。
「お前は第一の御使いを見たか。」
と。どうだこれは。沈黙をしているということは、見ていないということになるよね。どうだ。本当に見ていないかと。

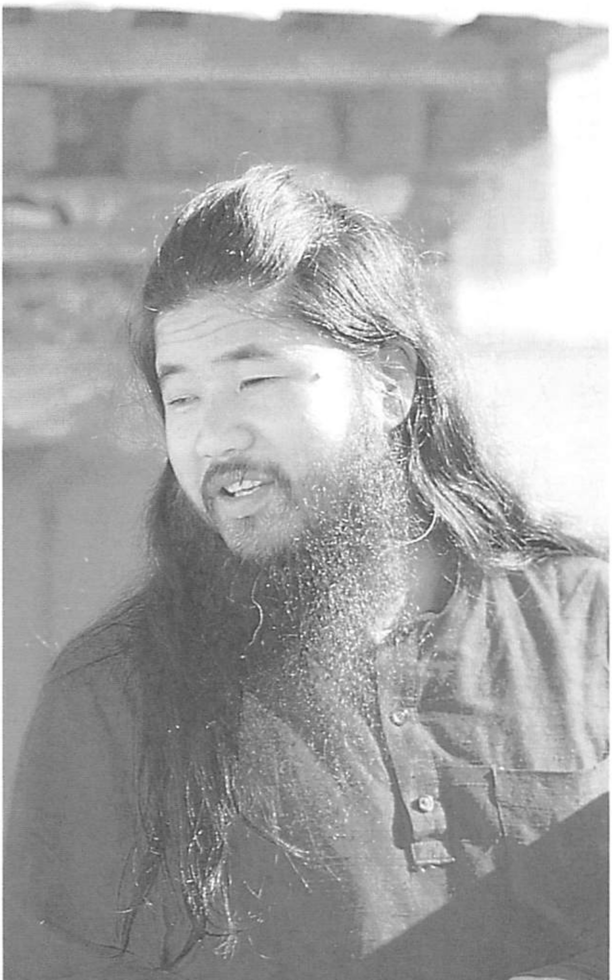
君たちは、人が年を取り、そして体にはしわができ、ね、体には斑点ができ、腰が曲がり、頭がはげ上がっていくと。このような状態を見たことはないか。どうだ。これが、第一の御使いであると。

そして、智慧(ちえ)ある者はここで気付かなければならない。この人間の世界というものは、変化するものなんだと。そして、徳のあるとき、エネルギーの強いときには、それに対して興味を示さないけども、いずれ自分はそのような形になるんだということに気付かなければならないんだと。もし、気付くならば、いずれわたしはこの肉体が滅び、そして死んでいくんだから、ここで善きことを行ない、正しいことを行ない、きちんとした生き方をしようと考える。どうだ、これは。

ところが、もしそれに対して、わたしたちが興味を持つことができなければどうなるかな。年を取った人は年を取った人であると、わたしはわたしであると考えるだろ。どうだ。これが第一の御使いであると。

じゃ、わかるね、第二の御使いは何だ。はい、そこで、閻魔大王は、ねえ、夜

第四章　かけがえのない宝石——尊師説法集



摩天はこうその魂に叱咤したと。
「お前が、もし、この老いというものを知っていたならば、老いは当然死につながるわけだし、善行をなしたはずである。わたしの遣わした、お前は第一の御使いのサインを読み取れなかった。そして、お前はたくさんの悪業を積んだ。お前はこれから拷問にあわなければならない。」
と。
じゃ、なぜこれが第一の御使いなんだと。ここは経典に載っていないところだけども、どうだ、色と空とは同一であると。これはいいね、まず。そして、いいかな、この人間界は六道を映し出している。これはどうだ。だとするならば、当然この人間界の苦しみをもっともっと大きく投影した世界があってもおかしくないな、どうだ。例えば君たちはおなかを空かすと。そうすると、例えばアフリカでは食べられないで餓死していく人たちもいるわけだよね。どうだ。これは君たちの空腹の投影じゃないか、どうだ。空腹という苦悩を増大した状態じゃないか、

どうだ。よって、これが御使いなんだよ。

つまり、言い方を換えるならば、老いというのはわたしたちに対する愛なんだね。いいですか。わからないだろ。わかるか。沈黙だね。つまりどういうことかというと、わたしたちは老いるよね。老いるという恐怖があるからこそ、善業が積めるよね、言い方を換えれば。どうだ。もし、老いなければどうだ。悪いことやったって、善いことやったって全然変わらなければ、どうだ。わたしたちは自分のエゴを満足させるために、煩悩のために悪いことだけをするんじゃないか、どうだ。これがまず、第一のね、御使いであると。

では、

「お前は、わたしの第二の御使いを見たか。」

と。はい、これは何だ、第二の御使いというのは。病、あるいは死だね。わたしたちは病にかかると、それまでは元気ハツラツだったのが落胆するよね、まず。意気消沈するよね。しないか。そして、今までの生の喜びが一転して、このわた

したちを楽しませてくれた肉体のために、わたしたちは苦しまなければならない。どうだ。つまり、このわたしたちの肉体そのものは無常であるということがわかるわけだよね、どうだ。それに気付いていれば、わたしたちは善行をなし、智慧を磨き、そして高い世界へ生まれ変わろうとするだろう。どうだ。

ところが、もし、無智であるならば、それに気付かず、一時しのぎの、例えば薬を飲み、注射を打ち、あるいは念力その他によって病を治してしまうと。そうすることによって、わたしたちは、第二番目の御使いの意味合いというものを見失うことになるよね。どうだ。つまり、無常であればあるほどわたしたちは苦を味わうわけだよね。そうでしょ。その苦から脱却したいと考える。どうだ。ところが、苦のない世界にもしわたしたちが生まれていたらどうなる。わたしたちは煩悩を満足させ、悪いことを行ない、落下してしまうと。

そこで、夜摩天はその魂に対して、

「お前は善行を積まず、智慧を磨かず、悪行をなし、心には善からぬ思いをいつ

も生じさせていた。」

と。これは、今のオウムのシッシャみたいだね。

「よって、お前は大いなる裁きを受けなければならない。」

と。

　はい、次。そして、第三の御使いの話が出てくるわけだね。第三の御使いは、当然死だ。これはわかるね。

「お前はわたしの第三の御使い、これを見たか。」

と。当然、愚者だから、――君たちは智慧の修行をしているからわかるだろうけどもね、ある程度。一つ聞けば、あとの二つは当然出てくるよね。ところが、その愚者は、

「見てません。」

と。

「お前は死人を見たことがないのか。」

と、あるいは、
「人が死んだという話を聞いたことがないのか。」
と。
この人間の世界で生きていて、人の死というものを知らないでこの世から去るということは、まあ生まれて五歳とか、あるいは十歳くらいまではあるかもしれないけど、ほとんどの場合は、それ以上の場合、不可能に近いよね。どうだ。
そして、この死というものは、わたしたちの欲望に対するストッパーの役割を演じるよね、当然。どうだ。なぜならば、無常だから。死の世界があるにしろないにしろ、そこでトランスフォームされると。いったん変形が起きるよね、どうだ。そして、愚者であるその魂は、足、手、それから胸の中心という五つを突き刺されたという話だね。それから、体を縛られて、ものすごい炎熱の中を走り回らされて、そして最後にはね、鉄の家というのがあって、その鉄の家の床は煮えたぎって、というよりも、ものすごく燃えていてね、そこをとめどなく歩かなけ

ればならないと。行けども行けども歩かなければならないと。

しかも、ここがポイントです。今日、わたしがなぜこの話をしたかというとね、いいですか、わたしの言っていることと、この閻魔天、夜摩天の言っていること、仏陀釈迦牟尼（ぶっだしゃかむに）の言ってることが同じだからなんだ。地獄の世界においては、その地獄のカルマが落ちるまで、わたしたちは死ぬことができないんだよ。傷付いたとしても、死ぬことができないんだ。どうだ、これは。

はい、そしてもう一つ。わたしは、第四の御使いがあると考えていると。それは、何だと思うか。現代の感覚と昔の感覚の違いだから、実際には病のカテゴリーにね、病というものの中に入れることはできるわけだけども、「苦痛」だね、これは。肉体的苦痛。例えば、針を刺せば痛いと。しかし、傷はないと、例えば。残らないと。例えば電気ショックを受ければつらいと。しかし、傷も残らなければ、現象としては何一つ変わらないと。どうだ。

だから、わたしたちの中には第四の御使いが存在してるんだよ。そしてその第

四の御使いこそが、地獄の原型だと考えていいんじゃないかなと。ねえ、わかるかな、言ってることは。

例えば、わたしたちが死なない程度に苦痛をずっと味わい続けると。これは当然、可能性としてあるわけでしょ。どうだ。例えば一日針を百本、千本と刺していけば、そのとき当然苦痛はあるわけだよね。どうだ。しかし、わたしたちは死なないよね。どうだ。苦痛だけがあって死なないよね。どうだ。苦痛だけがあって死なないよね。その延長上に、地獄はあると考えた方がいいと。ね。

◉カルマからの脱却

そして、この夜摩天はこう考えたと。「わたしは今、夜摩天界の王である。そして、多くの魂を裁いている。しかし、わたしは、わたしですら輪廻転生するんだ」と。ね。「わたしはこういう拷問を受けたくない。だから、もし仏がおられ、

そして真理があり、その真理の実践できる場があったならば、ぜひともそのカルマから脱却したいものだ。そして、そのカルマから脱却できることこそ最高の、素晴らしいカルマであり、生き方だ」と。わかるかな、言ってることは、わたしが。

そして、ここにいる君たちは出家をし、ある程度の悪業をなし、もちろんある程度の善業をなし、その善業によって出家をし、今修行をしている。そして、君たちが到達できる世界は、小乗の三つ、ニルヴァーナ、大乗のマハーヤーナ、そして大乗の最高点であるマハー・ニルヴァーナに、君たちは到達することができるんだ。その世界には当然、地獄も餓鬼も動物も人間も阿修羅も天界もない。絶対的な平安、安らぎの世界であると。今、君たちはその世界に到達のできる希有のチャンスに恵まれている。

しかし、君たちが比較しているもの、その世界と比較しているものは、あまりにも小さすぎるんじゃないか。どうだ、これは。『阿含経』においても、仏陀釈

迦牟尼の経験としてその世界が存在していると。わたしにおいても、この現象界でわたしはそれを経験し、そして、瞑想の中でもね、下ろし金地獄というものを経験している。ということは、当然、その世界はあるんだということだ。そして、それはわたしの説いている法と、仏陀釈迦牟尼の法のカルマの理法が全く同一であると。そのカルマが切れるまでは、そこから脱出することはできないんだということだね。それをよく考えて、君たちは選択をしなければならない。

◉慢は尽きることなく——過去世の失敗

次に、煩悩について少し述べよう。わたしが人間界の王であったころ、人の寿命というものは、数万年、あるいは長生きをする人は数十万年の寿命を得ていた。これは、わたしが聖転輪王（せいてんりんおう）、まあ聖転輪王（しょうてんりんおう）という読み方をしているみたいだけども、実際には聖（せい）転輪王だっ

たころの話だ。

わたしは素晴らしい部下に恵まれ、そして、わたしの民は善行をなし、その心は反映し、殺生、偸盗、邪淫といった、こういうものが一切行なわれない世の中であったと。わたしには、妻が三百人、そして八百人の恋人がいたと。ねえ、今のシッシャ諸君から見たらうらやましい立場だね、すごく。どうだ。そして、わたしには三千人の息子と、それから二千人の娘がいた。その三千人の息子は大変優秀で、その子たちが国を守っているから、もちろんどこも攻め込んでこなかった。

そして、数万年の統治の後、わたしは東にね、なかなか素晴らしい王国があることを聞いた。しかし、まだそこは真理というものからは程遠い国であったと。わたしは、そこへ一部のわたしの部下たちを引き連れて征服に行った。ところが、そこの民はわたしの名声というものを聞いていて、戦うことなく、わたしはその国の王として君臨することができた。そして、その国の民も喜び、ね、わたしに

対して絶大なる敬愛の念を持ち、素晴らしい真理の国ができた。

しかし、わたしの慢だね、要するに。統治する、真理を広めなければならないんだという慢は、尽きるところなく、次は、南の国へ行ったわけだ。そして、そこでも同じように戦うことなく、わたしは王として君臨することができた。そして、北の国では、もっとね、わたしが初めに治めていた西の国より、もっともっと素晴らしい条件の民が存在していたわけだけども、そこでもわたしは王として君臨し、統治することができた。

そして、わたしは次には天上の民、とう利天の民を支配しようと考え出した。というのは、とう利天というのは功徳は優れている、智慧も優れているけど、まだ真理に到達しているわけではない。そしてわたしはとう利天へ上り、そこで、とう利天の王インドラと会った。ところが、インドラは素晴らしい神だから、わたしの徳を認め、一緒に統治しましょうとおっしゃってくださった。そして、わたしはインドラと一緒にとう利天で統治をした。

ところがだ、いまだ完全なる真理に到達していなかったわたしの心の中に、慢、それから征服する欲求というものがあったわけだね。そして、わたしはそのとう利天を亡き者にして、わたし一人でそのとう利天を支配しようと考えたわけだ。そして、実行に移そうとした瞬間、わたしは地上界に叩き付けられた。

なぜだかわかるか、君たちは。なぜだかわかりますか。今の話を聞いてわかるとおり、もともとわたしの前生の、わたしが聖転輪王として降りたときのこの生は、徳によってすべての人たちを統治したわけだね。どうだこれは。ということは、その心の背景には救済の心、そして、すべての人に対しての愛、これが当然存在していたわけだよね。どうだ。ところがわたしがとう利天に上り、そこで、ね、インドラになしたこととといったら非礼極まりないと。わかるか。つまりインドラの方が心が豊かだったわけだ。そして、わたしの中に殺意が生じたとき、わたしは天界の王としてのカルマが一挙に——どうなる?——一挙に切れたんだね。そして、地上界に叩き付けられたわけだ。

◉あるときは敵、あるときは味方――この輪廻

もう一つのね、わたしの前生を話そう。わたしがとう利天の王であったころ、つまり、インドラ神だったころだ。わたしは智慧の修行をしていた。そして、あるとき戦いが起きた。何に対する戦いかというと、それは天界に存在している、わたしたちを幸福にしてくれる、木の実がたくさんなっている如意樹を巡っての阿修羅との戦いであったと。

阿修羅は武力、あるいはエネルギーにおいてはね、天界を上回っているんだ。しかし、三十三天というのは智慧に優れているわけだね。そして、わたしはそのとき阿修羅王を捕らえたんだよ。そして、そのときの阿修羅王の息子が、今のわたしの弟子であるマイトレーヤ、それからパタンジャリなんだね。それから、阿修羅王の参謀、これは今のミラレパ大師なんだよ。

この話はね、シッシャの中に、少し伝わってるかもしれない。どうだこれは。

聞いたことがある人はいるんじゃないか。そして、阿修羅王に改心を求めたけども、阿修羅王は屈辱に耐えられなくてね、自殺をした。

そこでわたしは、今のマイトレーヤ大師、パタンジャリ、これを引き取ってこれを育てることになったわけだ、わたしの息子として。その縁によってね、今彼らがオウムで活躍してるわけだけど、これは、ミラレパ大師の見たヴィジョン、あるいは、そのころわたしの侍者であったラーフラ大師が見たヴィジョン、あるいはわたしの見たヴィジョン、これがね、同一であるということから、今日話をしたわけだね。二番目のわたしの前生に対してはね。

ということは、わたしたちは輪廻転生を繰り返しているということになるよね。どうだ。しかも大師の、二人の大師とわたしの見た対象が同一であると。

あるとき、わたしは阿修羅の王であった。そのときの参謀は、今のマンジュシュリー大師なんだよ。このときは、あまり戦いもなく、とう利天との闘争もなく、安穏とした生で終わってしまっている。つまり、あるときは、敵であったはずの

阿修羅の生としての前生をわたしは持っているわけだ。どうだ。だとすると、一体何を敵とし、何を味方とするか、すごく難しい問題になるよね、これは。

そして、エネルギーの引っかかりによって、特にわたしの場合は、エネルギーの引っかかりによって次の転生が決まるからね。例えばアナハタで引っかかるならば、人間界へ転生するだろうと。今、わたしがここで命を断ったとしたら、おそらく阿修羅の王として君臨することになるだろう。なぜならば、今わたしのエネルギーは、のどで引っかかっているからだ。これはシャクティーパットによって、マニプーラまでいったん落ちたエネルギーが、少しずつ少しずつ回復している証拠なんだけどね。もちろん意志の力によって、人間界に戻すと、あるいは天界へ生まれ変わることができないわけではない。しかし、ほっとけば間違いなくわたしは、次の生、阿修羅の王として生まれるだろう。

そして、わたしが今日君たちに話したかったことは、君たちがきちんとワークを行ない、瞑想修行を続けていけば、納得のできる、君たちの未来に対する答え

というものが出てくるんだよと。そして、それを今生で達成するしないというのは、今からの君たちの大きな魂の流れにとって、大きな意味合いがあるんだよということ。もちろん、今生で涅槃（ねはん）するということは、それはそれで素晴らしいだろうと。ね、そこですべては止まってしまうから。そして、ある程度の幸福・歓喜の状態に包まれるからね。

そうではなくて、例えば凡夫的な、君たちが思考をし、というのは、君たちがどの世界へ転生するかというのは、君たちの持っているデータ、つまりカルマによって決まるんだよ。だとすると、君たちがそのカルマを滅却しない限り、君たちは救済のされようがないわけだ。わかるかな、これは。

◉仏典に見られる宿命通

最後にもう一つ、『阿含経』から引用しよう。ある金持ちの長者がいた。その

長者は子供がなく、亡くなったんだよ。で、子供がなかったと。で、インドのしきたりによって、子供がない場合はその財産はすべて王のものになると。その当時の王はパセーナディ王であると。パセーナディ王はどうも納得できなかった。というのは、その長者はヴァッパ大師みたいにね、自分はお金を使わず、古着を着て、とにかく貧しい生活をしていたわけだよ。そして、こつこつこつこつとお金をため、大金を持っていたと、ね。ところが没収されたしまったと。

で、納得できなかったパセーナディ王は、仏陀釈迦牟尼のところに訪れたと。でね、

「仏よ、一体この長者は、どこへ次の転生なさったんだろうか。」

と。

「それは地獄ですよ。」

と。

「間違いなく地獄である。」

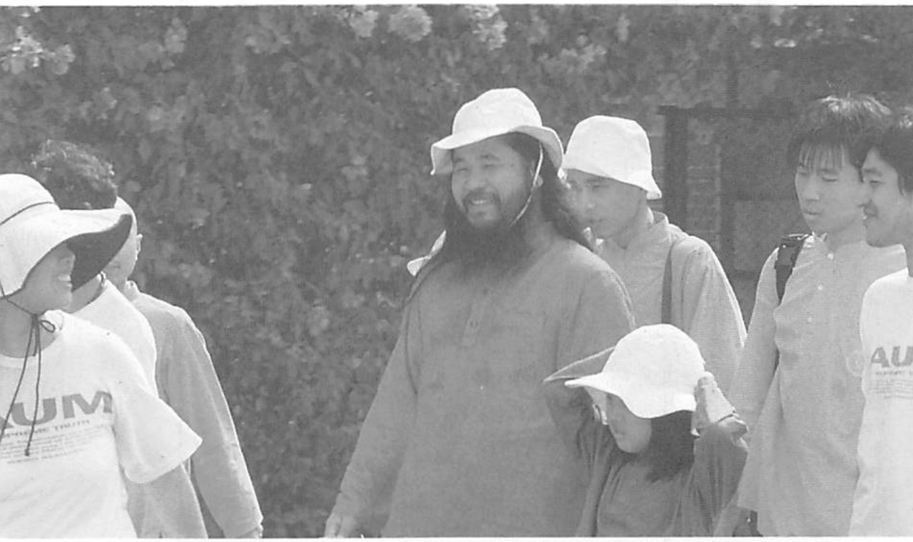
と。
「なぜでしょうか。」
と。
「彼は仏を供養せず、仏の法を信ぜず、そして仏の弟子を供養しなかったからである。」
と。
「ではなぜ、そういう供養しなかった人が今金持ちでいるんだ。」
と。

　そこで、お釈迦様は得意の神通力を発揮なさって――宿命通だね――彼の前生についてお話しなさったわけだ。実は、前生において、彼は農家の子供であったと。そして、そこへね、身清らかな、礼儀正しい修行者が来た。そして、その修行者に対して、彼は食物をふるまったわけだ。いいですか。よく聞きなさいよ。その食物をふるまわれた、身清らかで礼儀正しい修行者は、木の下でね、ただ供

養を受け、そして供養が終わった後、空中へ飛び去ってしまったんだ。それを見た農家のその息子は、「わたしのこの功徳によって、わたしは将来においてね、絶えずお金に恵まれた人生を送りますように」と念じたわけだ。そして、それによって、彼はその次の生から、いつも豊かな家庭の子供として生まれることができたと。

では、なぜ彼はお金を使わないで、使うことができなかったのかと、楽しむことができなかったのかという問いに対して、彼はそのときこう念じたそうだ。その後ね、「しまった」と。「修行者なんかに、供養するんだったら、召し使いに食わせてやれば良かった。惜しいことをしたな」と。「ああ、惜しかった、惜しかった」とね。それによって、彼は何をするにも、惜しいな、もったいないなという気持ちだけが先行して、結局お金を使うことができず、結局彼は、ね、彼のなした善業のすべてを使い果たして――はい、善業を使い果たしたらどこへ生まれ変わるか――地獄へ生まれ変わったわけだ。

第四章　かけがえのない宝石——尊師説法集



もちろん君たちはシッシャとして修行してるわけだし、功徳を積んでるわけだから、来世地獄ということは、よっぽどの悪業をなしてない限りないだろうと。しかし、いずれは落ちるよと。これがわたしが初めて君たちに明かした本生経、わたしの前生の話の一部です。

◉真理の世界へ

今までの説法と少し内容が違ったけども、理解できたかな。そして、君たちも輪廻転生を繰り返すんだよと。そして、輪廻転生において、この生というのは本当に短い生なんだよと、ね。そして、わたしたちの老死、あるいは苦しみというものはわたしたちに対する最高のサインなんだよと。そしてそのサインを読み取り、実践するなら、わたしたちは本当の意味での幸福・自由・歓喜の世界へいずれは導かれるんだよ。それはわたしの言ってることでもあるし、あるいは、仏陀

釈迦牟尼のおっしゃってらっしゃることでもあるとね。そしてわたし、あるいは仏陀釈迦牟尼がもし嘘をつくとするならば、それはわたしたちは、真理の体現者であるというふうにいってるわけだから、逆に大変な地獄へ落ちることになるだろうと、ね。いいですか。

だとするならば、修行者は何を考えなければならないか。今の君たちのステージで安定させることを考えるのか、それとも、先へ進むことを考えるのかと。どうだ。君たちの目の前にぶら下がっているえさ、これは性欲であったり、あるいは食欲であったりすると、ね。

これは、ちょうど『阿含経』に載っている、猫のたとえにたとえることができると。あるとき、おなかを空かした猫がここにいたと。いいですか。その猫は、「ああ、おなかが空いたなあ」と、今のキタロウ君みたいにニャンニャン鳴いてると。で、目の前をね、満足した丸々肥えたネズミが通り過ぎたと。ということは、この猫は雌だったんだろうね。雄はネズミを捕らないから。いいね。そして、

それをじっと追いかけていったら、そのネズミは巣に入ったと。巣のそばにはゴミ溜めがあったと。そこで、猫はね、一計を案じたと。「よし、ここで、待ってやろう」と。「必ずネズミが出てくるはずである」と。「たらふく食ってやるぞ」と、そのネズミをね。「あのネズミは丸々肥えているから、きっとわたしのおなかを満足させてくれるだろう」と。どうだ、これは。今の君たちの心じゃないか。「ああ、ご飯がたくさん食べたい。オウム食をたくさん食べたい」と。

そして、その臭いゴミ溜めの中で、じっと猫は待ち続けたと。猫は考えた。「おなかは空くし、臭いし、必ず食らってやるぞ。これだけの悪条件でいるわけだから」と。そうこうしているうちに、そのネズミの入り口からネズミは出てきたと。ネズミはちょうど消化し終わったくらいで、元気ハツラツのときであったと。猫は爪を出し、さっとネズミを押さえ、飲み込んだと。おなか空いてるから、生飲み込みであったと。生のまま飲み込んだと。さあ、ネズミは大変であると。胃の中に到達したネズミは——ねえ、当然ネズミにだって生命欲があるから、一

生懸命爪を立て、歯を使い、胃袋をかみ破ったと、ね。胃袋だけではないと。次の内臓をかみ破って出ようとしたと。

それによって、猫はどうなったと思うか、君たちは。死んでしまったと。そして、猫の死というものは、単なる生命の終わりであると。しかし、修行者が出家し、真理に到達できる前に煩悩によって死んだ場合はどうだろうね、君たち。それは、魂の死であるということができると、ね。

今日は少しね、怖い話をたくさん行なったけども、この真意をよく理解し、考え、修行する者は必ずやね、短い期間に真理の世界に到達することができるだろう。いいね。よく考えて修行しなさい。難しかったか、ちょっと。どうだ。沈黙をしてるね。はい、ではこれからね、帰依マントラ、その他に入っていきましょう。

第四話

戯忘のホモの世界

（「マハーヤーナ」NO33より）

通常どおりの供養法の瞑想、そして、ヴァジラヤーナの帰依の修行を終わらせた後、寝室に入り、ベッドの上でシャバアーサナをしていると、手足が末端から痺れ出し、体が固定される。

「抜けるな。」

と思った瞬間、わたしの変化身が虚空へと飛び立った。そして、蓮華座を組んだまま、上昇し続ける。辺り一面は、すがすがしい空間。今日は一体どういう世界へ飛ぶのか……。

壁をぶち破って到達した世界、そこは白銀の世界であった。わたしはそこへ降

り立ち、地を眺める。
「これは、雪景色に似ているなあ。きっと、雪の世界に違いない。」
しかし、その風景には、木が一本も生えていない。そして、点々と豪華な家が建っているだけであった。わたしは大地の雪らしきものを手に取ってみた。すると、それは雪ではなく、土なのである。つまり、白銀色の土の世界なのである。
「そうか。ここは、戯忘天だな。」
つまり、人間界、阿修羅界の上、欲六界の六つの世界の中では一番上の世界ということになる。ここで、わたしが戯忘天だと考えた理由は、まず、変化身で飛んだ後、降り立って、足が地に着いているということ、そして、大地が白銀であるということ、しかも、人間の世界から上昇していったということ、この三つの点がポイントとなっている。
「よし。ではいつものように、この世界を観察しよう。」
わたしの変化身は、通常どおりの行動に移った。少し歩いていくと、そこには

床屋があった。
「そうか。この戯忘の世界は欲界に属するから、この戯忘の世界に住んでいる人の髪の毛も当然伸びるんだな。」
そう考えながら、ドアのところに立つと、四十過ぎの男性が現われた。その男性の心を透視すると、性欲を持っている。やはり、この世界は戯忘の世界である。しかも、その男性は、男性の、特に肛門に対して性欲を持っているのである。
「ん? ここはひょっとすると……。徳のあるホモの人間の行く戯忘の世界ではないのだろうか?」
そう考えて、わたしは慌ててそこから離れた。そして、歩を進めると、十代前半の子供たちがたくさん遊んでいた。その子供たち一人一人の心を見ると、やはり同じようにすべて性欲を持ち、そして肛門に興味を持っているのである。しかも、よく見るとこの世界には女性が一人もいないのである。
「これは間違いない。ここは、徳があって天へ上がったホモセクシュアルの者が

形成している戯忘の世界に違いない。」

そして、わたしはそこでふと考えた。

「わたしがこの世界を今観察しているということは、きっとわたしの中にもホモセクシュアルの要素があるに違いない。よし。わたしはこの世界から抜け出すために、特殊な瞑想を行なおう。」

そこで、わたしは炎に包まれた鉄の塊を神通力をもって虚空から取り出し、それをわたしの肛門へと何度も突き刺した。ものすごい激痛！　それと同時に、その世界からわたしは抜け出した。

そして、わたしはわたしの部屋へ舞い戻り、肉体へと戻った。わたしは、肉体から覚め、そして考えた。

すべてはカルマである。そして、必ずその業というものは結果を出すんだ。これをみんなに知らせてやらなきゃならないな。そして、今、この世の中にはびこっているホモセクシュアルの人たちに、このことを教えてあげなきゃならないな、

と。

この人たちが、もし徳を積むならば、戯忘のホモの世界に行くことができる。徳を積まなければ、地獄の世界で苦しまなきゃならない。そして、もし、今ホモのカルマを断じる瞑想を行なうならば、この人たちはホモセクシュアルのカルマを切ることができる。したがって、もしカルマが切れない人は、徳を積んで戯忘のホモの世界に行けるように努力すべきであろう。もし、カルマが切れる人は、切ってブラフマンの世界へ転生できるようにすべきであろう。間違っても地獄に落ちることのないようにしてもらいたいものである。

第五話
苦しみからの脱却——大いなる徳を持て
（九〇年十二月二十三日　於・仙台支部）

◉確実に存在するカルマの法則

今日は、まず初めに、ちょっと難しい話から入りたいと思います。これは、今日、先程わかったことだから、あなた方が初めて、オウム真理教のわたしの信徒として聞く内容ということになる。

人間の苦しみというものは、この五つのskanda、つまり集まりに集積されている。五つの集まりとは何かというと、この肉体、感覚、イメージ、意志、意識という五つである。

そして、オウム真理教にはいろんな修行法がある。今日、わたしはヴァジラヤーナの帰依という、これは叩きながら、竹刀で叩きながら帰依マントラを唱えるという、まあ、特殊な方法だけども、これを行なった。これを一万発、まあだいたい一時間半ぐらいで一万発、自分の両足を力強く叩くわけだけどね、するとどうだろうかと。叩く前、いろんなナーディの詰まりがあって、そこに痛みが生じていたと。ところが叩いた後はそれがかゆみに変わったと。

なぜ、痛みがかゆみに変わったんだろうかと。それで、今日、わたしと一緒に同行している、皆さんもよく知っているヴァジラティッサ師、彼はドクターだけども、彼とそれについて話し合った。そうすると、痛みというのはかゆみというのと同じ神経で感じるんだということがわかった。つまりどういうことかというと、同じ神経で、その刺激回数が少なければかゆみとして感じ、多ければ痛みとして感じるんだと。これは、ちょっと複雑な変換、つまり積分を使って行なうわけだけども——という話であると。

ということは、叩いたことによって肉体のカルマが落ち、そして痛みからかゆみに変わったということを表わしているんだということである。ということは、仏教観でいうところのカルマの法則というものは、また一つ証明されたなと。ま、わたしはそれを知ったとき、わたしの心に光明が射し、そして絶対的な確信、これは何としてでも皆さんに、真理の法を根付かせ、そして正しい転生をさせなければならないという思いに至ったのである。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなに大金持ちでも、あるいはどんなに異性にもてる男性や女性であったとしても、あるいはいくら愛し合ってる夫婦であったとしても、あるいはどんなに高い地位へ昇ったとしても、人は必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。では、死に対して何が有効かというと、先程述べた真理を絶対的に確信することであると。

これが例えばね、わたしが叩くことによってかゆみが出るというふうに知っていたならば、あるいはそうなるべきであるという暗示があったならば、今日わた

しが一番初めに話したことは成立しないかもしれない。しかしわたしはそれを知らないで、その理法を得たわけである。

◉来世は決定されている!

例えば、これはちょっとバルドーのイニシエーションとも関係するわけだけども、人間が死ぬ前に、苦しい、苦しい、痛い、痛いと言いながら死んでいくと。そして死んだと。霊能者のとこへ行くと。

「あなたのおじいちゃんは天界へ行きましたよ。」

と。君たちはどう思うか。死ぬ寸前に苦しみの集積であった肉体を持って死んだ者が天界へ行くと思うか。当然これは地獄へと落ちる。ではだ、ガンの患者で食べ物が食べたくても食べられないと。そして食べたい食べたいと思いながら死んでいく魂があったとしよう。これはどこへ生まれ変わると思うか、君たちは。当

然、次の転生は餓鬼であると。では、年を取り、あるいは年を取らなくても、老人性の痴呆症あるいは若年性の痴呆症となり、記憶が途絶え、ものが考えられなくなり、情報に流され、刺激によって動く状態で死んだとしよう。これはどこへ生まれ変わるだろうか。君たちはわかるか。これは当然、動物へと生まれ変わる。同じように執着を背景とした場合、人間として生まれ変わり、あるいは純粋に論理性、平等性を持って死んだ場合、憤怒天へ生まれ変わると。そして、徳と共に快楽を求めて死んだ場合、これは戯忘の世界へと生まれ変わる。あるいは貪りを離れ、離貪した状態で転生した場合、梵天界へと生まれ変わる。あるいは、生存に対する全く欲求を持たない状態で転生した場合、無色の世界へと生まれ変わると。

　つまり、わたしたちが死ぬ寸前に、どのような心の状態で、どのような言葉の状態で、どのような身体の状態で転生するかということは、次の生を決定する絶対的現象であるということである。つまり条件ではなく、もう既に死ぬ寸前にそ

の人の次の生は決定されているんだということを理解しなければならない。

◉注がれる神聖なエネルギー

ここでいくつか、オウム真理教の教えが真理であり、そしてオウム真理教の発するエネルギーが神聖なものである証明をしたいと考えます。それはまず、十月のころだったか、これはニューヨークの信徒のおばあちゃんが、「痛い。痛い。苦しい。苦しい」と言って、この人はガンに侵され、そして苦しんでいたと。そして、モルヒネ、つまり麻薬を打ったとしても、一時的には止まるが、どうしようもない状態であったと。そのおばあちゃんを動かすこともできないと。そして、信徒さんは「何とかしてください」という相談があったそうだ。わたしは無償の布施を勧めた。ところがである。そのニューヨークの信徒さんが無償の布施をオウム真理教に送り、オウム真理教に着いてわたしがそれを知ったその日に、その

おばあちゃんは苦しみから解放され、安らかに息を引き取ったそうである。これは何かというと、その肉体の苦しみ、肉体の苦しみの地獄から解放されたわけである。

あるいは、八月の頭、これは肝臓ガンで苦しんでいた人がいたが、極限の布施、そして入院、特殊な治療等を行なうことによって、その肝臓ガンの細胞が完全に死滅して、その肝臓ガンのカルマが切れた瞬間に、その人は阿修羅の世界へと旅立ったと。つまり、人間より一つ上の憤怒の世界へと旅立ったと。もちろん、その人の死ぬ前の状態はどうだったかというと、例えば無意識状態になっても、わずか数カ月でだよ、マントラが出てきたり、あるいは詞章が出てきたりするような状態だった。そしてそのような状態までこの五蘊（ごうん）の意識が変わって、本来は餓鬼の世界へ生まれ変わらなければならないはずのカルマが、なんと憤怒天の世界へ生まれ変わったわけである。

このような例はたくさんあります。例えば、前回の十一月の三日のバルドーの

イニシエーションを受けた信徒さんが、不慮の事故で亡くなりました。そのとき、わき腹を切り、動脈から出血し、即死したそうだ。その彼女は苦しみ、縁の深かったサクラーのもとへ行き、そしてわたしのもとへ来たと。わたしは彼女がバルドーのイニシエーション、それから小乗のツァンダリー、それからオウムでいわれているほとんどのイニシエーションを受けてる人で、真面目に修行してる人だったから特殊な瞑想を与えた。その瞬間、その事故を起こした相手に対する恨みが消え、安らぎ、そしてポアされたと。彼女は人間としても修行者の子供として生まれ変わるカルマを持ち、転生しました。

これは、わたしが皆さんに感覚で話してるわけではないということだ。つまり、わたしは見、感じ、聞き、話してるんだということである。

今わたしは、祝福あるいは永代帰依祈願といったような形でエネルギーを移入している。あるいは飴のイニシエーション、ミラクル・ポンド等のエネルギー移入を行なっている。当然、これらのエネルギーの移入と同等に、それを使ってい

る人たちのカルマがわたしの中にどんどん蓄積されてくる。そしてそのカルマは——わたしは叩くことによって、あるいは七十度、八十度の熱を加えて焼くことによって——今消滅してます。そして、そのわたしがあなた方のカルマをしょい、消滅することが、あなた方の輪廻転生に対して、あるいはこれからの人生に対して、必ずやプラスになるということを確信して、それを行なっています。

◉在家信徒がなすべきこと

では、信徒であるあなた方は、何を行なえばいいのかということである。これはまず、ベースとなる八つの実践を行なうべきである。では、その八つの実践とは何かというと、まずグル、シヴァ大神に対する絶対的な心をもって帰依をすることである。帰依というのは何かというと、その教えを学び、考え、実践する。そして、供養すると。これは布施、奉仕のことである。同じように経典に対して

絶対の信を持ち、そして帰依をするべきである。これは何かというと、その経典を読み、考え、実践する、そして、その経典が広まるように法施の実践を行なうということである。次にわたしの弟子に対して帰依をするべきである。これはどういうことかというと、できるだけ道場へ通い、自己の疑問を解決し、そして奉仕活動を行なうと。これが、ベースの三つの実践であり、三つの功徳であると。

　では、第二段階の功徳は何であろうかと。これは残り五つということになる。それは、殺生を離れ、生き物すべてに対して慈しみを持つこと、優しい心を持って生き物と接すること。盗みを離れ、優しい心を持って同胞と接するということである。そして、邪淫（じゃいん）を離れ、異性を自己のものと見ず、心から和合して生きるということである。そして、第七番目は嘘を離れ、真理にかなって言葉を話すということである。そして第八番目は酒、タバコ、梅酒等の（薬物によって）自己の心を薬物によって乱さない、そして絶えず安定した優しい心を持って周りと和合するということである。

つまり、前者三つはあなた方のエネルギーを蓄えるということ、後者の五つはあなた方のエネルギーを漏らさないようにし、そして心を成熟させるという修行となっていく。つまり、グル、真理、そしてグルの弟子に対する絶対的な帰依を養い、その法を学び、考え、実践するという四預流支である。そして、この四預流支の在家の実践が、先程言った八つの功徳である。これらの実践をなすこと、これはすなわち四預流支とつながってくる。

殺生しないことをあなた方は悪業をなさないことと考えるかもしれない。それは正しくない。これは積極的に見るならば、殺生しないではなく、殺生をせず慈しむと。よって、悪業をなさないではなく、心に功徳を積むということなのだ。そしてわたしたちはこの肉体を持っていけるわけではないから、来世は心しか持っていけないから、その心をいかに成熟させるか、また心を成熟させることのできる、実践ができる功徳を蓄えるかということがポイントとなってくる。そして功徳を蓄えるその修行は、先程言った、グル、真理、そしてグルの弟子に対する徹

底的な帰依であると。それを漏らさず発展させるのが、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れ、妄語を離れ、そして酒、タバコ等の心を乱すものを離れるということである。

「そんなこと言っても麻原、俺はつらいよ」と。「それじゃ生きていけないよ」と言うかもしれない。まずはあなた方ができる、グルに対する帰依、次に真理に対する帰依、そしてサンガ、つまりグルの弟子に対する帰依の実践から一つ一つ下から固めていくならば、いずれはこの八つの実践ができるはずである。そして、この実践に到達するならば、あなた方の五蘊、つまり肉体、感覚、イメージ、意志、意識に蓄積されている悪業が増大せず、徐々に徐々に減少し、今日初めに話したように、痛みがかゆみへと変わり、そして最終的には苦しみから解放され、人間、憤怒天、そして戯忘天へと転生できるはずである。

◉今から死への備えを

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。死を見なくても死ぬ。死を見ても死ぬ。だとするならば、今から死に対して何をなせばいいのか、死に対して何を準備すればいいのか、死に対して何を実践すればいいのかしっかり考えて実践してほしいと思います。

そして、この輪廻転生を絶対的にするためにはどうしたらいいか。それは功徳、教学、そしてカルマ落とし、そしてイニシエーションを受け、しっかりと高い瞑想をすることであると。この四つを肝に命じ、この一生で自分自身の魂のベクトルを三悪趣から解脱へと、最終的にはマハー・ニルヴァーナへと向かうように心をチェンジしていただきたいと思います。

わたしも、あなた方のカルマをしょえるだけしょいたいと考えている。そして理想としては、肉体はボロボロでも心はそれに対して平然としていられる、真の

大乗の仏陀でありたいと。そして、すべての魂の苦しみが自己の内側に内在し、すべての魂が苦しみから解放され、マハー・ニルヴァーナに到達するまで、このサムサーラ、六つの欲の世界、苦しみの世界へと転生を続けていきたいと考えています。

第六話

修行——苦から楽への転化

（九〇年十二月二十六日　於・阿蘇シャンバラ精舎）

◉身・口・意を使った〝連想ゲーム〟

すごく涼しいね。いや、これぐらいの涼しさだと、裸だとちょっと肌寒いという感じだな。わたしが本栖湖（もとすこ）で修行したときは、氷点下一六度とか一七度になってたから、まあ、これぐらいちょうどいいんじゃないか。ひょっとしたら、それぐらいまでなるかもしれないね。実は、わたしはこういう寒い場所を探してたんだよ。いや、というのは、今日の説法の中にもあるけども四聖諦（ししょうたい）と関係あるんだね。四つの絶対的真理と。君たちは無智だから、まあ要するに、温暖な気候を望

むかもしれないけど。

オウム三唱

君たちは、「修行」という言葉、これをイメージしたならば、一体どのような連想が生じるだろうか。例えば、苦しい。修行？　大変だ。修行？　何のためにあるかわかんないと。あるいは、修行？

少しわたしの修行についてのイメージを話すことにしよう。修行、それは真の楽へ至る道である。そしてそれには十四の段階があり、その十四の段階のベースとなるものは布施であると。そして持戒と上がっていくと。そしてこの修行の最終地点は、広大無辺、絶対深遠なる心を作り上げることであると。そしてそれこそが本当の意味での、絶対的歓喜や幸福、自由をもたらすものであると。その途上で生じるいろいろな苦しみは、修行によって生じる苦しみではなく、それは自

分自身が本来内在している苦しみである。よって修行によって落とすということは、その修行のメリット、プラスそこでのカルマが落ちるわけだから、両方のメリットがあると。

ところが、例えばこれを君たちに質問する、あるいは外道、凡夫に質問すると、一体どのような答えが返ってくるだろうか。そして、これが生起なのである。

では、別のイメージ・ゲームをしよう。例えば「本」と。君たちは、何をイメージするだろうか。例えばスパイもの、マンガ、雑誌、あるいはアニメの本、あるいはグルメの本、あるいはセックスに関する本、あるいは、専門職の人は、専門職の、例えば機械の本や建築の本といったものをイメージするだろう。わたしの場合、本というと要するに経典、しかもその経典は解脱へ至るための経典、あるいは解脱を補助するための経典ということになる。これが生起なのである。

では、もっと別のものを連想してみよう。例えば「自由」。君たちはいろんなことがわがまま勝手にできるということを連想するであろう。例えば、自由のた

めにはお金が必要だし、自由のためには、そうだね、時間が必要だし、自由のためには空間が必要であると。

ところが、わたしにとっての自由というのは何かというと、一切のわたしを束縛するものから自由でありたいと。その束縛というものは外的束縛ではなく、内的束縛である。

例えばどういうことかというと、目の前に食べ物があると。その食べ物を見て心が動くと。心が動くということはその食べ物に支配されてるわけである。あるいは目の前に異性がいると。異性がいることによって心が動くと。心が動くということは異性に支配されているわけである。いや正確な言い方をするならば、食べ物や異性というものを使った悪魔に支配されているわけである。そういったものから完全に自由になりたいと。これがわたしにとっての自由である。

ではなぜ、一つ一つの言葉において、その連想される意味合いというものが違うのであろうか。それがカルマなのである。そして、それが来世を決定するので

ある。そしてそれが、今生を決定するのである。つまり、わたしたちの瞑想というものは、その連想ゲームを、身・口・意を使った連想ゲームを完璧に高い世界へと移行させる、完璧にベクトルを高い世界へと向かわせることが狙いなのである。

では、一つ一つ分析してみようじゃないか。その典型的な例は先程言った十四の徹底、あるいは八つの聖なる実践方法。まあ、君たちは十四の徹底についてあまり詳しくないだろうから、ここで『マハーヤーナ』でも取り上げた八つの聖なる実践方法、一般には八正道といわれてるものを検討してみよう。

◉ベクトルを高い世界へ向けて

まず、正見解。この正見解とは何かというと、正しい見解を持つと。正しい見解を持つとはどういうことかというと、この世の諸行はすべて苦であると。ここ

でいう苦というのは何かというと、死を超越できないものであるというふうに考えなさいと。これが正見解の根本である。

ということは、この正見解ということを聞いたときに、あるいは考えたときに即座にその思いが出てくるかどうかである。あるいはそういう思いで現象を見ることができるかどうかである。つまり、現世的なものの見方ではなくて、出家修行者として、あるいは、真理の実践者としての目でものを見てるかということである。

そしてそれにのっとり次は思索すると。この思索は、例えばこれは殺生に当たらないだろうか、これは偸盗に当たらないだろうか、これは邪淫に当たらないだろうかと思索すると。ということは、この正思惟の実践過程は、心における殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れといったバックボーンを完成していく道である。当然心が殺生、偸盗、邪淫から遠離するわけだから、行為においても殺生、偸盗、邪淫から遠離することになる。

　では、次の正語はどうであろうか。これは妄語、綺語(きご)、悪口、両舌という口の四つのカルマを離れ、心に真実を語り、真理を語り、そして優しい言葉を語り、和合させるような言葉を語り、必要のない言葉を語らないという実践過程である。これはまさにデーヴァ界の神々、あるいは梵天界(ぼんてんかい)の神々の言葉である。だとするならば、これは同じように高い世界へと移行する言葉の統御をすることになる。

　では、次の正しい生活、この正しい生活とは何であろうかと。これは勤精進(ごんしょうじん)をするということである。勤精進とは何かというと日々の生活においてとにかく必要でないことをやめ、そして七覚支の実践を行なうと。覚支の目的はもともと仏陀(ぶっだ)に至るための道であるから、当然これも高い世界へのベクトルを表わすことになる。

　では、次の正しい行為とは何であろうかと。これはまずグルに対する絶対的帰依の修行、あるいは真理に対する絶対的帰依の修行、あるいはサンガに対する絶対的帰依の修行、あるいは生き物を殺さないで慈しむと、偸盗しないで布施の実

践を行なうと、そして、邪淫を離れ、人と親和するといった実践であると。ということは、これは何の世界を表わしてるかというと、当然梵天の世界を表わしてると。ということは、これもまさにベクトルを梵天界へ向けた修行法ということになる。

◉善法を増大させ、悪業を断じる

では、次は正二正勤（しょうにしょうごん）二正断（にしょうだん）ということになる。これは、何かというと、今なしている善法を増大をさせ、そして今まだ実践できない善法を増大させることができるように思念すると。

例えば、例を挙げるならば、これは詞の修行がある。詞というのは何かというと、あなた方が唱えている詞章のことである。例えば、その中にはマントラも含まれていると。今帰依マントラを唱えている人が、その帰依マントラを、一日例

えば三千回唱えてる人が、一万回、二万回と唱えるように努力すると。これが今なしている善法を増大させるということである。
そして、この今帰依マントラ、ヒナヤーナの帰依マントラをなしている人が、例えば、次の大乗の発願を二週間で終わらせるぞ、十日で終わらせるぞ、早く今の帰依マントラを終わり、次は大乗の発願の詞に入ろうと。これが善法を増大させるということである。今なしていない善法を増大させるということである。
そして、今なしている悪業、これを滅すると。これは例えば、ドンブリ飯をたらふく食って、その他にいろんなものに、食い物に心が動くと。これを例えば、少しずつでもやめると。ね。そして、十の戒め、あるいは三つの布施に対してできてない部分を検討し、できるだけできるように努力すると。これが、今なしている悪業を断ずるということである。
そして、未来において生じるかもしれない悪業を断ずるとはどういうことかというと、例えばステージが高くなり慢に陥り、プライドに支配され、グルの意思

がわからなくなり、結局真理から逸脱するようなそういう心の働きが生じる、例えば先輩を見ると。先達を見た場合、その先達を恥じると。そして、それは自己の内側にあるプライドに対する教師であると見つめ、そして、そういう行為が起きないように、例えば努力すると。

これが二正勤二正断である。ということはこれも、当然カルマの統御となるわけだから、そして功徳が増大するわけだから高い世界へのベクトルということになる。

◉最高のデータの入れ替え

では、次の正記憶修習とは一体何であろうかと。これは例えば、経典を徹底的に記憶すると。そして、それを何度も何度も繰り返すと。あるいは、少し複雑な思索を何度も何度も繰り返すと。ということは、これは智慧(ちえ)の増大、そして思索

の発達ということになるわけだから、これは他の日本仏教と違い、オウム真理教の教えでは知性の優秀性というのは、高い世界への転生の条件となっている。それは当然である。

動物と例えば人間を比較したらどうであろうかと。あるいは、餓鬼のカルマを持っているアフリカの難民と今の日本人との知性を比較したらどうであろうかと。歴然としていると。つまり、この知性というものは徳の現われである。ということは、この今の人間のレベル以上の思索の力、智慧の力を有するということは、これも同じようにベクトルを戯忘天界（ぎほうてんかい）、あるいは梵天界へと向ける道である。

そして最後の正サマディ、この正サマディとは完璧に人間を超え、神の世界を知り、そして梵天界の世界を知り、ニルヴァーナを知り、マハー・ニルヴァーナを知るということになるから、これもまさに上方へ向かったベクトルということになる。ということは、例えばこの聖なる八支の道、これはまさに最高のデータの入れ替えということになる。

◉成就――その意味合い

実は、わたしは去年から、野球のイメージがずいぶんと出てきている。例えば、勝手に足が上がってピッチングフォームのまねをしたりとか、手首の返しがどうこうとかいうデータが出てきたりとか。まあ近頃はかなり収まってきてるけども。それは何かというと、よく考えてみると、わたしは野球というものを成就してるわけだね。それは小学校一年生から始まって、例えば野球を聞く、あるいは自分でやるといったようなことが約二十年間続いたと。平均三時間それに費やしたとして、二万時間以上の時間を、要するに野球という身・口・意の行為によって瞑想してるわけである。では、一つの瞑想で、わたしは二万時間達成したものがあるであろうかと。それはまだないと。今生ではね。ということは、わたしが最も人間として生まれて成就したものは何かといったら、野球である。そしてそれがどんどんどんどん瞑想が深まって、深い深い潜在意識にデータとして根付いてる

と。

実はわたしが今死んだ場合、わたしは人間の世界か阿修羅の世界へ転生することになっている。そして、わたしが人間の世界へ転生したら、来世は巨人軍のエースとして登場することになっている。いやそうなんだよ、これは。そのときの顔がどういう顔であるかまで、しっかりとわたしは覚えてます。まさに情けないと。阿修羅の世界へ生まれ変わったら、修行者として、そして王として君臨するようになるだろう。これが成就なんだよ。

そして、わたしはそれを知ったとき、しまったと思った。これは、今のその野球のデータ以上に、人間界へ転生するときも、修行者として転生するためにデータの入れ替えをしなきゃならないと。つまり、人間、転生となったとき何が生起するのかと、野球じゃしょうがないと。まあ、一つの瞑想を二万時間する必要はないから、とにかく瞑想のトータルをもっと多くの時間、例えば三万時間、四万時間、五万時間とやらなければ、これは勝てないなと考えました。

今日わたしが話したかったことは何かというと、ちょっとね、難しい話だけど、すべてはあなた方の内側にあるものが生起するんだと。例えば、わたしは今日、下はパンツとこのクルタと。上はジャケットとクルタとTシャツと。で、外を少し歩いたわけだけど、大変涼しい気持ちいい空間であった。

ところが、君たちは寒い寒いというデータがあると。これも同じように、例えば氷点下何度に対して心がどう動くかということなんだね。つまり、自分の内側にあるデータしか生起しないんだということだ。そして、その内側のデータを苦しみから楽しみに、苦しみから楽に転化していくことが修行なんだよ。そして、それを達成することができるのは修行しかないんだよ。そして君たちはその絶好のチャンスを得てるんだよ。これが今日、わたしが君たちに話したかったことだ。

◉驚くべき布施の効果

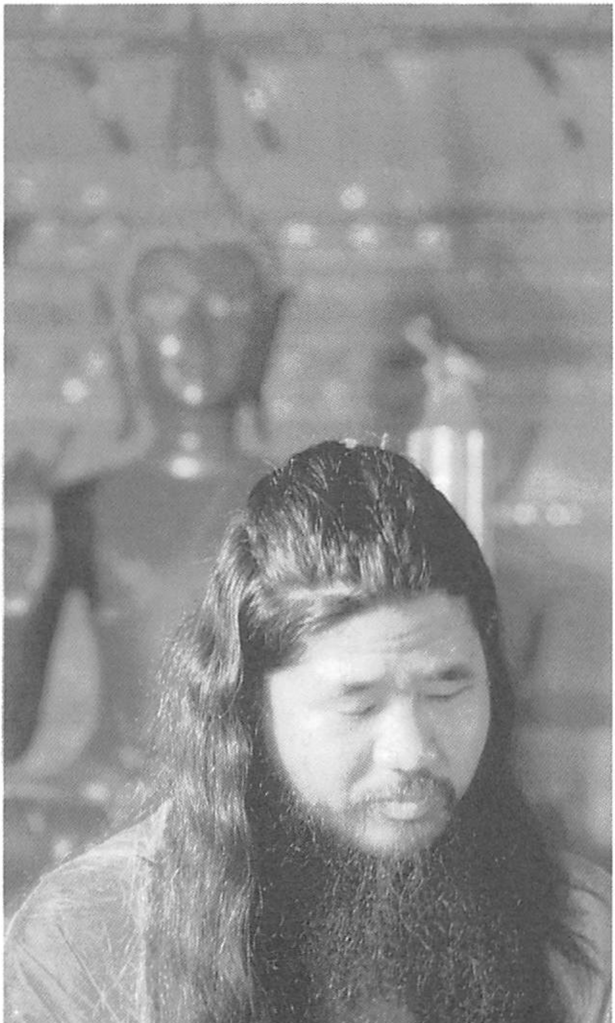
最後に、布施の重要性、これについて一つお話をしましょう。実は、Tのお父さんが大怪我をなさったと。これはどういうことかというと、仙台支部のわたしの説法会に、あまり信のない信徒が四人来たと。その中の一人がお父さんであったと。そして、わたしはそのお父さんと、それからもう一人の女性にね、布施を勧めたと。で、お父さんは、その日仙台支部に干し柿を持ってきてたわけだけど、それを祭壇に上げようかどうかということを聞かれて、いや、それはわたしが受けようと言って、わたしが車の中に乗っけて、東京本部の方に運んだわけだけど、その途上、十一時ころ、いきなり心臓と呼吸が、わたしの心臓と呼吸が停止して、バルドーに放り出されたんだね。そのバルドーが性欲のバルドーであったと。

で、それから東京本部に着いてだったかな、着く前だったかな、たぶん着く前だね、自動車電話に電話があって、で、その四名が事故に遭って三人が即死と。

そしてお父さんだけが重体だね。で、即、Tに電話をして、お父さんのところにウパーリと一緒に行かしたわけだけど、で、意識がまだあまりはっきりしないと。で、わたしは欲如意足を聞かせなさいといって、欲如意足を聞かしたわけだ。

その理由というのは何かというと、どうもその死にかかってる人に欲如意足聞かせると効果があるんだね。例えば、名古屋の信徒のガンの末期の人で、もう死にかかってだめだと言われた人に欲如意足聞かしたら、それから復活して、完全かどうかわからないけども意識はかなり戻ってるとかね。その今回のTの例もそうであると。で、それと同時に、即お母さんがそれから百万円を布施したわけだけども、そういうことがあって、お父さんの意識が戻ってきてるんだね。

つまり何を言いたいかというと、布施というのはそれだけ効果があるんだということ。それから、修行というのはそれだけ効果があるんだということだね。わかるね。そして君たちはより強烈なデータを入れてるわけだから、事故に遭っても死なないはず。ところが近ごろ事故があって怪我をする人が出てきてるけど、



その人たちは修行してないんだとわたしは思います。わかるね。修行したら死なないし、怪我もしないはずです。いいね。

◉まず土台から

今日から布施、持戒の徹底を行ない、クンダリニー・ヨーガの成就をしている者はマハー・ムドラーに向かって全力で進みなさい。いいね。それからラージャ・ヨーガの者はクンダリニー・ヨーガに向かって全力で進みなさい。いいね。それからまだ成就してない者はラージャ・ヨーガに向かって全力で進みなさい。いいね。

じゃあ、戒が守れない場合は、どうしたらいいんだと。それは守る必要はないと。また、妙なこと言い出したね。そのときには、わたしが信徒に対して説法している八つの功徳の順番でいきなさい。

それは何かというと、まずグルに対する帰依、これを実践しなさい。グルに対する帰依とは何かというと、要するにグルの言ってることを徹底的に実践するということだ。それができたら次は真理に対する帰依。真理に対する帰依とは何かといったら、要するに教学をし、そして法施をするということだね。真理を広めるということだ。それができたら、次はサンガに対する帰依、サンガに対する帰依とは何かといったら、このサンガをできるだけ良くしようと、そして多くの成就者を出そうと、そして、布施、あるいはアドバイスその他の多くの功徳を積もうと。これがサンガに対する帰依である。この順番で進めていくと。

そして次は、殺生をしないと。偸盗をしないと。ここまで来ると、みんなが引っかかってる、例えば邪淫も乗り越えられる。邪淫が乗り越えられると、次は妄語が乗り越えられる。妄語が乗り越えられると、酒やタバコが乗り越えられるということになる。

ここで面白いと思うだろ。なぜ、例えば邪淫をしないと妄語が乗り越えられる

かわかるか、君たちは。妄語というものは、心が弱い状態で生じる嘘じゃないか、どうだ。じゃあ、性エネルギーを保全して、そして、帰依がしっかりできてればエネルギーが上昇し、エネルギッシュになるだろ、どうだ。そのときに嘘をつきたいと思うだろうか、どうだ。ということなんだよ。一つ一つはそういう流れになってるんだね。よって、できないときには土台から固めなさい。いいね。

第七話
真の幸福をつかめ！　情報に惑わされるな
（八九年十一月三十日　於・和歌山県　出張「真理の集い」）

◉予言適中！

オウムの麻原です。今日は「真理の集い」ということで、これから、あなた方の社会的な動き、それから、どのようにしたらあなた方が幸福になれるかについて話したいと思います。

わたしは実は一九八六年にね、いろいろと予言をしたわけだけども、天皇が死にますと、天皇家の葬式があったからたぶん死ぬと思うよという話をして、これは外れた。これはちょうど今年の二月、高松宮ですか、が亡くなるヴィジョンだっ

たんだね。で、後のことについては、今のところ完全に適中しています。
じゃあ何が適中したかというと、例えば富士火山帯の爆発、それから円がもっともっと高くなると、そして一九九〇年くらいまでには百円代に突入するという、そして日本の軍国主義化ね。まあ、その他にもいろいろなことは言っているわけだけども、例えば近ごろでは三原山がまた再噴火するよと言って爆発したし。
で、この中には食養をやっていらっしゃる方もかなりいらっしゃるわけだけど、大変素晴らしいことだと思いますね、わたしは。それは食養というものは、スヴァディスターナ・チァクラ、人間の下から二番目にある、この霊的センターを開発するんですね。そして浄化します。そして、ここのチァクラには動物界と人間界に生まれ変わるためのエネルギーが込められています。だからあなた方が菜食をなさることは、また来世においても人間界に生まれ変わる準備をしていると、そういうふうにお考えになればいいと思う。

◉それが幸福なのか？

で、ちょっと、あなた方に聞きたいんだけども、今後核戦争が起こると思われる方はどれくらいいますか、手を挙げてください。わたしは二〇〇三年に確実に核戦争が起きると考えています。そして、それを何とか回避するために、今オウムはあります。

で、どのようにしたら回避できるのかと。まあ、みんなでワッショイワッショイと戦争反対もいいかもしれないけども、それはもう以前からズーッとやり続けているわけだね。で、わたしたちはなぜ、その核戦争をしなければならないかというと、わたしたちが小さいときから植え付けられてきた、要するに観念というか、イメージというものが、自己の愛するものは守りなさいと、自己の利益は守りなさいと、そして他の利益というものはどうでもいいんだと、そういう教育を受けているわけだね。

例えば、小学校に入ったときから、人より良い成績を取ったら誉められると、ね、人より悪い成績を取ったら怒られると、ね。例えば、良い中学に入り、良い高校へ入り、そして良い大学に入ると、そして良い会社に入ると。良い会社に入ったならば、上の人の言うことを聞いて、できるだけ出世をして、そして一生を終わると。あー、あの人は立派だったんだと、あの人はこの高校を出て、この大学を出て、この会社に入って、ああいう大きな家に住んで、それで死んでいったんだと、ね。で、これをあなた方は幸福だと教え込まれているわけだ。

◉前世・今生・来世——三世を見通す力

しかし、「本当の幸福なのか、それは」とわたしは聞きたい。それは、わたしは三世を見通す力を持っている。三世を見通す力というのは、例えばあなた方が前世でどこで生まれ、どこで死んで、今生でどこで生まれ、どこで死んで、来世

どこで生まれ、どこで死ぬというね。
「麻原、それは証明できるか。」
と。
　わたしは前世において二つの証明をしている。一つはエジプトでわたしが大臣だったときの、まあ、これはイムホテップといわれているね。何年のころ、わたしはどういうことをやったかと、そのときわたしは総理大臣でこういう事業をなしたんだよと、まあピラミッドをわたしはつくったわけだけども。それから、もう一つの生はギリシャの王であったと。そのときわたしは戦争を回避してどういうことをやったんだと。他にもいろんな生を思い出しているんだけども、証明のつくことだけを今はやっている。
　あなた方にも同じように前世があり、それから今生があり、来世があるわけだ。ところがあなた方が教えられているものは、今生でいかにいい生活をし、そして、死のショックを受けて来世で地獄に落ちるかとか、餓鬼に落ちるかという人生観

を叩き込まれているわけだね。

◉来世は地獄・動物・餓鬼？

じゃあ、なぜあなた方が地獄や動物や餓鬼に生まれ変わるんだと、わたしが言い切れるかというと、それはこの現象を見なさいよと。ね、この中にはいろんな方がいらっしゃるだろうけど、五十年生きた方は五十年前と今を見なさい。四十年生きた方は四十年前と今を見なさいと、三十年生きた方は三十年前と今を見なさいと、二十年生きた方は二十年前と今を見なさいと、ね。あなた方は確かに物質的には豊かになったよ。しかし、あなた方は心がすさんでいるね。

「一体じゃあなぜ麻原、すさんでいるんだと言えるんだ。」

と。

例えばね、本当にこの人は信用できるよと、わたしはこの人が大好きだよと、

心を割って話せる人が、一体何人いるんだ、ね。いいですか。あるいは、本当にわたしは幸せですよと、幸福ですよと、何にもいらないくらい幸せですよと言える人が何人いるんだ。あなた方はどんどんどんどんどんそういうことが言えない状態になってくるわけだね。これは、最後に核戦争の話になっていくわけだけど、ちょっと待ってね。

そして、例えば、物だけは集まったと。たくさんの物に囲まれて、わたしたちは死んでいくんだよ。ところが死んだ段階で、わたしたちの持っている、その大きな家もなくなるし、学歴もなくなるし、ね、つまり、形によって尊敬していた人というものもなくなってくるよ。何が残るんだといったら、わたしたちの魂しか残らないんだよ、そこで。

そして、わたしたちがいい高校へ行くため、いい大学へ行くため、それから、いい会社に入るためのたくさんの悪いことをやったと、あるいは人を押しのけたと、ね。で、会社に入って、いろんな悪いことをやったと、その悪いことだけが

残ってくるわけだ。カルマだ、それが。それで、その悪いことをやったならば、必ず悪いことは返ってくるね。あなたたちは、何を持って来世に行くのかといったら、膨大な悪業という借金を持っていくわけだよ。と、そこは当然来世において、清算をしなければならない。

◉核戦争へのプロセス

じゃあ、どうして今の話が核戦争と結び付くんだと、ね。わたしたちの日本は小さい国です。しかし、日本人というのはすごく優秀な民族なんだね。何が優秀かというと、それは、この現象界において、イメージしたものを現象界に現わす力、これがすごく優秀なんだよ。だから小国でありながら、経済的にすごく豊かなんだね。それから、よく働くしね。

しかし、資源がないと、資源がないがゆえにその資源を確保しようとして、中

国や、あるいは今の韓国とか北朝鮮に行って、戦争を仕かけたのが始まりでしょ、これは、ね。何を言いたいかといえば、先程の高校、いい大学、いい会社のプロセスと全く同じことなんだね。つまり、自分たちが豊かになるためには、他国の人が苦しんでも構わないという発想のもとに、第二次世界大戦は勃発したわけだ。大東亜共和圏なんていう変なあれを作ってね。

そして、今の大国といわれているソビエトも、マルクス・レーニン主義という、一つの宗教だね、これは思想と。思想と宗教は同じだから、一つの宗教を背景として、その人たちの教えを広めた方が幸福なんだというエゴのもとに、強引に武力で介入していると。これがソビエトの実情、ね。アメリカは同じように自国の資本主義社会における優位な立場を保つがために、やはり、同じように武力で介入していると。これも先程のいい高校、いい大学、それからいい会社というプロセスと同じなんだよね。

そうすると、最終的にはどういうツケが回ってくるかと。悪業をなしたならば

必ず悪業が返ってくる理論と同じように、このソビエトとアメリカというのはいずれ滅びるでしょう。しかも、それは今三十歳くらいの人だったら、間違いなくソビエトやアメリカが滅びる場面を見ることになるだろう。

そして、日本も同じような状況になりつつある。それは第二次世界大戦でいったんわたしたちは謙虚な気持ちになったと。そして、一からやり直し、一生懸命働いて、昭和三十年以降の高度成長時代を迎えたと。ところがあまりにも、外国に対してね、経済的に侵略しすぎたがために、結局今みたいな状態で、貿易不均衡だと、「もっとどうこうしろ」という問題で、徐々に徐々に外国が壁をつくってきたと、ね。

そして最終的には、あなた方もあと五年、わたしは一九九三年と言っているわけだけども、あと五年後に起こる、再軍備という形を取って、外国と力でぶつかり合うしかないような状態まで追い込まれるだろうね。それはだよ、例えば今一ドルが百三十、だいたい四円から七円くらいまでを行ったり来たりしているね。

これが百円になったならば、例えば日本からアメリカに輸出する場合だよ、三割以上の損失が出るわけだよ。そうすると、三割以上の損失をして、利益が出るものがあるかといえば、ほとんどないわけだ。そうすると、まず日本はアメリカに頼っているわけだから、アメリカとの貿易はだめであると、ね。

で、後進国は防備が堅いというならば、わたしたちは作ったものが売れない状態が来ます。そうするとね、作ったものが売れない状態が来るということは、それを買わせるしかないわけだ。じゃあ、買わせるためには何かというと、力によって買わせるしかないわけだね。それはちょうど、第二次世界大戦と同じ形だね。あるいは逆に、日本にはたくさんの金が余っているから、軍備という形によって皆さんの金を引き出して、軍備をするということによって、国家が潤うというもう一つの方法論を採るかもしれない。まあ、方法論はこの二つしかなかろう。いずれにしろ一九九三年には再軍備だ。

そして、あなた方はどんどんどんどんどんどん苦しい状態が来てだよ、来たときに、一

体あなた方に何が残るかという問題がある。今は物質でごまかされているよね。例えばテレビを見て楽しむ、あるいは雑誌を見て楽しむ、あるいはマンガを見て楽しむ、あるいはおいしいものを食べて楽しむと。いろんな楽しみがあるよ。その一時一時、一瞬一瞬で、あなた方は自分の心というものをごまかして生きてきているわけだ、ね。

ところが、経済的にゆとりがなくなってくると、物質的にゆとりがなくなってくると、ごまかす相手がいなくなるわけだよ。それはちょうど、友達にたとえることができるね。百人の友たちがいて、その友達とトークしているときには、話をしているときには、時間がつぶれると、ね。その百人いたものが五十人になり、三十人になり、二十人になり、十人なり、ゼロになったときに、わたしたちは時間を持て余すようになるわけだ、ね。そうすると、持て余したときに、わたしたちの心の中に一体どういうものが存在しているかというと、虚無しかないわけだね。空しい、悲しい、寂しい、苦しい、しかないわけだ。

　ところがあなた方は、それに気付かされないようにして、どんどんどんどんどん成長していっているわけだね。いいですか。つまり、考えないようにさせられているわけだ、ね。じゃあ、なぜ考えないようにさせているんだというと、あなた方が普通に考えることができたならば、これは今の日本の政府にとっては、大変だからだ。

　だって、今やっていらっしゃることは、まだ第二次世界大戦前と同じように、国歌を歌いなさいよと、国旗を掲揚しなさいよと、それから修身をやりなさいよと言っているわけでしょ。それから、靖国神社という一つの大きな宗教があって、この宗教にあなた方は傾倒しなさいと言っているわけだよね。あなた方はそれを、新聞で別の形で見、テレビで別の形で見、ね、印象付けられているわけだ。

　それから、もう一方では、無宗教というものは素晴らしいというふうに言っているわけだね。で、一方では天皇陛下のことが、いつもあちらこちらで出てくるわけだ、こういう形でね。

そうすると、あなた方の心の中には、しょっちゅう見ている情報の総量によって、すべては決まるわけだから、例えば靖国神社とか、天皇陛下とか、例えば修身とか、あなた方が望むと望まざるとにかかわらず、真理とかけ離れたものが、情報として残ってくるわけだ。そうすると、最後は天皇の一令によってね、号令によって、「さあ、戦争をしましょう」と言われたら、だれも反対する者はいなくなるだろうと。これが、俗にいうところの心理操作なんだね。

そして、原爆も同じだ。国民みんなが反対して、そんなの絶対使っちゃいけないという心の状態だったらいいわけだけども、例えばテレビを見てごらん。ねえ、ここに悪党がいて、悪党をピストルで撃つ場面がしょっちゅう出てくると。あ、悪い人間は殺してもいいんだと、自分を害する人間は殺してもいいんだと、自分を排斥する人間は殺してもいいんだという発想が出てくるでしょ。それをあなた方は、小さいときから植え付けられているわけだ。

そうすると、日本では困ったと、もう日本では生きていけないという段階になっ

たときに、さあ、じゃあしょうがないから、原爆でも打ち込もうかと言ったとき、だれが反対するかというと、だれも反対しないよ、それは。あっ、もう困ったから、それはこれしかないんだということになってくるね。

◉観念を植え付けられて

あなた方は小さいときから、例えば真理であろうとなかろうと、宗教というものは何とかであるとか、例えば政治というものは何とかであるとか、そういう観念を植え付けられてきているから、あなた方に真理とか幸福とかいうものは、なかなか得られないものなんだね。わかりますか。そして、あなた方が気付いたときには、もう終わっているわけだ、すべてが。そうでしょ。

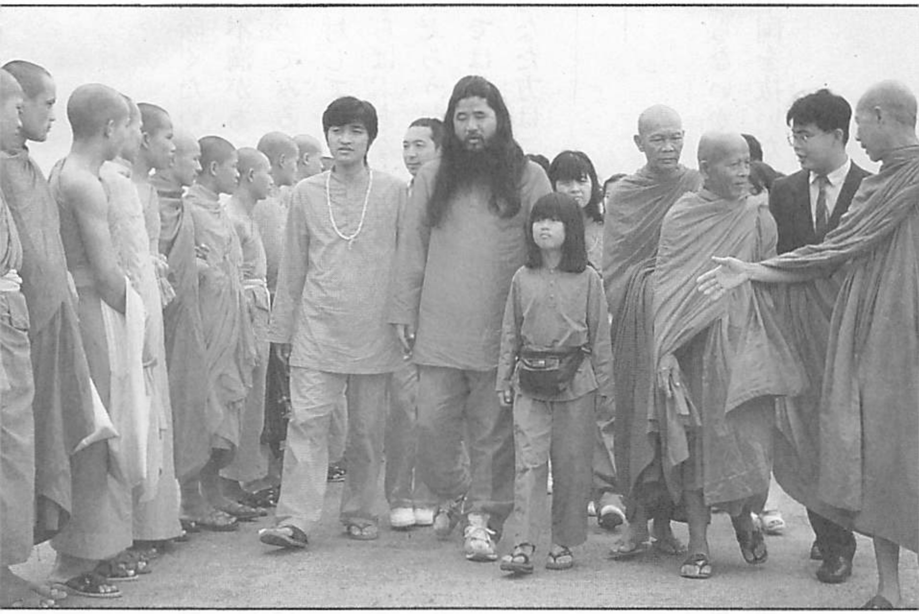
じゃあ、なぜそう言い切れるんだといったら、昭和三十年代の安保闘争を考えてごらんなさい。あのころは戦争のまだ余韻が残っていたから、まだ軍隊はだめ

だと、自衛隊もだめだとそういう力があったよね。ところが、五年、十年、二十年かけて徐々に徐々にわたしたちの心は洗脳されてきて、今では社会党ですら、自衛隊OKということを言おうとしているね。それから、教育にしろそうでしょ。

◉正しいものの選択

じゃあわたしたちにはどのようにしたら正しい道を歩くことができるか、幸福になれるんだと。あるいはどのようにしたら、わたしたちはそのマスコミュニケーションの膨大な情報の量から、選択することができるんだ、正しいものを、という問題になってくると思うんだよ、ね。

わたしはそれは案外簡単だと思うんだな。それは何かというと、例えば二千五百年前、釈迦牟尼(しゃかむに)が登場なさって釈迦牟尼がお説きになった法があると、ここに真理があると。例えば、普段の生活をしていて、あなた方が苦しみがあって、そ



の苦しみを取り除くための何かの方法があったら、それにトライしてみると、ね。例えば政治的に不満があったならば、その不満の原因を考えて、それを取り除くような行動を取ってみると。こういうふうに、つまり、あなた方が今見ようとしていない部分に対して目を向け、そしてあなた方がそれに対してトライするならば、挑戦するならば、あなた方には必ず、最終的な真理、あるいは幸福というものがやってくるだろうね。

しかし、そうではなくて、あなた方が膨大なる情報によって、もし、押し流されたならば、あなた方はこの時流というものに押し流されてしまうだろう。

◉知らぬ間に——

あなた方は知らないかもしれないけど、今の自衛隊のね、軍備力というものは、アジアではね中国を抜いたならば、ナンバーワンなんだよ。知ってましたか、こ

れは。だから「自衛隊」というものはとんでもない言葉のあれであって、実際にはものすごい軍備を持ってます。だからそれはアセアン諸国などでは、よく批判の対象になるよね、もうこれ以上軍備は持つなと。

あなた方が知らないうちに、一歩一歩と確実に軍国主義の波が押し寄せているわけですね。近ごろ見てわかるでしょ、例えばあの共産党の盗聴事件に対してもね、国家は堂々と警察は何の処罰もしなかったよね。つまり、あなた方はなめられ出しているわけだな。

そしてもう一つ、テレビを見てごらん。あなた方の大好きな、食欲と、性欲と、暴力の情報しかない。いつもでしょ。あと、スポーツか。そして、あなた方の心を瞬間瞬間の享楽に結び付けることによって、心を実際の世界から引き離している。これはヨーガのテクニックでもあるわけだけどもね。すごい理論だとわたしは考えている、ね。いいですか。このままいくと、必ず軍備、それから核戦争が起きるでしょう。それを救うためにはね、力が必要なんだよ。相手も力を持って

いる。だが、こちらもそれを食い止めるだけの力が必要なんだよ、ね。で、力が充実した段階で、戦争に反対しましょうよというやり方をしないと、すぐつぶされてしまうんだよ。そうでしょ。

例えばね、あなた方が見ている新聞の内容、あるいはテレビの内容の中で、どれほど真実があると思うか。ニュースで流されている内容の中で、どの程度真実があると思うか。

ね。じゃあ、なぜ真実じゃないと言い切れるかというと、例えば今、中曽根首相から竹下さんに移ったわけだけども、中曽根さんの口で吐いたことと実行とを見てごらん。いつも嘘八百言っていて、それでも総理大臣というあなた方の象徴でしょ。しかし、あなた方はそれすら変えることのできない弱い立場にあるわけだよ。だからわたしは、日本は民主主義ではないと思っているね。マスコミ主義だと考えている。でしょ。あなた方がもし、十人のグループだとしてだよ、中曽根さんがいて、あなた方はリーダーにしますか、彼を。しないでしょ。しかし、

十人のリーダーになれない人間が国家のリーダーとしては成り立つわけだ。大嘘をついて、平気で右で言っていること、左で言っていることは違う。これが今の日本だよ。
で、その総理大臣のもとにマスコミというものは統制されているわけだからね。そうしたら、そのマスコミが真実を言っているか、嘘を言っているかよくわかるよ。いいですか。

◉真の幸福をつかめ！

だから、わたしたちが真の幸福をつかむためには、まず気付かなければならない。わたしたちの周りに真理はないんだなと。そして、それに挑戦しなければならない、ね。ある人は宗教に興味を持つだろう。ある人は政治に興味を持つだろう、ね。ある人は文化に興味を持つだろう、ね。いいですか。そして、もう一度

あなた方の心のプロセス、一体わたしはいつも何を考え、どういうふうに行動しているのかなと。その行動パターンをよくお考えになって、それが本当にあなた方の望んでいる行動パターンであるかどうかを解析なさったならば、あなた方には幸福が約束されるでしょう。

それはね、わたしは「死」というものが、全然怖くないんだよ。なぜ怖くないかというと、来世も知っているし、その次の世も知っているし、ね。あなた方も、真理を少なくとも三年から五年実践してごらん。来世がわかるし、前世がわかるし、そして、この世に何のために生まれてきたのか、自分はどうしたら本当の意味で高い世界に行けるかということがわかるはずだからね。

◉死後の世界

はい。では最後にね、死後の世界について少し話そうかね。わたしたちは肉体

を捨てると、五大エレメントに還元されるわけだけども、その五大エレメントというのは難しいから、一般的にいわれているわかりやすい話をしましょうね。
まず、五大エレメントに還元された後、黒いドットがドーッと押し寄せてきます。これはカルマだね。これが引いた段階で、本当にクリアな状態が来て、それからしばらくはボーッとした状態が続くわけだ。三日とか一週間とかいわれているけど、わたしは一週間説を採っています。それから二週間くらいは、あなた方にとってボーッとした状態か幸福な状態、あなた方の功徳が現われてくる状態。そして、それから次の二週間くらいは、あなた方の悪業、いわば恐怖のいろんなヴィジョンが出てきます、ね。
そして、その後、仏教でいう閻魔大王が登場するわけだね。閻魔大王があなた方のカルマを量ります。あなた方が例えば宗教心があれば、そのときにあなた方の信じている人がいらっしゃるでしょう、ヴィジョンとして。例えば空海を信じていれば空海が出てくるでしょうし、例えば新鸞を信じていてば新鸞のヴィジョ

ンが出てくるだろうし、例えばイエスを信じていればイエスが出てくるでしょう、ね。ただしこの、例えばあなた方が信じていらっしゃる方が、正しくなければ何も出てきません。そこであなた方は裁きを受けるわけだ、ね。

そして、ある者は地獄の世界に落ち、ある者は餓鬼の世界へ落ち、ある者は動物の世界に落ちると。そして、ある者は人間の世界へ行き、ある者は阿修羅の世界へ行き、ある者は神々の世界へ行くという形になります。これが、わたしたちの六道輪廻(りんね)なんだね。

修行者はどうなるかというと、このボーッとした一番初めのね、死後一週間の間にだいたい色界、色界とは何かというと、絶妙な磨りガラスみたいな物質でできた綺麗な世界があるわけだけど、そこへ転生するか、あるいはニルヴァーナに入るか、あるわけだね。いいですか。これが死後の世界です。

だから転生したら、また例えば人間界に生まれるとしたら、そのちょうど受精した時期に、あなた方の生命は宿ります。そして、あとはもう知っているよね。

現代科学と同じように、胎生を過ぎて、出産が終わって、沐浴からこの世に誕生するという形を取るわけだ。だから、わたしたちが考えなければならないことは、わたしたちは必ず死ぬんだということ、ね。で、生きているうちはできるだけたくさんの善いことをして、できるだけ争いごとをしないで、世の中を平和にして去っていくと。これがわたしたちにとっての、最高のカルマなんだね。

超越神力ＰＡＲＴ２（前生を知れ！死生智の秘密）
――あなたの持っている本当の力

一九九一年十月二十六日　初版発行

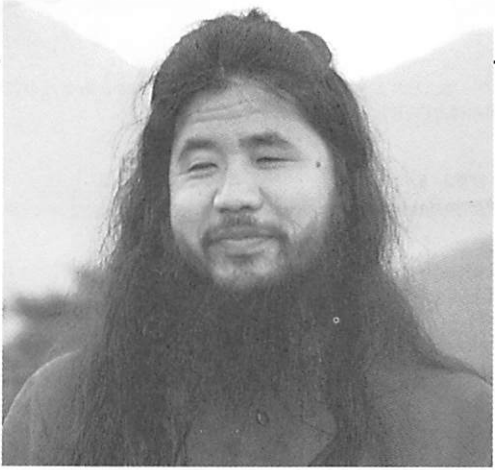
定価　九八〇円
著者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　　　石井久子
編集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電話　〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二―一〇九三二五

ISBN4-900497-76-2　C0014　P980E

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『超越神力PART 2』読者係」までお送りください。

〒168　東京都杉並区宮前3-8-11
オウム出版「『超越神力PART 2』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany



オウム真理教

新しい"あなた"との出会い

二千五百年の時を経て甦った真理がここにある!

もっと明晰な頭脳があれば……
もっと記憶力があれば……
もっと集中力があれば……
わたしたちが願ってやまない潜在能力開発の夢を、
オウム真理教は独自の「仏教・ヨーガ」メソッドによって
あなたに贈ります。



古くから伝わる仏典やヨーガ教典によれば、聖者と呼ばれる人々は、この世のすべてを知り尽くし、心は常に安定し、望めばかなわぬことがないという、いわゆる〝神〟のような存在であったという。しかし、彼らとて最初からスーパーマンであったわけではない。〝長く厳しい修行の後、これらの力を得た……〟と教典は語っている。

すべてを知り尽くした最終解脱者、麻原彰晃尊師が、数多くの技法の中から、忙しい現代人に最も適した修行法を厳選し、あなたの内側に秘められた素晴らしい力を、早く、しかも確実・安全に引き出してくれる！

◆

※資料請求について

資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等詳しい資料をお送りいたします。

キリトリ線

超越神力 PART 2

資料請求券

超越神力

PART 2

前生を知れ！死生智の秘密





麻原彰晃

ISBN4-900497-76-2 C0014 P980E 定価980円（本体951円）